女學雜誌

明治三十一年七月二十五日發兌

第百六十四號

東京閨之社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第百六拾四號

目錄

喜右衛門か妻



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子の迷信

「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神やまもらむ。」陋なる哉、世の人、平生誠心なく、たゞ急に臨みて神佛に祈る。富貴を祈り、安全を祈り、心願成就を祈り、無病息災を祈る、その神を拜するは、祈願する所あるに由る也、私慾あるに由る也、迷信あるに由る也。甚しい哉、迷信私慾のある所は、神の存する所、神佛をかりて、以て己の私慾を遂げむとす、神佛も亦迷惑なる哉。すべて人は迷ひ易きものなるが、女子殊に甚し。病に迷ひ、貧に迷ひ、艱難に迷ひ、遂に苦しき時の神だのみ、心は長へに闇にして、徒らに醉生夢死す、亦憫れまざるべけんや。

「人世書を讀むは、憂患の初と」云ひけむ、もとより儘ならぬが常なる世の中、徒に悲觀して止むべけんや。人の世に處する、實に安心立命の地なかるべからず。宗敎の

本旨は、人に安心立命の地を與ふるに在り。されど、之を説くもの、往々迷信を利用し、私慾に媚ぶ。世の婦女子たるもの、迷信と私慾とに驅られて、たゞ其の皮相を解するに止まり、反て人の道を誤るものあり。南無阿彌陀佛とだに唱ふれば、罪障も消え、後世安樂を得るものとのみ速了し、以て能事畢れりとなし、子として盡すべき道、親として盡すべき道、妻として盡すべき道などを閑却して、朝夕たゞ珠數爪ぐるものあり。安心を得て、反て人の道を失ふ。かくては、いづくんぞ安心の甲斐あらんや。

浮世の途につかれはて、殘る露の命を他力の教に依頼す、必ずしも之を排斥せずと雖、爲に人の道を失ふに至りては、傍觀するに忍びざるものあり。れのが迷信のあまり、たゞ安心を得るに急にして、一家の平和を破り、嫁を虐げ、人を譏り、我儘、非常の行をなして顧みず。而して、これ宗教の信者なりと云ふに至ては、安んぞ驚かざるべけんや。安心のある所は、極樂の在る所、夫婦和し、姑嫁和し、一家和し、和氣常に靄然たる所、また極樂ならずとせむや。人孤棲する能はざる以上は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

道德なき能はず、安心立命の地を得むとするも、道德の完きを補はむが爲のみ。人を外所にして、われ獨り成佛せむとす、神佛いかでか非禮をうけむや。これ之を迷信といふ。

人として貴ぶべきは、たゞ誠、たゞ實、己の分をつくし、己の道を守りて、毫も詐らざるに在り。これ輕薄者流の能くする所に非ず。利に合し、順境に合し、富貴に合し、而して害に離れ、逆境に離れ、貧賤に離れ、恰も浮萍の如く、飄々として定まる所なく、貧しき夫を棄つること、敝履も啻ならず、唯眼前の浮榮を得るを當世と稱し、義にあつきを愚と目す、歎かはしきは今の人情、たゞ安逸と富貴とに迷ひて心は闇なり。憫れむべき哉、草木と同じく榮へ、草木と同じく朽つ。畢竟するに、悟らざる也、他力以外、眞の安心立命の地を得ざる也。

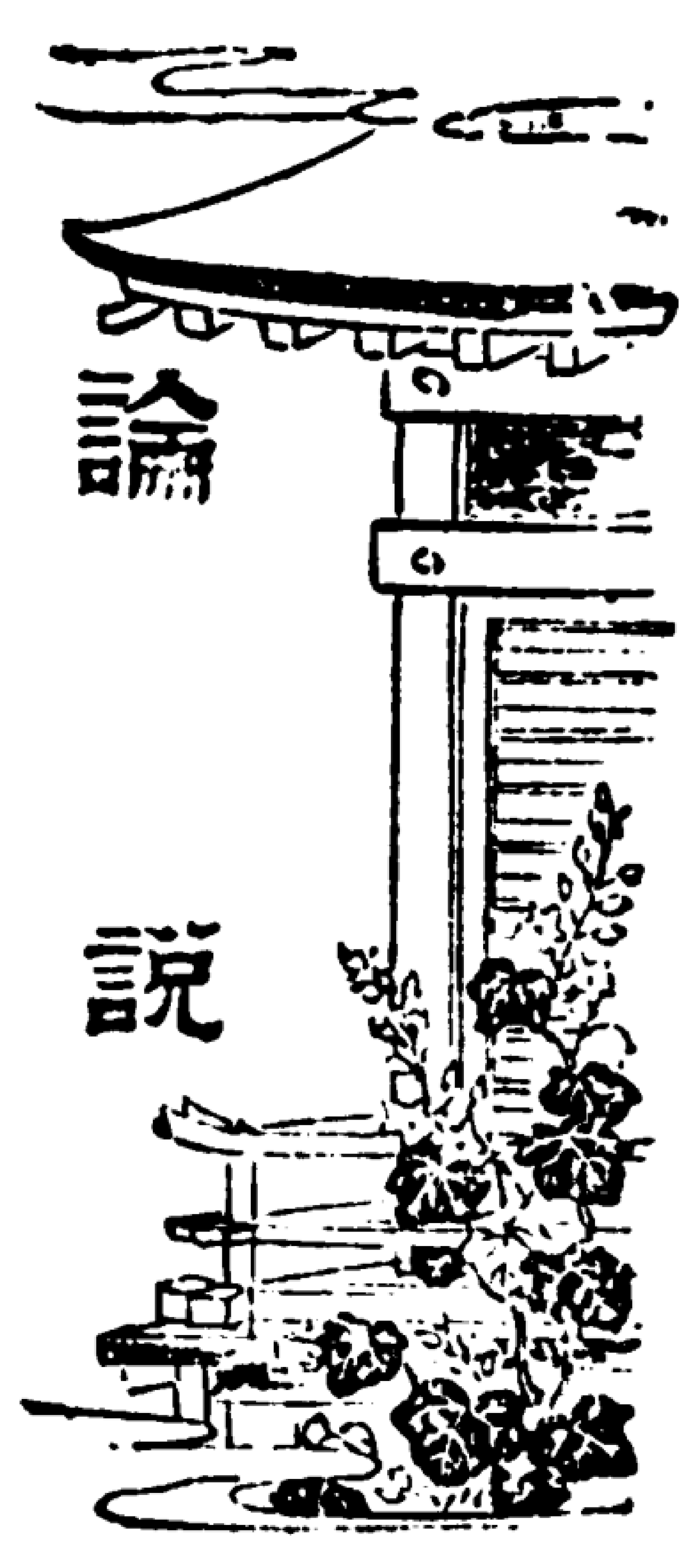
世に悟りのなき人ほど憫れむべきものはあらず、悟らざるが故に、迷信し、私慾に盲動し、人を恨み、不幸に喪心し、浮世に醉生夢死す。悟るとは、利害得喪の上に超然たるの謂也。夫に事へ、親に事へ、人に對して、たゞ誠をつくし、富貴榮華も

其の心を動かさず、貧賤を厭はず、寒苦を顧みず、死を視ること歸るが如く、天を樂しみ、運命に安んじ、苦節を持して渝らず、これ之を悟るといふ。彼の迷信を去り、俗氣を去り、小才小智を去り、修養深きものにして、始めて此の境に達するを得べし。古より、孝女と呼ばれ、忠婦と呼ばれ、貞女と呼ばれ、烈女と呼ばれ、芳名を千載に流せるものは、皆こゝに得る所あるもの也。即ち迷信以外、眞の安心立命の境地あるもの也。

貞燕

衛敬瑜といへるものゝ妻十六にして夫うせたり。父母女のいまだとしわかく、めみかたちすぐれしを、やもめ住せさせんもほいなし、さるべきよすがもとめんとせしかば、女は色かへぬ松のみさををなおらはし。いかにもうけひかず、父母うれへてしたしき人などしてすゝめその心のうき立てにんなるかたにうつりゆく事としゝければ、女のがれがたくひそかに耳をそぎ、ふたゝび嫁すまじきちかことを立けるに、父母せんかたなくてやみぬ。その女としごろ住わたる家の軒に春毎に燕いもとせならびすみけるが、これも雄鳥やうせけん、めどりのみ來つゝ有けるを、女打みて、なれもやもめになりにけんと我身をつみて、いとゞ哀に思ひて、その燕のあしにあかき糸をむすびつけはなちけり。あくる年の春此燕糸をつけながら又ひとつ出來れり、いとゞ哀におもひかくある事六とせ七年ばかりを送りぬるとぞ、女かくなんからうたつくれり

昔年無偶去　今春猶獨歸
故人恩已重　不忍復雙飛



割烹と禮節と(三)

第一編 小笠原流といふ禮節を論ず(續)

首唱者と傳書と

石井泰次郎

かくの如く、謬傳誤解なる近世の樣を考へずして、かしこき今代にも、なほ其跡をふましめ、非正統なる流名を稱して、敎授者も著述者も耻づる處なきに至らしめたるは、只一人の首唱者が二百年前の一大勢力をとゞめたる傳書あるによれるなり。

是首唱者の勢力の如何は、次の數節を讀みて知るべし。主唱者とは、即水島傳左衞門元成なり。

(第一)去年霜月下旬麻布日窪長耀寺に行きて其墓碑を尋ね、時にうつしつる一枚は左の如し。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○水島之成不知何許人稱卜也先生父川崎主水始仕北條氏直又仕筑前黄門後仕秀頼公大坂之役在城中城陷戰役而先生孤身流離及清平官于東武辭而學禮業成名聲籍甚弟子萬數俊傑百餘人入室者亦不少先生老而益矍鑠誨而不倦侍朱門至白屋皆得其歡車馬輻輳其門不遑自寧使高弟傳之有子名之敬繼其業先生嘗受摩訶行法法華傳常誦梵經有暇乃圍碁茶談以爲樂爲壽九十親疏不哀一日無病而卒時元祿十年八月十四日也遠近愛惜不唯門人也嗚呼先生游藝德行君子也於是乎畧記其始末以不朽焉。銘曰

大業日積　盛德富有
講禮傳禮　名聲不朽

元祿十年九月十四日　伊藤甚右衛門幸氏　謹誌

寛政八年八月十四日　因百年忌辰再建焉

（第二）又この一枚は禮節家某がもたる聞書にしるせる處にして、既に類聚婚禮式といふ書にも載せたるもの也。

○父は右大臣豐臣秀頼公の近侍川崎主水久信母は水島氏慶長十二年大坂城に生る幼名傳彌中頃傳左衛門、後卜也と稱す、外戚の稱號を冒して水島と稱す、姓は藤原、名は元成、年甫めて九歳、同二十年元和紀元五月大坂の戰豐臣家大敗にあひて、秀頼公母子生害主水久信も乱軍に討死なし、母は傳彌を扶けて虎口をのがれ城外に忍出しかども敵軍充滿の中、助を乞ふべき人もなければ辛うじて河内路に至り、高野の邊にかくれて相知れる農夫の家にたより、身をひそめ、東軍の凱旋陣拂まで其處に匿る、

然れども世上鎭定の日まで同處に隠るべきにあらず亡父久信が所縁の者信濃國松本の城主小笠原信濃守秀政の家に仕へあれども秀政父子は東軍の寄手の將にて去五月七日天王寺の合戰に父子共に討死ありしと聞けば、所縁の者も主人に從ひ亂軍中に討死せしやも計りがたく、覺束なき心地すれども其他に憑みよるべき者もなければ、ひそかに尋行て、身の方向を定むるの外なしと胸算此に決して、九歲なる傳彌を携へ心細くも中山道を下り、木曾の山路を辿り、松本に至りて、其人を尋ねしに、恰もよし留守城の戍士にて國に無異に在りしかば、母子の悦ひ大かたならず、始めて蘇生の心地して便なき身のよるべなき僥遙に尋來りし顚末をのべて憐を乞ふ、情實辭すべきならねば母子を其家に留置きけり、されど主人秀政父子の戰死にて其混雜繁劇にて母子か將來の商議をなす寸暇あらざりけり、心ならずもありけり、かくて秀政父子戰死の後は忠脩の男幸松丸尙ほ襁褓の中にありければ、忠脩の弟大學助忠眞に其遺領をつがしめむとの台命ありしを忠眞固辭して奉せず、種々懇命ありて今は辭するに力なく、一時其台命を奉じぬ、さて中一年をおきて同三年に至り復固辭す、大將軍秀忠公忠眞が節義の堅固なるに感じ給ひ、其請ふにまかせて幼少なる幸松丸に宗家の所領を給ひ忠眞には別に播磨國にて所領十萬石を賜はり同國明石に、新城を築しめられ、之を同人に賜はりしかは、宗家の臣を分て、其附屬と定めしが、其內に入て彼所縁の者も明石に移住する事とはなりぬ、其時傳彌母子も相共に明石に至りぬ、于時傳彌十二歲、明石にあること三年、寛永六年周旋するものありて、年十五歲にして植村出羽守家政の大番頭にて京都二條の城番の時の兒扈從に召出されけり、さて任滿て東歸の際、母も共に江戸に下り勤仕す、然れども、大坂籠城の士の子なりと

て新參を侮り同勤者動もすれば蔑如の擧動あり、傳彌おもへらく、父は籠城の士なりと雖も臆病に身を遁れし者にあらず、節を守り義を堅くし、武士道を立て戰死せしなり、我は僅に九歲の童子にて母に助けられて城を出しも恐怖して退城せしにあらぬを、斯く輕蔑し不禮を働くこそ遺恨なれ、母無かりせば討て果すべきを、我一人を杖とも柱とも思ひ給へる母に歎きをかけんは不孝なればとて涙を飲て年を送りけり、同十年すでに二十歲になりければ、我も一己の武士となりぬ、何迄人の無禮を堪忍せんや、其侮に因て閣捨がたき時機に至らば、母を顧みて忍耐すべからざるの時もあらん、危にのぞむは君子のせざる所なり、速に辭して去るこそ無事の良策ならめと、病と稱して久しくして宿直を辭し、家に屛居し追て勤仕にたへがたき由を告て暇を乞ひしに、新參なれば强て抑留もなく乞儘を許さる、然るに江戶に在ては身の方向を賴む人もなければ又小笠原の所緣の許に至り商議せむとせり、時に九年十一月十一日忠眞の所領を豐前國に移され、小倉城を賜はりて、今は明石にあらざれば、所緣の者も同所に至りしは必定なり、行には中國路の長路あり、海路を取るも波濤の難所あり、海陸の兩道いづれも容易ならねど海路を下らば母の苦勞も少からむと、先東海道を上り大坂に至り小倉通の船に便宜を乞ひ、海路をへて小倉に着船す、是よりさき忠眞は五万石の加增あり都合十五萬石の領主にて城下の形勢昔日の明石には十倍の繁昌なり漸くにして、所緣の家に尋ね至り植村家退去のやみがたき事情を縷述しなほ將來の方向助言を乞ふに、所緣の者も甚窮り良策もなければ、又家に留めて好機會を待たしむ、傳彌元成、倩世上の形勢を考るに自今再び諸家に仕を求め勤仕の身となるも、新參なれば又蔑視せられんは必定なり、今は仕官の事は斷念し、生涯浪士にて生

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

計を立ることそ宜けれと決心し幸に、小笠原家は鎌倉將軍以來京都將軍家の頃まで、弓馬の禮法相傳の家にて今其法を教授する人あり、之に就て學はゞ、後日身を立る一藝なるべし、さなりさなりと、先みづから肯ひ所縁の者にも商議せしに同意を得しかば、同家の臣齋藤三郎右衛門久成に就て小笠原家の傳、弓馬の家法の禮節を學び、螢雪の功を積み竟に其蘊奥を極め印可を得し後小倉を辭別して母と共に復關東に下り帷を江戸に垂れ、禮節教授の門を張る。其年間迄は戰國の時を距ること遠からず、皆戰場經過の士のみにて幕府の士小笠原丹齋禮法を唱ふるの外は禮節のいかなるを知るものなければ相競ひて元成の門に入りて禮節を學ぶ者陸續として輻輳す、故に其稱譽府下に遍く名聲登揚れり、當時從學の徒實に三千人の多きに達せり時に德川五代將軍綱吉公の世嗣德松君御髮置の事あり、其傳堀田對馬守正英捧呈の御白髮の調製を元成に命ず、則ち命を奉して之を調進せしより、一層世人の信用も深くなりて、今は其名を知らざる者なきに至れり、是即ち天和元年の事にて元成が七十五歳の時なり、其令聞一時に高かりしかば筑後國久留米城主侍從有馬頼利聘して其臣列たらしめむとす、元成は最初より仕官の念をたち居たれば固く之を辭し、門人伊藤甚右衛門幸氏を吹擧し、同人をして禮節教授たらしめむことを請ふ、頼利是に於て幸氏を別に召出して一家を立教授を命し、元成後見となり勉めて傳習場に出席に及ばずと命ず、然れども傳習場に出て幸氏が業を助くる十七年、元祿十年八月十四日病で死す享年九十一歳麻布日ヶ窪法華宗長耀寺に葬る、龍賢院一露日近居士と號す

かゝる勢力を以て、傳へたりし謬傳誤解なる近世の小笠原流は、正しき禮節ならずして、

只一時の兒戲に類せる首唱者が商略より出たる物なるよしを知るべし。

○つけていふ、右の一節中に、水島が外に、小笠原丹齋禮法をとなへしよし、見えたり、こは弓馬の禮法を唱へしなり。されど、此人の弓馬の傳書も近世樣にして故實にかなはざりし由、物に見えたり。此流くむものを、丹齋流と稱せり、又小笠原流と稱して起居進退の禮節を敎ふるものゝ此流の正統をくむ者にあれど、こも水島の力によれる者にして正しき禮節の敎授者に非ざるなり、既にもいへる如く、弓馬の禮にあらずして、小笠原の流名を稱しつゝ諸の禮節を敎授せるものは、正直なる禮節者に非ざるなり。

○今代、小笠原流正統の禮節敎授者と稱せる者は、此丹齋が流くむものと又水島が傳を受得たるものとなり。これらの輩は、弓馬の家と、禮節の家との差別をも、尋ねずして、近世の樣と今代の樣とを考へずして、敎授に、著述に、謬傳誤解の說を採用して、いさゝかも恥る處なし。

○又、小笠原の流名を唱せずして、暗に其傳書につきて上中下の差別をたて、我學び得べき處のみをとりて、今代の禮節はかくの如くすべし、なんぞ禮節の故實を研究するの用あらんやと揚言して、自分定めの禮節を敎授し、且著述をもなさんと企てたる者あり、こは論ずるにたらざるなり。

（以下次號）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女徳のしをり（十二）

三輪田眞佐子

第十二感恩　古歌に（さかりをもとふ人れはし散る花のあとをとふこそ情ありけれ）と見ゆ。實に時めく人の門前には、媚ぬるもの雲のごとく多からんも、昔大恩を蒙り大慈を受けし人なりとも、一朝零落せむ、そが淺茅生の宿を音づるるものやは多き。あはれ敢果なきは、慈恩を忘るゝ人の心よ。

まして御國に生れながら、大君の高恩を知り奉らず、たらちねの恵の露に生ひ立ちて、なはその本を忘れ、將た玉鉾の道のしをりをしるべに世を渡りつゝ、師の情を思はざるは目下の人心ならずや。欒共子曰ひけらく、民は三つに由りて生ず。これに事ふるは一つの如くなるべし。父これを生み、師これを敎へ、君これを養ふ、父なくも生れず、養はれずも長せず、敎なからんか、智もなかるべし。これ生の族なり。故にこれに事ふるは、唯其の在す所に從ひて死を致すべし。生に報ゆるに死を以てし、賜に報ゆるに力を以てするは人の道なりと。おのれは單にこれを昔の道とおもはず、今もなほ忘るべからざるをしへなりと信じぬ。

なほ人と生れしからは、兄弟、及び親戚、あるは朋友の恩は更なり。また見ざる知らざ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る人よりも、間接に便益を得ること少からず。これを社會の恩と言ふ。進みて廣く考ふれど、天地、山川、草木、及び禽獸などより、多少の功徳を受けざるはなし。これを萬物の恩と稱す。されど、これらの諸恩を感じ、これに報いざるべからず。

佛者も四恩とて、一には父母の恩、二には國王の恩、三には衆生の恩、四には三寶の恩と唱へき。嘗て松田正久氏の譯せし布氏道徳學を讀みしに、認恩とは何ぞや、福利を以て福利に報ゆるを言ふ。其心なき者之を忘恩の人と謂ふ。忘恩の人は輕視擯斥すべき人物なりとす。凡そ福利を以て福利に報ゆるには、善思善言善行を以てすることを得べしとあり。されど、儒、佛、及び哲學、ともに感恩の要を説かざるはなし。されど、おのれの玆に言ふ感恩は、いと廣き意味にして、露ばかりの恩義を受けしだに、永久忘るゝことなきのみならず、總て無情の物も功徳を受けしからは、つねに有情を以てこれを扱ふほどのなつかしき女子となれよかしと思ふなり。西行法師嘗て伊勢大廟を拜し奉りて（なにごとのおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ）と歌ひけり。彼は出家の身なれども、なほ國祖の大恩を忘れざるによりけん。わきて女子たるものは、恩義を重んずべきものなれど、何事にもあれ、かたじけなさに涙こぼるゝばかりの情あるこそ可憐なれ。

既に人たるものにして、他より享けし恩を感ずるときは、これに報いんとつとむる心を生じ、總ての言語擧止なだらかなるべし。されば、女德を養ふにつきては、恩に感ずる心を養ふは、百なる美行の基となるべし。司馬温公曰ひけらく、人の恩を受けて負くに忍びざるものは、子となりては必ず孝に、臣となりては必ず忠なるべしと。勿論忠孝の德、これを朋友に移さば信の德となり、婦人に轉せば貞の德となるべきなり。されば、人より恩慈を受けながら、これに報ゆるを知らざるのみならず、一朝威勢の地位に登るとき、俄然舊義を忘れて、所謂暑さ忘るれば笠をも忘るゝ、輕薄者流に化する女子あらば、その天資は、恐らくは忠孝、あるは貞などの德なきものならんかし。あはれ涙なき女子は、共に涙のことを語るに足らじ。

其二部　あるまじき念

これまで述つるものは、をさ〱積極的の德にして、つねにそを懷きて行に施すべきものならざるはなし。以下ものせんあるまじき念は、消極的の德にして、つかのまも心に浮ばしむべからざる女子の性僻なり。そも〱人は一方に善思ありとも、他方に惡念起るとき、さながら同じ器に、且つ共に水火を投せんがごとし。されば、苟も、女子心術上の德を講せんとならば、是非とも消極的の女德をも説かざるべからず。いでや、ある

まじき念の概要をものせん。

不就學女子の多き原因及び其の就學奬勵の急務なるを論ず

藤塚熊太郎寄稿

今や我が國の女子敎育は、稍其の歩を進めて、高等女學校の設立も、月に其の數を加へ、漸く見るべきもののあるに到れり。百尺竿頭、一步を進めて、其の完成を期するは、將に此の時に在らんか。

抑、余が女子敎育の急務を說くものは、唯に敎育を受くる處の女子其の人のみに就きて云ふにあらず、實に間接に第二の國民を薫育する所以なればなり。故に其の發達一ヶ月を遲るれば、將に期一年を誤るべく、一年を遲るれば將に十年を誤るべし。夫、忠良なる國民を望まば、先づ善良なる家庭を造るべく、善良なる家庭を造らんには、先づ賢夫人を要すべし。其の賢夫人は即ち女子敎育によりて之を得るのみ。予が屢、女鑑の貴重なる餘白を籍りて、女子敎育に關する愚見を吐露するもの豈自ら好んで狂を衒ひ辨を弄するものならんや。讀者諸子幸に予が微意を諒せられよ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蓋不就學女子の多きは、各地一般の弊害にして、其の然る原因は、啻に一二に止まらずと雖も、要するに、未だ父兄が教育の何たるを知らず、單に學校に出でゝは字を書き書を讀むのみと誤想し、女子は是等のことを知らざるも、善く衣服を縫ひ、膳菜を調理するを知れば足れりとの淺薄なる志想を持てるに外ならざる可く、且つ家計上困難なるものは、家事の手助けをなさしむるなど、彼の農業地方にありては、子守を爲して兩親の作業を助け、若しくは養蠶製糸等に從事して些少の賃銀を求むるあり。或は身に不相應なる勞働的工場に雇はれ、以て家計の幾分を補ふもの多きに居るが如し。

如斯、修學期に於ける妙齡の女子を驅りて、併も風儀の亂れたる、併も殘酷なる取扱の下に、機械的勞働を執らしむるもの、現に教育を受けつゝある女子に數倍せるを知らば、誰か憂忡一番せざるものあらん。而して、是等女子の不幸は、只に彼等が畢生に止まらず、彼等は實に第二の國民の大半を家庭に教訓すべき重任を負ひながら、無教育なる彼等は、如何にして能く其の子女を訓育せんとするか、嗚呼其の不幸は將に延いて子孫に及ばんとす、思ふて此處に至らば、女子教育の普及は、益々刻下の最大急務なるを覺ふ。

曾て福島縣教育會にては知事が女子教育普及方法の諮問に對し、左の如き答申を爲したることあり。參考の爲め茲に掲ぐ、

女子教育の必要にして一日も忽苟に附すべからざるは固より論を俟たざる所なり。然るに、本縣學事統計に依れば、男兒にありては學齡兒童百人に對する就學比較八十三人に上りたるも、女子にありては百人に對し僅に三十五人強の就學に過ぎず、之を全國平均學齡百人に對する女子の就學四十三人に比すれば、其の及ばざること五人なるは、實に御諮問案に明示せられたる所の如し。若し此儘に放任せんか、殆ど半數の無教育者を出し、偏跛の國民を養成するに至る可し、豈慨嘆に堪ゆ可けんや。今御諮問に對し、本會に於て審議を遂げしに、第一女子就學の少きは舊來の習慣として一般に女子教育の必要を感ぜざるに依る。故に諸種の方法手段を用ゐ女子の教育必要なる所以を說示し之を知らしむ可し。第二從來女子を教育するに男子と同一に取扱ひ、男子の教員之を教育せしに依り、方法其の宜しきを得ず、隨て良好の效果を收むること能はざりしは、亦女子就學を少からしめたる一因なるべし。故に、益々女教員を養成し之をして專ら女子教育の任に膺らしめ、女子の淑德を養ひ、其の美を感ずるに至らしむべし。第三法令を厲行し就學督責を嚴にし、強制以て就學せしむ可し。第四然れども獨り督責にのみ依るべからず、又適當の獎勵法を設けざる可からず、依て地方稅の内より每年凡金壹萬圓を支出し、女子就學の多少に應じて之を分割補助し、以て大に

女子就學を奬勵皷舞するの方法を採らば、其の效果必らず大なる可し云々、是實に能く吾人の意を得たり。要するに各縣其の狀況を異にするに從ひ、方法は必ず一途に出づべからずと雖、適宜に之が奬勵の道を講じて、此の最大急務に應せざるべけんや。今や、外人雜居の期も旣に近きにあり。苟くも日本臣民たるもの、其の性來の宇内八紘に秀づる大和魂をして、益々煌々たる光輝を放たしめ、芳を世界に布くの此時に當り、萬一女子敎育にして振はざるものあらば、或は外邦の嘲笑を招かん。予又曾て『樹下石上談』てふ書に女子敎育を忽にす可からずてふ項目にて、下の如く言ひたることありき、近時朝野の志士漸く女子敎育の忽にす可からざるを論唱し、各地に高等女學校の新設を見る。思ふに女子の本分は育兒を以て第一とせずんばあらず、古來の名將賢人に就き其の涵養の深きを窺へば、一に母德に依らざるもの殆んと稀なり。家に在りては父母に事へ、嫁して夫に事ふ、貞婉靜順子女を育して慈あり情ある、之れ是を完全の婦人と云ふ。育兒の事一見甚だ小なるに似たりと雖も、決して然らず。今日の兒女は將來の母なり、今日僅に呱々の聲を放つもの、之實に將來邦家を維持するの城砦なり。之をして眞正の國民たらしめ、之をして牢固拔く可からざるの城砦たらしむるは、其の責任果して誰が手にか存ずる、固より父母たるもの丶共に力を分たざる可からざる責任には相違なしとす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るも、而かも家庭を掌る女子の責任與つて大なるを信ず。今の所謂女子教育は、將來の良妻賢母、兎に角一と通りの技能ある女子を作らんとするは、吾人の期する所、予の屢々女子教育に關することを言ふもの、實に此の理由の存在するを以ての故のみ云々、嗚呼今の時に當り、誰か女子教育奬勵を急務ならずと云ふものあらんや。



史談

喜右衛門か妻

鹽井ふく子

君、君たらずとも、臣、臣たらずぞあるべからず。父、父たらずとも、子、子たらずぞあるべからず。夫、夫、らたずとも、妻、妻たらずぞあるべからず。むかしは、斯く云ひて、無道の君にもたゞまめやかにつかへ、無慈悲の親にもたゞしたしみなつかしみ、無情の夫にもたゞやさしうかしづき順ひたるためしもいと多きに、其の名は何と呼びけむ、むかしみちのくのはて、大沼郡八町村の民にて、喜右衛門と云ふもの、妻女は、生れつき、貞女にて、たゞよく夫に順ひつかへ、夫妻の間いとむつまじう、一人の子さへありて、又望むべき寶は、たゞ秋の實のみと、妹脊の早苗とるも、互にむつまじう、頼みありける世も、つもれぞ老いとなる身のうらめしく、夫は六十路あまり五つぞかりより、中風の病にかゝりて、半身不隨となり、行歩たもうやうならず、なやみくらす事十二年あまり、今はいつくしみ

たる子勘六が、いとなみをもて養ひはぐくめど、元より其の日をたのみたる家のさむかり、貯へもなきに、夫が長のいたづきの療養、費いと多く、すぎはひもやう〱に足らずなり、はては朝夕のけぶりも心細げなり。さるに、喜右衛門は、長のわづらひに、心みだれ、故なきことにも怒り罵り、やゝもすれば妻女を叱り、杖を取り、棒を持ち、はては箒もて、妻女を故なきしもとに打ちやくすることしば〱あれど、妻女はこれを怨まず、夫がしもとの下、ことわりなき呵嘖をなげきもせで、たゞ夫が力のよわりしを悲しみ、わけなくいらだつ夫が心をうらみもせず、たゞ夫が煩ひを思ひはかり、偏に言葉やさしう、意に背かず、いたはりかしづき、夜を日につぎて介抱怠らず、二便の世話は云ふも更にて、之が洗濯の事より、衣食のこと、たゞ好むをとすゝめ、清きをと着せ、暑き時は明けくれ涼しき方を求めて床をうつし、寒き折りはわきて二便しげく、身の暖まるべき間もなければ、夜もすがら燃火してあたゝかならしめ、夜毎の寝覺にも、手をさすり足を撫で、或は何くれと物語して、しばしにても夫が苦痛を去り、うきをも慰めむとすれば、勘六ははゝその露になづみて、之もまたやさしう、晝は日の入るゝまでも田の事をとり、夜は小夜ふくるまで縄をなひなどして偏に生計を足らしめ、父に甘美をそなへ、母がこゝろを安めんものとて、一心に家業を勵み、且つ共に力をつくして介抱すれど、父が病はつゆ怠らず、心はいよ〱狂ひきて、妻女に答ふるにたゞ〱叱罵の聲を以てしたり、妻女はます〱その病を憂ひ、たゞうらゝかになだめいたはりて、げにいぬるまの夢にも夫をさすり、もの食るまも座らず、介抱に介抱をつくしけり或時の事なり、喜右衛門聲高く罵りけるに、あたり近き人々、家の外より伺ひ見れど、例のわけなきことに腹をたて、ありあふ箒をつとりて、妻女をうち叩きぬべきさまにて、よろぼひ追ひしに、妻女も驚きさま表の方へ走り出でけるが、やがて已がはきたる草履を

ぬぎ、夫が前へうちなほして、之をはき給へ、洗足にては足痛み給はむとて、さし向けゝるに、伺ひける人々いたくその志に感じ、喜右衛門をとり抑へて、引きつれ、床に入らしむれど、妻女もまた歸りて、さま〴〵に云ひ侘びつゝ、人々にも禮を陳べて、又や夫がほとりにかしづき、戰々競々且つ恐れ、且つ勞はる貞實、近隣は云ふも更なり、近郷の人々さへいたく感じ稱する所となり、はてはおづかりをさむる領主にも達してやがて松平肥後の守より米を與て、其の貞節を褒め賞されけるとなり。あはれ、かのむかし唐土の賤しき人の其の妻女がうやまひによりて、遂に光榮をえたるためしにも劣らぬ美談ならずや。

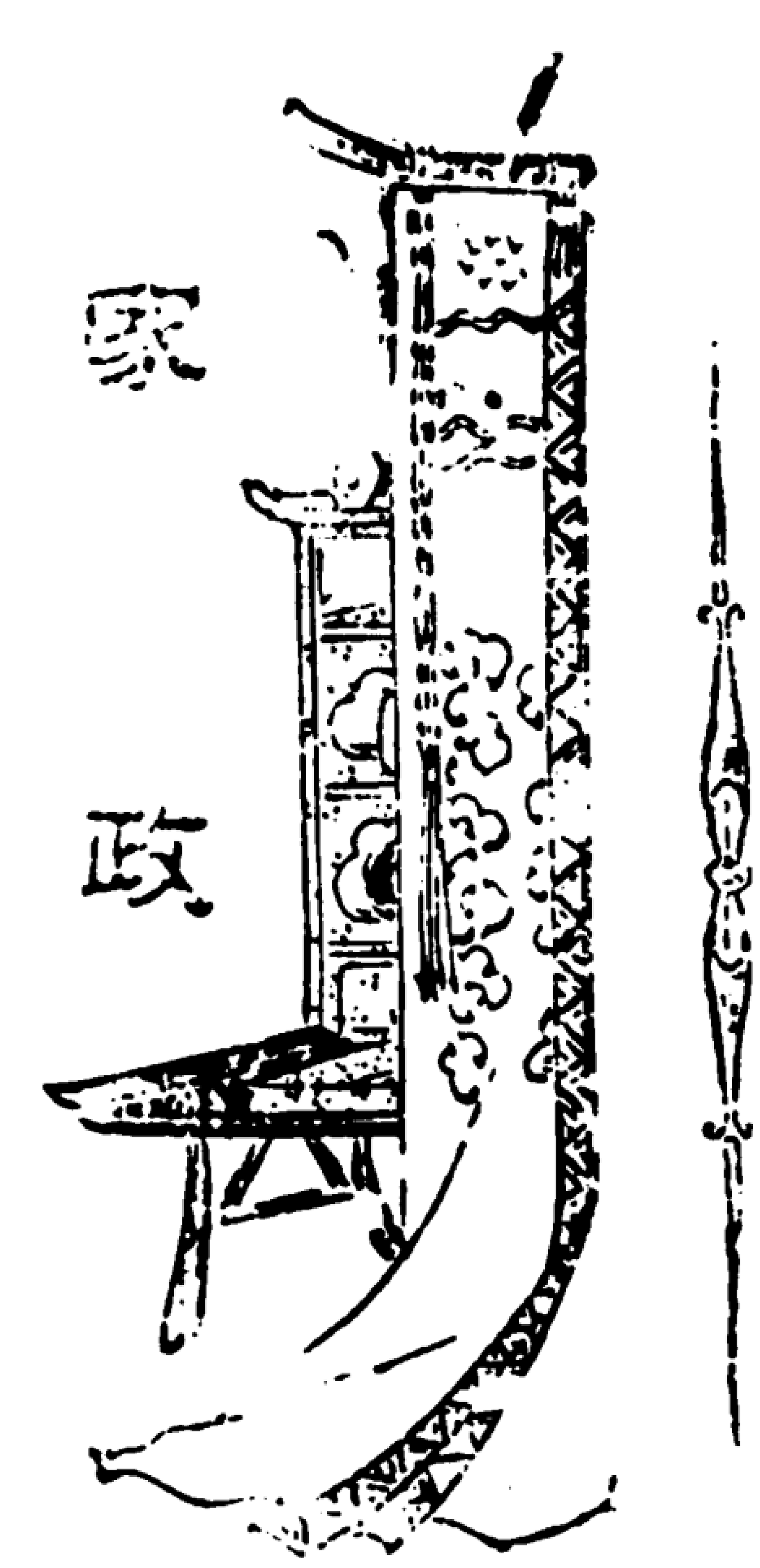
金座の後藤が妻

川島白鷺

内地雜居の難局を目前に扣へながら、時事の論ひをのみ事として、社會問題には一向に冷談なる現今の新聞紙の第三面の記事を見るに、多くは、男女の嫉妬より起れる忌はしき事どもなるが如し。豈、痛嘆の限ならずや。むかし、享保の頃、金座の後藤（お江後藤と呼びて金貨を鑄造せし者にて今日の日本銀行は其跡なり）が妻に某といへるがあり。生得柔順に、慈愛の心いと深くして、夫が寵愛せる妾を憐むこと姉妹の如く睦しくして、衣類調度、何くれとなく、同じ樣に調へて、些少もへだてを置かず、朝夕の友として、年月を送りけるが、或時、その妻、不圖、疾に罹り、醫業の効も見えざるに、妾は、いと心安からざる樣にて、今戸の邊なる行者のもとに加持を賴むよし言ひてしば〳〵使を遣はしけり。而るにこの妾は、もと賤しき業せし女にて、心ざま善からぬ者なり。一日、過ちて、其の文をとり落しけるを、後藤何心なく拾ひあげて、披き見れど、日頃の御祈のしるしあらはれて、此のほどは、愈々、深くなり行く樣に見え侍れど、猶、れてたらず、丹誠あらむことを賴入るよし認めたる

恐ろしき呪ひの文なるに、後藤は、いたく怒りたちて、妾を呼びよせて、年頃、妻のうらなく懇切なるを、忝なく思ふ心もなく、大恩を忘れて、かゝる所行すること、其の咎輕からず。寧ろ、切捨つべきなれども、世間の聞えもあれど、生命ばかりは助け遣すべきに、とく〳〵出去れと、聲はげまして罵るを、妻女きゝて、打ち驚き、少も怨むけしきもなく却りて、夫を宥めて言ふ樣、拙き女の心とて、さる事も有るならひなり。かく年久しく、召使はれたるものゝ、俄に零落んこと、いといたましく、且つは、彼が老母の歎きも、憐れなれど、淺草なる別宅を與へて、其の母と共に、移し置かれよかし、とかへす〳〵夫に請ひければ、後藤も、漸く怒をとゞめて、この言を納れしとぞ。

そも〳〵、嫉妬は、女姓の免れがたき一特性とも見るべきものにして、尤も、嚴愼すべきものなるは、今更の言にあらざれども、世には、これが爲に、家をけがし、身をも過るものもなしといふべからず。この後藤が妻の如きは、げによく、仇にむくゆるに恩を以てせりといふべし。

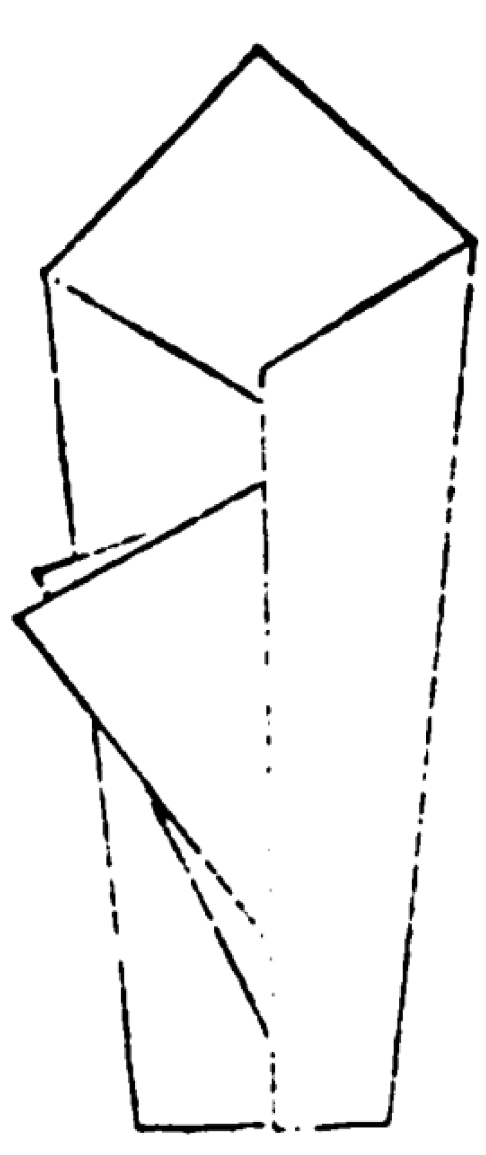


折形

有住齋

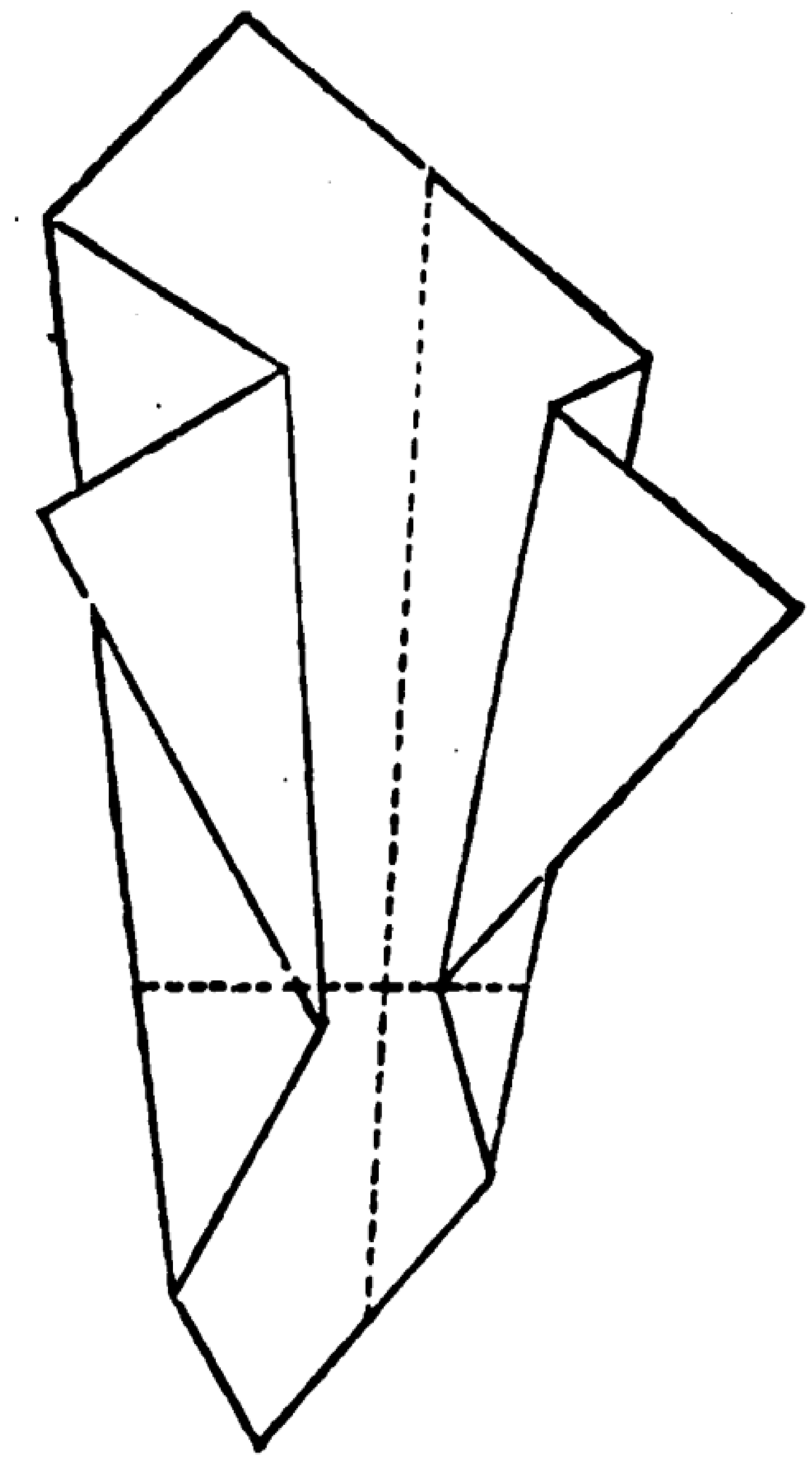
箸包

紙は眞四角に斷ちて折るなり。

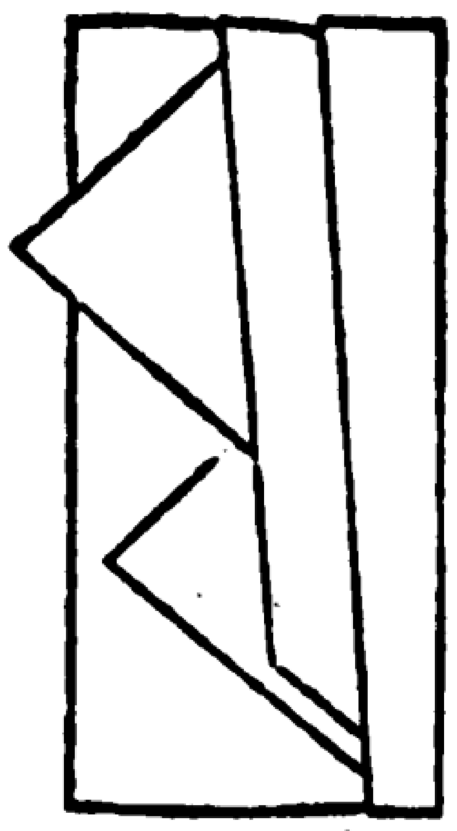


Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れなじく解の圖　先づ此の圖の如く折りて、縦の點線の處を左に折り、横の點線の處裏に折り反すなり。

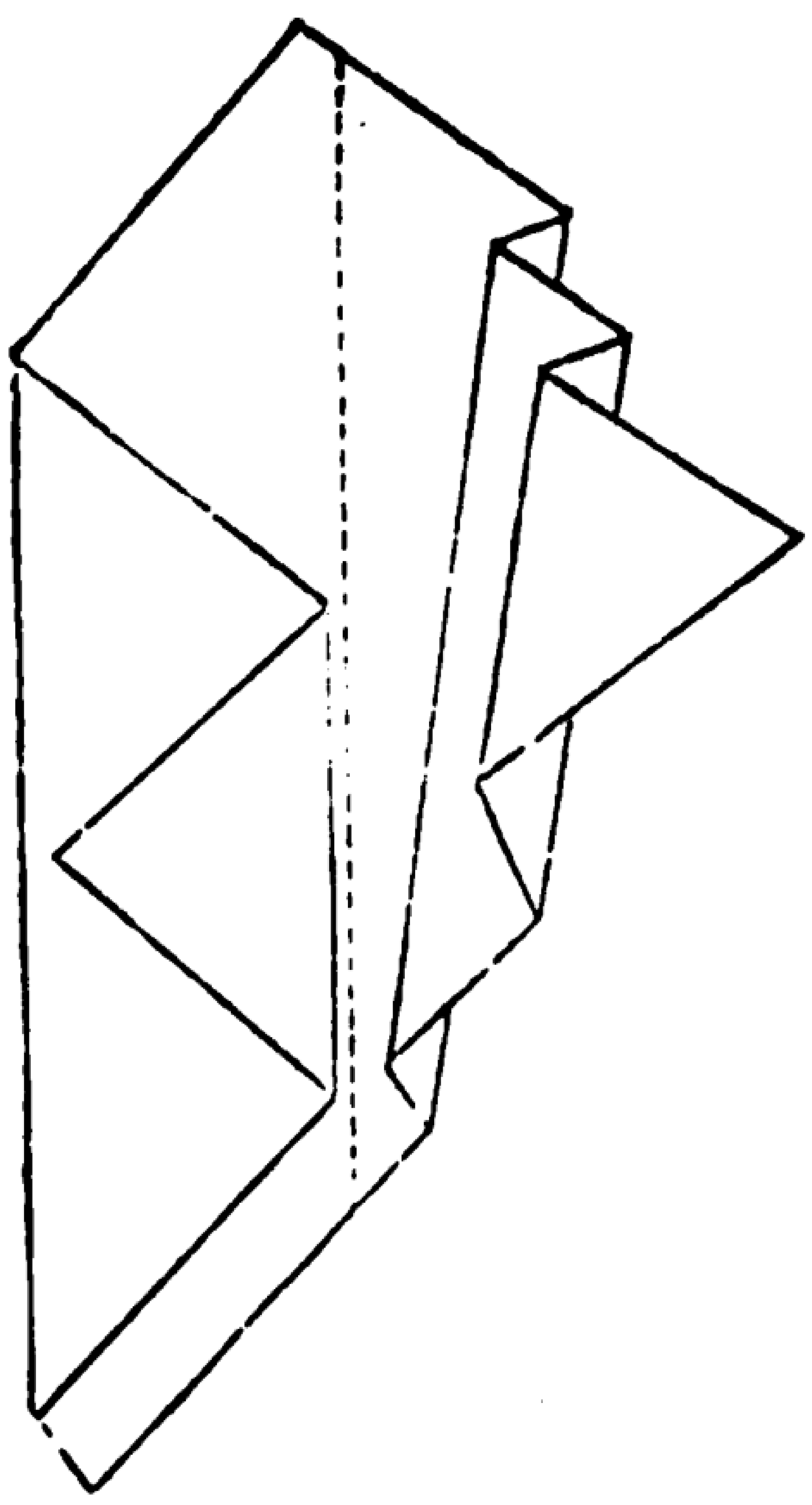


猪の子餅包

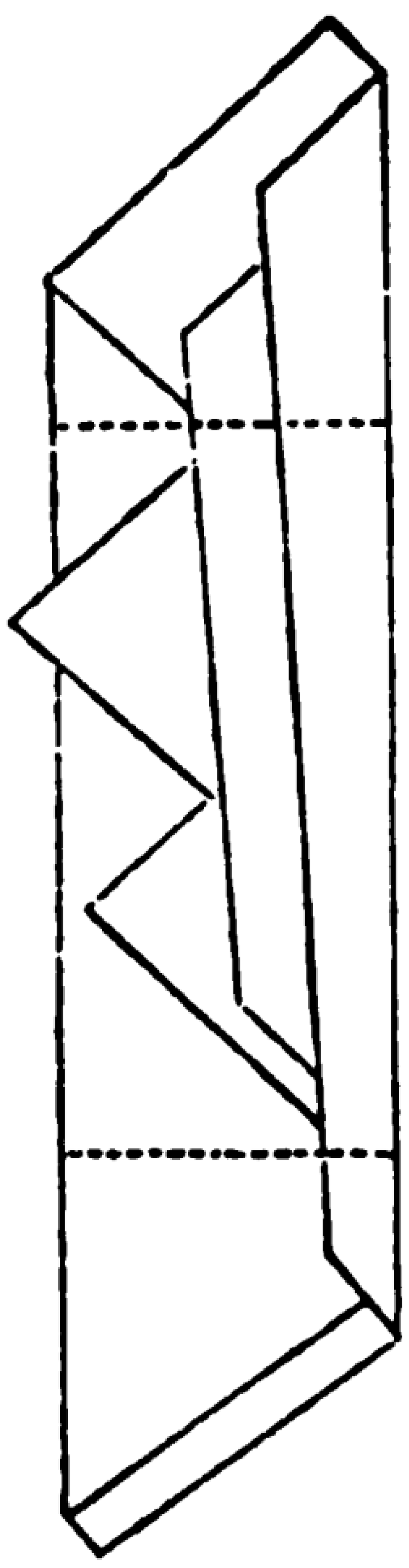


是は裹典の法によりて紙を斷ちて折る。十月節日の猪の子餅を包むなり。專ら近世に用ゐたり。（十月亥の日の亥の刻に餅を食へば萬病を除くといひ傳ふ。此[illegible]

れなじく解の一　斯の如く折りて、點線の處を左に折れむ解の二となる



れなじく解の二　斯の如く折りたるを上下の點線の處裏に折り反すなり。



茶の湯

茶禮初學（續）

孤峰庵不羨　關　葦雄

一四ツ時釜掛る當今の午前十時

註釋、不羨曰、釜を掛るには、風爐にては先下灰を取、中を清淨になし、灰作り損所あらば灰器を持出し、繕ひ直し、後炭斗を持出、炭を置、火を點じ、釜を洗ひ、水を入(但し釜の鐶付迄)下火廻りたらば香を焚、釜を掛べし。曲り無き様釻をにじりて眞直になすべし。

一席床へ懸物掛る事

註釋、掛物を掛るには、横物にても、竪物にても、巻緒を解、勝手の方へ引寄せ、中の切地の出る迄向へ手を延しひろげて、風帶を延し、又少し巻、右手にて横緒を持、立て床に上り、右手の横紐を中の竹釘に掛て、左右の手にて軸を持、そろ〳〵と開き、解るに隨て下に居、軸留りて裏の方へ巻返して、掛物を能く鎮めて、床を離れ座して見るべし。曲りあらば何篇にても心に叶迄直すべし。此掛物かけ方は、譯なきことの様なれども、なかなか六づヶ敷ものにて、故人先哲も屢教へ置れたり、奈何となれば、江湖に名高き古墨蹟にて、如何ほど立派にても、茶に適當の逸奇軸にても、床に掛りて曲り斜見有る時は、掛物の品位劣等に相成。大に賓客の感を削ぐものなり。故人もいへり、掛物掛たらば、更に客口より入來り、客の心に成て點撿せよと、注意の程味ふべし。不羨も實地に着きて是を試たり。茶會の挨拶に、能掛りたと云は蓋此謂なり。

一路次へ水を打、潛戸、雪隱戸、或は猿戸迄水にて濡す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

註解、くゞり戸と云は中潜の戸、又雪隱の戸は則下覆雪隱の戸、猿戸と云は内外路次境の猿戸を云ふなり。是等内外の路次の掃除に續き、水を十分にそゝぎ滴し置く可し但し當時は、斯樣の時に、如露を用ゐるを便利とす。

　勝手の次第

濃茶薄茶をはき、炭を組、灰を拵へ　香合等殘らず支度あるべき事。

註釋、濃茶薄茶兩種前日に挽立置べし、濃茶五匁、薄茶十匁　一旦挽溜に貯置、此時取出し、茶掃箱の小道具を用ひて茶入へ掃申すべし。(但茶入棗共に中を拭ひ) 而后掃入申すべし。掃方形容は、茶入は杉形、棗は遠山に、扨周圍口を能拂拭ひ、茶入の前面置形を能改めて、口に指を入、持上げて修覆に入るべし、袋に能茶入の口の落付く樣になし、後蓋を掛くべし、蓋に賛わらた、其向を習の如くして（但し賛は茶杓をかけざる方に成、風炉は右の方也）能蓋を拭ひ、袋の口緒を引締むべし。緒すがりむらなき樣に引締、一所にしめ寄せて、左の方高くなる樣に一つ結び、前へになりたる紐を上へ折て、向ふになりたる紐を上よりかけて、輪の端を左右へ引出し、向の方へ押付て形を繕ふべし。打留は向へ伏せて置べし。是を露と云。薄茶入は棗にても、外の器にても、遠山の形に掃、蓋を拭ひ、水屋の棚に置べし。次に炭を組むべし。風炉の炭も別に寸法あり（口傳）。先炭斗を出し、能拭ひ、内張なき籠類ならば底に紙を敷、（但し奉書（胴炭を左の方へ入、其右の側に管炭）割たるも交へ）三四本入、次に毬打（割たるも交る）四五個右の方へ入、配置よき樣に並立つべし。次に右向の方隅に枝炭を大小見斗四五本縁へかけ入置べし。次に眞中に火箸、向の方を落し、前の方を縁へかけ置べし。次に左の方に羽箒、向前の縁へかけ置べし。次に釜の鐶重り目を上の方にして、炭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

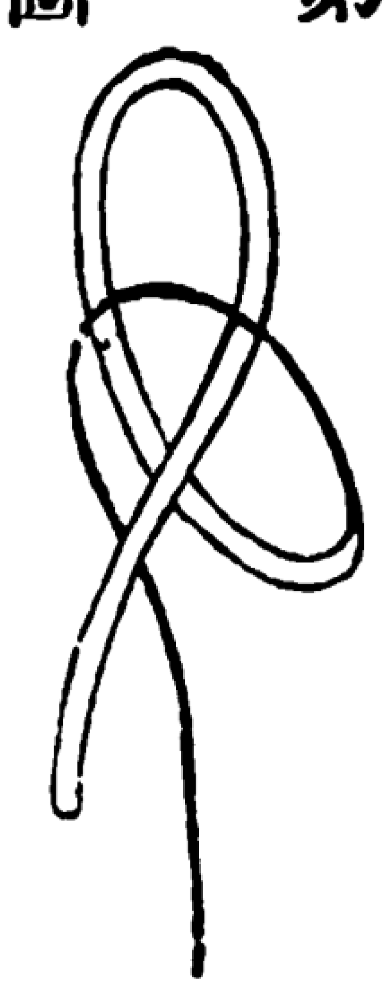
取の前の縁へ持たせ入置べし。釜敷は懐中紙を用ゆべし。半紙を四ッに折懐中すべし。次に灰炮六、風爐には薬掛りたるを用ゆ。灰は薬研にて押、細末にすべし。灰器に四五分目入れ、灰匙を付べし。次に香合は、風爐には漆器を用ゆべし。形容は和漢千差萬別なるべし。諸流先哲の好みあるべし。炭取の組合によるべし。香木は上等なれど伽羅、佗人も沈香を用ゆべし。餘り澤山入べからず。七八片に止るべし。次に殘らず用意と云ども百事に亘りて、何から何迄と云事盡きがたき程なれども、其の中二三を云ん、茶筅、茶巾、柄杓を水に漬、水屋瓶へ水を入、水指へ水を注入れ、青竹の蓋置も水に漬、本日用ゆべき帛紗を出し、花生をも水を入、花を切花溜へ入れ、其の他は復雜なれども一々擧げず。

結物

百草庵一無

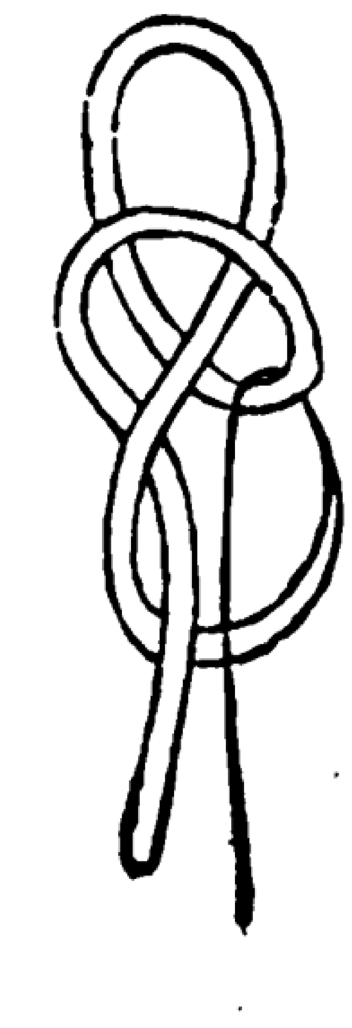
女結　これは男結と共に叺の結びあまりに用ふ、叺とは、婚禮三ッ目の亥子餅の叺のことなり。其外何に用ゐてもよし。

第一圖



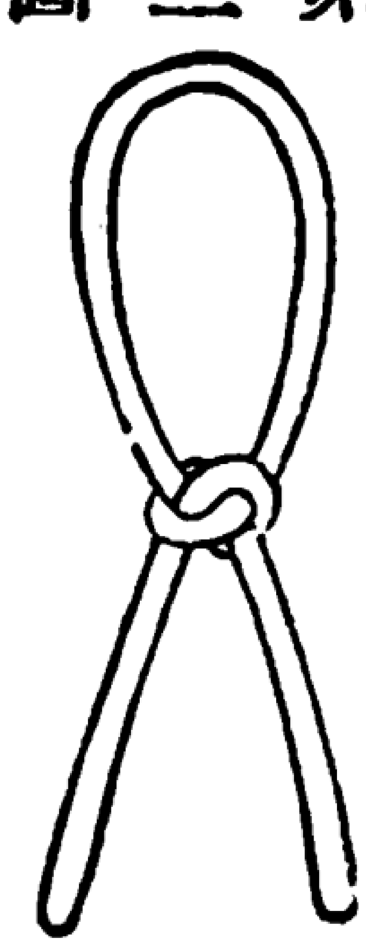
墨線の通りに右の紐をまはし第二圖となる。

第二圖



まて左の方の紐も墨線の通りに通して引き締れば第三圖となる。

第三圖

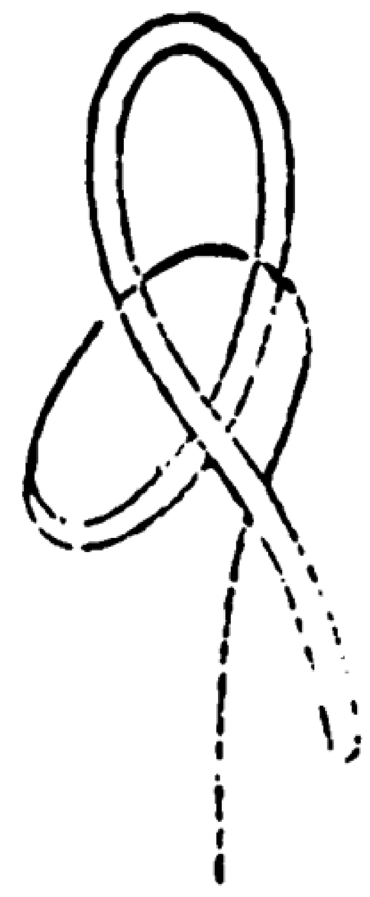


結び上り

男結　これは蝿頭、又飯粒ユヒといふ。叺の掛糸の

結び餘りに結び、又垣やらひなどを結、其外、裝束の袖くゝりの余りなどに用ゐ、なにゝもか様なる處に用ゐべし。

第一圖

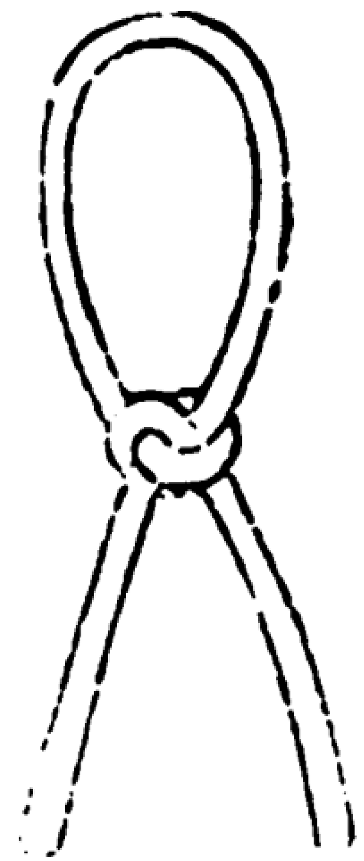


是は前の正反對なり・說明なくして自ら知らるべし。

第二圖



第三圖



結び上り



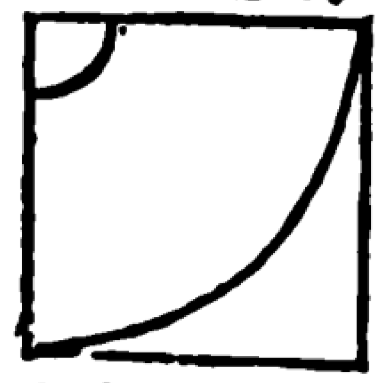
たちぬひ

西山たい子

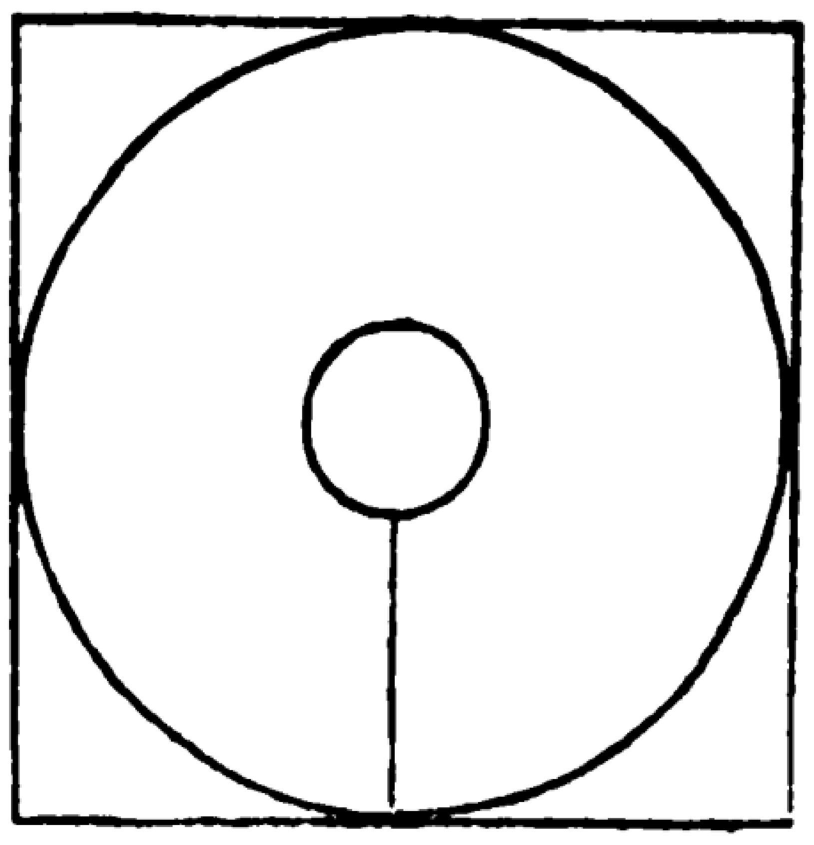
(九十四) 涎懸裁ち方

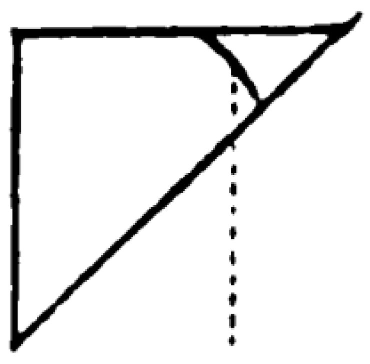
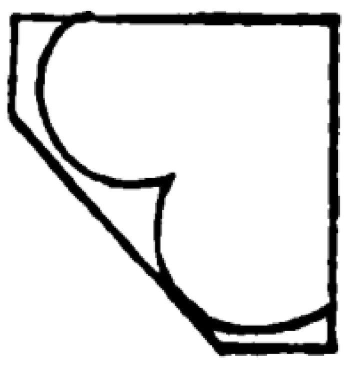
涎懸けの形はさま〴〵あり。その尤もやさしきは、丸きものにて、桔梗の如き、梅の如きさま〴〵の花の形をなす、切は、縮緬、唐縮緬、絹、天鵞絨、金巾等、何にてもよく、裏は、赤、桃色等の唐縮緬、鬱金木綿桃色木綿、茜木綿等よろしく、緋金巾、絹等も用ゆれど頸に當りて冷やかに感ぜられ、またよろしきは無地の縮緬などすれども、之れまた頸の皮をすりて、痛く感ずる故なるべく木綿を用ゆるがよろしかるべし形は紙に切りおきて、裏表とも其形に合せて裁つもよろしく、また別に形をつくらで、裏の切をすぐ形に切るもよろし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まづ丸くたゝんと思はゞ、八寸四方の布を四つに折り
其端と、眞中頸とを此の圖のやうにかき切り
まはりになる所開きて四つに疊みたる折目を
一筋だけ切りはなつべし。

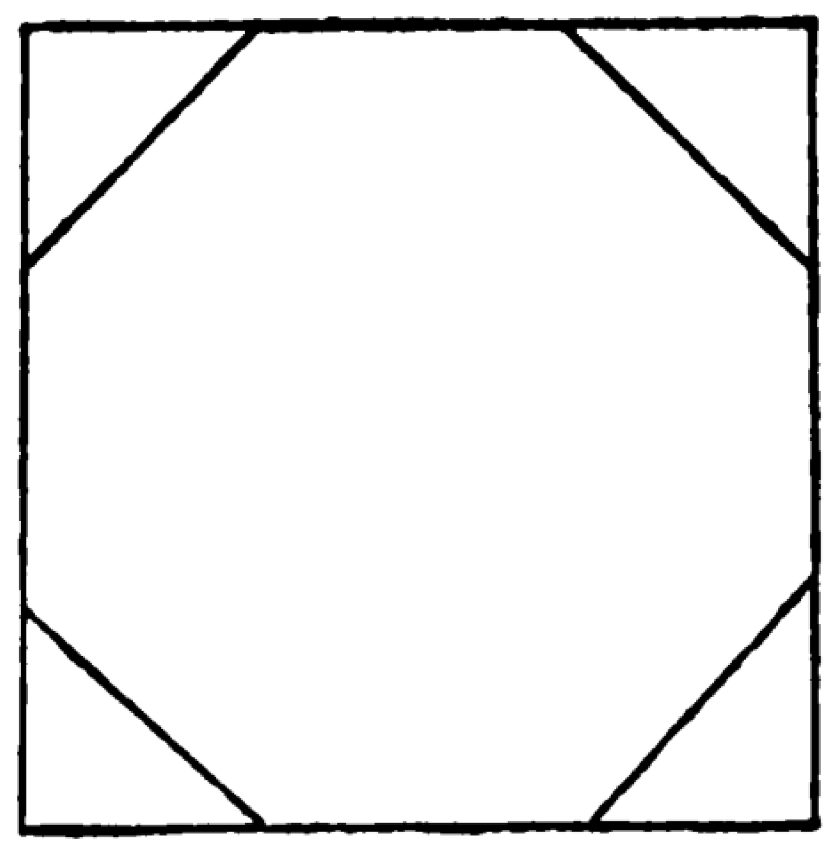
その圖



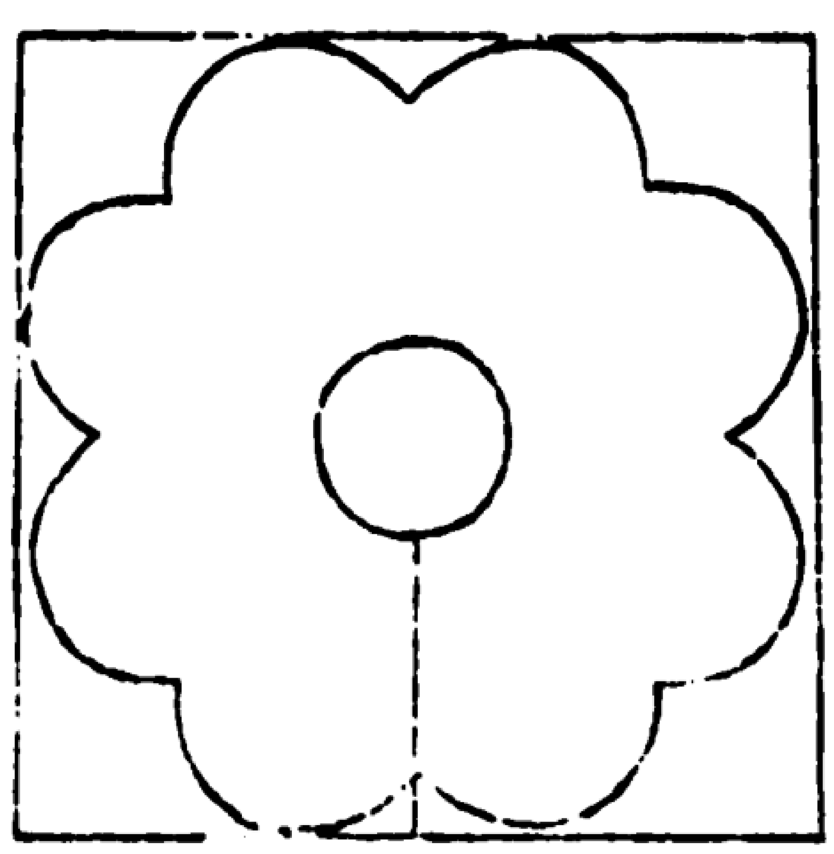
又桔梗形に裁つにも、同し八寸四方の切を同じく四つ
に疊み、またその折目を合せて疊み、三角の形をした
るもの、此のやうにかきとり、開けば即ち八
はしを角となるを、皆開かずして、なほ四
つに折りたき、そを、又上圖の如くに丸くか
のかきたる所どをかきとり、眞中を丸く

切り、開きて折目一條を切りはなつべし。

上圖



下圖



さすれば、初めは上圖の如く八角をなし、角をかき去
りし後、下圖の如き圖をなす。
又梅の形になさんには、先づ紙にて斯樣の形、ま
たるものを四片とかやうなる形のもの一片とを要
す。一片の大きさ大方四寸四方の中ゑぐるなり。又ふ
ちにひだを取らんと思ふには、其ひだの切、巾一寸三
四分ばかり、長さ中ぎれの丸き所の周圍の長さに二倍
したる切五片を要す。又何れも紐のきれを要す。それ
は、なるべくなめらかに、やはらかきものよろしく、
綸絹、桃色甲斐絹等、よろしく、又緋縮緬等をよく用

ゆれど、頸をまさつしてわろきものなり。又眞中の明きは、茶飲茶碗の周圍ばかりにわけ、紐は、大方、丈け一尺二三寸巾一寸三四分ばかりを要するなり。

だいどころ

一あなご

此魚は、七月より九月迄を期節とす。調理法、沸燒、てんぷら、茶碗蒸、甘煮、すし種等に用ゆ。

一ぎんばう

是は五月より九月頃迄を期節とす。てんぷら、甘煮、すし種に用ふ。

一鯨

鯨は五月頃より八月頃迄を期節とす。料理方、わらひ、味噌汁、酢味噌、芥子あへ、鹽漬等なり。鹽漬は寒中の鯨を三寸四方位にきり、鹽を澤山に投れ、桶或は瓶の中に漬込、壓を置き、水のあがりたる時壓をゆるめ置、用ゆる時に出すべし。取出す時は箸を用ふべし。手を入るゝときは、色變るものなり、又鹽水の減じたる時は鹽水を煮たて、冷し投るゝなり又鯨の酢味噌はよき皮鯨を細くきり、鹽出しをなし、ざつと湯がき、大根、きくらげ、三つ葉抔とり合せ、芥子味噌、生姜味噌にて用ふべし。

一葛索麵の製方

小匙一杯の、葛粉に水三合を投れ、能く溶き、文火にかけ、かきまはし、沸騰ちたる時おろして冷し置、これを種として又葛をこねまぜ、索麵のふとさ位に、たるる程にだら〱にこね、別に湯を沸しおき、ときたる葛を引筒に投れ、徐に、沸湯の中にたらす時は、美事なる葛索麵は出來るなり。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



學園

秀歌集（廿九）

鹽井正男

○

秋風もふけて夜さむのいねがてに
　いく度きゝつさをしかの聲

○之は入道覺譽親王鹿をよませ給へるにて、新千載集に載せられたる御歌なり。○秋風も更けて夜さむの。「夜さむ」。夜の風のしん〲と身にしみてさぶく覺ゆるをいふ。「ふけて」は、深かくなるの意にて、秋にも夜にもかゝれる詞にて、秋も深く夜もふけて秋のいよ〲さむき夜寒むの床のとの意にて、「床の」を入れて見るべし。いねがたき。ねられがたさのとの意なり。幾たびきゝつ、幾度とかぞへられぬほど數多度聞きつるよとの意にて、かろく歎息の意をふくめり。小男鹿。男鹿のことにて、さは別に意味あるにあらず、たゞ呼び出しにかぶらせしにて、夜の事をさよと云ふ等は別に意あるにあらず。

○一首の意は、さらでも寒い秋風の、秋も、夜もいたく深くなつて、いよ〲寒き夜さむの床のいねがたさに、男鹿の鳴く聲をいく度も聞きつるよ。きゝて、いよ〲身にしみてねられなくなりしよとの意言外に籠り、あながちに身に染みると云ひしよりはあはれに身にしむる歌にてこそ。

○

四方やまのしげきを見ればかなしくて
　しかなきぬべき秋の夕ぐれ

○之は和泉式部が夕ぐれの鹿の聲をよみたる歌なり

○四方山のやまは、「やも」に同じ。「よもやも」は、四方八方の意にて、四方の山の意に非ず。しげきを

見れば、紅葉の色も露も霧もしげくなりしを見れば
の意なり。かなしくて、身にしみわたるを云ふにて、
其下に堪へられぬと云ふ詞をふくめたるなり。しか
鹿と、またさやうにと兩つにひきかけしにて、なき
ぬべき。なくべき。實に道理との意にて、委しく云
へど實にさやうに鹿も鳴くべき道理の秋のゆふ暮で
あるとの意なり。

○一首の意は、四方八方のもみぢや露のしげくおき
あまるを見れば、實に我が身も悲しく、あはれに身
にしみ互りて堪へられねど、鹿もさやうになくべき
道理の涙の秋のゆふぐれであるよとの意にて、流石
上手の名を負ひし和泉が歌詞もなだらかに、何とな
うかなしくあはれの歌にこそ。

○

うきねする猪名の港に聞ゆなり
　鹿の音おろす峯の松風

○之は千載集にありて、藤原隆信朝臣が夜泊鹿と云
ふ心をよめる歌なり。○夜泊は旅泊のことにて、海
の旅のとまりなり。うきねする。「うきね」は、海の
上に浮きて居る舟の上にそのまゝいぬれど、うきね
をすると云ひしに、うきより憂をひきかけまたうき
旅ねをするとの意を含めたり。「聞ゆなり」は、「聞ゆ
にて足るべきを、「なり」を添へて、感歎をこめたり
鹿の音おろすみねの松風。峯のまつ風が鹿のなくね
を吹き下ろすとの意なり。

○一首の意は、猪名の港にとまり憂き旅に浮舟の上
に、うきねをして居る此處猪名港に、有馬山の峯の
まつ風が、吹き下ろし、其度毎に鹿の鳴くねをもふ
き下ろし、旅ねの枕にひゞき傳はりて、さらでもう
きねのねられぬに、いよいよあはれの身にしみわた
るとの意にて、たゞ鹿の音の聞ゆなりと云ひしばか
りにて、うきねのねられぬことを云ひ、無量のあは
れをふくめたる、殊にしらべ高く、餘韻ある歌なり。

○

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

有明の月は袂にながれつゝ
かなしきころの虫の聲かな

○之は赤染衛門が八月廿日ころに虫の聲をきゝてよめる歌にて、後葉和歌集又續古今集にも載せられり有明の月はあけ方の月にて廿日の月をはや云へり。袂にながれつゝ月の流れゆくと、袂に涙のしとゞなるに月影も流るゝ心かりなりとに、かけしにて、流るゝは更けゆく心なり。つゝは、流れつゝとの意なり。かなしき頃の。身にしみる頃のとの意なり。むしの聲かな。かなは歎息の意にて、さらでもかなしき頃に又此の虫の聲であるよなどの意なり。

○一首の意は秋も深く夜もふかく、月もまた更けゆき、何となうものかなしう涙こぼるゝ袂の上に月影もながれつゝするぞかりかなしき頃の、また此の虫の聲ではあるわいとの意にて、涙の言の葉をそへず、たゞ月の袂に流れつゝとのみいひて、涙の色のしとゞなるさまを裏に見せたる又あはれにて、詞も優なる歌なり。

源氏物語講義（第十）

下田義天類

此の御子三つになり給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のたてまつりしにおとらず、くらづかさ、をさめどのゝものをつくして、いみじうせさせ給ふ。

是より漸く光君の本傳へ入らむとす。

○此の御子　とは、即光源氏の君の事なり。

○みつになり給ふとし、御はかまぎの事　此の事の字の下へ、ありといふ言葉を補ひて見るべし。三歳にならせ給ひし年、御袴着の儀式ありたりとなり。世俗には、三歳の時の祝を髮置といひ、七歳の時の祝を袴着と云ひ習ひたれども、此の頃上つ方にては、諸事を早むる慣習なりし故に、三歳にて袴着の御祝をせさせ給ひしなり。當時の記録を見るに、冷泉天

皇　圓融天皇　花山天皇　一條天皇など、皆三歳にて袴着の御祝をせさせ給へり。これらの風俗を寫したる物語なる故に、光君も三歳にて御袴着の儀式あるよしに記したるなり。袴着は始めて袴を着そむる祝なり。

○一のみやのたてまつりしにおとらず　とは、第一の皇子即弘徽殿の御腹の皇子の御袴着あらせられし時の御儀式にもおとらざりきとなり。一の御子は疑なき儲の君なり。御母方の御威光も盛なり。ことに長男を重くして、二男以下をば諸事簡畧にすることは、世上一般の習慣なり。それらにもかゝはらず。此の光君の御袴着の御盛なりしは珍らしき事例なれば、かくは記したるなりけり。これ、この光君に對する陛下の御寵愛の特別なることを讀者に知らしめむとてのわざなり。こゝに、まされりとかゝずして、おとらずとかきたるは、作者用語の嚴正なる所なり。心をつくべし。またたてまつりしといふ語は、平生の使用法と少し替りたるやうなれども、これは中古の物語文の定法なり。せさせ參らせたる由の意なり。一の宮の御袴着にせさせ奉りし御儀式にもおとらずといふことの轉用なるべし。

○くらづかさ、をさめどのゝ物を盡して、いみじうせさせ給ふ　とは、内藏寮や納殿に御貯へありし諸物品の有りのかぎりを盡して、エラウ仰山にせさせ給ひし由なり。言をかへて申せば、都ての御用度には費をいとはせられず、至りて立派に御執行あらせられし由なり。内藏寮は、職員令内藏頭の職掌の所に掌二金銀珠玉寶品錦綾綵氈褥諸蕃貢獻奇瑋之物年料供進御服及別勅用物事一とあるにてその内に藏めあるもの、あらましを知るべし。

納殿は拾芥抄甲　未宮城部、に

納殿。累代御物納レ之。在二宜陽殿一恒例御物納。藏人所綾綺殿紙御屛風。在二仁壽殿一頭藏人雜色爲レ預。以二藏人雜色出納小舍人一爲二預人一。進二月奏一とあるにて

そのあらましを知るべし。湖月抄に、後涼殿にあり。諸國よりの進物などをさむる所となりと云はれたるは何によれる事にか、新釋以來は此の拾芥抄によりてとける人多し、これによるべし。

但、納所のことは西宮記にもあり。

以上は甚單純なる所なれど、取束ねていふ必要もなかるべし。

それにつけても、世のそしりのみ多かれど、此の皇子のおよすげもておはする、御かたち心ばへ、ありがたく珍らしきまで見え給ふを、えそねみあへ給はず。物の心しり給ふ人ば、かゝる人も世にいでおはするものなりけりと、あさましきまでめをおどろかし給ふ。

○それにつけても　とは、此の光君の御袴着の儀式を一の宮の御時の儀式にもおとらぬやうにせさせ給ひしにつけてもなり。

○世のそしりのみ多かれど。天下の人の誹議讒謗することが多かりし由也。桐壺の更衣の巧言令色に御まよひ遊されて、かゝる表立ちたる御儀式にまで、輕重の秩序を誤らせ給ふよしにそしり奉りしなり。

○このみこおよすげもておはする、御かたち心ばへ、ありがたく珍らしきまで見え給ふを、えそねみあへ給はず。御袴着のことにつけても、世のそしりのみ多かりしかども、されども、此の光君の段々御成長遊ばすにつけて、次第次第に御器量もおうつくしくなり。またおきさへもおかしこくならせ給ふによりて、此のみこをば、敵方の人々にても妬み得ざりきとなり。○およすげは、老着の轉語にて、年たけたるさまをいふ語なれども、うつりては小兒の大きくなりゆくことにも轉用せり。こゝは大きくなりゆく意なれど、成長といふ義に見るべし。○もておはするは、なりゆき給ふと云ふことを君の方を主位としていへることばなり。

○ものの心知り給ふ人は　とは、何かの道理に通じた

る人々はなり。かたましく嫉妬深き人々はさておき、少し何かの道理に通じたる人々は、あさましきまでめをおどろかしたりとなり。

○かゝる人も世にいでおはするものなりけり。これはものゝ心知りたる人の、心の内に賞歎すること葉なり。文法の上にては、寄生句といひて、やどり木の如くに、他の句中に復生したる句なり。故に、ものゝ心知り給ふ人はといふはの字より此の句を隔てゝ、あさましきまでめをおどろかし給ふとやうに續けて見べき所なり。さて、かゝる人どもは、光君のすぐれたる所を歎賞して、かやうの人がマアと褒めたること葉なり。○世にいでおはするものなりけりとは、かゝる御方は、佛法にていはゆる、三十三天とか云ふあたりの美くしき國より外には住ませ給ふましと思の外に、此のマア五濁十惡につゝまれたる娑婆世界にもいでおはするものなりけりと驚きたること葉なり。「ものなりけり」は、俗に物カイナア、サテ〳〵と云ふ程の義なり。佛教迷信の心より出でたること葉なることは勿論なり。

○あさましきまでめをおどろかし玉ふとは、彼のものゝ心知り給ふ人は、此の君を見奉りて、膽のつぶるゝ程目をおどろかし給ひたりとなり。以上を取りすべて申せば、光源氏の君三歳になり給ひし時に、例によりて御袴着の御儀式をせさせ給へり。其の御支度は、曾て一の宮の御袴着の時にせさせ給ひし儀式作法にもおとらず。何事の入りかをも省略し給ふことなく、内藏寮の御貯は申すに及ばず、納殿の御物をまでも取出して、有のことく遣ひ盡して、いみじう美しく立派にせさせ給へり。これ陛下が此の皇子を特別に御寵愛せさせ給ふが故なり。これに付けても、口さがなき世間にては、色々の取沙汰して、陛下桐壺の更衣の女色に惑溺し給ふが故に、長幼尊卑の輕重をも混同せさせ給ひて、彼の御腹の皇子に格外に御手厚にし給ふことよとそしり奉るものも多

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かりしかども、此の光源氏の君の、段々御成長し給ふにつけて、次第次第に御器量もれうつくしくなり、御心むへもれかしこくならせ給ひて、此の世にまたとありがたく珍こしきれ生れたち故に、此の御子をむ大概の人が憎み兼ねたり。あた敵の中らひはさてれき、少しもの丶心知られたる人々は、此の皇子を見奉りて、かくの如き五濁十惡の穢土に、かくの如き人のいかで生れいで給ひにけむとまで褒めそやして、あさましく目を驚かすほどなりきといふ義なり。

漢文學講義（十二）

大林弘一郎

十、書二靜女緒環歌後一　齋藤正謙

正謙、字は有終、拙堂、又は鐵研齋と號し、通稱を徳藏といふ、伊勢の人。津藩藤堂家に仕へて督學たり。はじめ、江戸の邸に生れ、長じて、古賀精里先生に學び、最、文章を以て名を得たりき。慶應元年年六十九にして、歿せり。

著書は數十種ありて、世に行はるゝもの多し。紀行文集には、京華漫錄、客枕夢遊錄、南游志、深泉餘筆などを集め、拙堂文集には、（六冊）その文章を集めたり。又、拙堂文話八冊、鐵研齋餘滴などありて、其の學の博深を知るべし。

いま、こゝに講ぜんとする一篇は、拙堂文集中に收めし所なり。さきに靜女の傳記をかゝげしゆゑ、こゝに之を講ずることゝなせり。

さて、上來講じ來りしものは、みな、傳記、又は、紀行文などの一節、又は、數節を抄略したるもののみにて、僅に、前回の靜の傳のみは、全篇をかゝげたれど、所謂、文脉を見るべき一種の躰裁を備へたるものは、嘗て之をかゝげざりしなり。ゆゑに、今、先、小品文より始めんとて、こゝに書後の一例としてこの一篇を講せんとするなり。小

品文とは、短篇の文字にて、大議論文に非ざるものをいふなり。記事、題跋、書後の類、即、是なり。

書後とは、この文の如く、ある文、又は、詩歌などの後に、自己の感慨、又は、その來歴などを書するをいふ。この文は、靜が彼の鶴岡の社前の廻廊にて、舞曲を奏しける時歌ひし、

　しづやしづしつの緒だまきくりかへし云々の歌につきての感念を述べんとて、その歌を書きしもゝ後にかきつくといふ意なり。されど、こは、之を題にして、其の意見を述べたるにて、眞に其の歌をかきてその後に記したるにはあらざるべし。又、眞に詩文などのその實物にかきつくる時は、かゝる題を「書ゝ後」などかくべきにあらず。こは文章の見出の爲に、文集には、その題を記したるなり。

さて、この緒だまきの歌のことにつきて、前回にかき漏らしゝことあれど、こゝに記すべし。彼の歌も、また、古歌を、上の句にて、五もじよみかへたるものにて、即、伊勢物語に、

　いにしへのしづの緒だまきくりかへしむかしを今になすよしもがな」とあるを引き出でゝ、しづやしづと、文字をくりかへし句調をよくして歌ひしなり。その意は、義經の罪も疑もはれて、もとの身になれ、むかしの身にかへれと願ひしなり。拙堂も、この歌を、靜の作の如く、見做して論じたるは、穿鑿の足らぬやうに思はるゝなり。

中古、宮嬪以才色聞者。聯翩躍出。衆美相映。然冶容之誨。微詞之誘。靦然行之不爲醜。公卿以下馳花鳥使。通殷勤鑽穴隙。唯恐不當。於是槐棘之地。化爲花柳之巷。欲求一貞靜女於其間。不可得也。誰知閭里之選。有名實稱如靜女者耶。」一段

この篇は、三段に分ちてかきなしたる文にして、初の一段は、靜の如き貞女は、古に於いても、比類少きことをいはんとて、中古の平安朝時代の風儀の亂れたるを擧げて、比較し來り、益、靜の品位の高きことをあらはしたり。第二段にて、靜が遭ひたる當時の境遇を論じて、其の志操の堅固なりしことを賞揚し、第三段に於いては、中古時代に文學に長けたる女子多くして、歌集などは殘れる人あれど、靜の如き節操はなし。靜女の歌は稱せられずとも、その行は、當時の女子に勝ること幾等なるかを知らず、もし靜をして彼の宮女の中に入らしめなど、靜は却りて、之を恥づるならんと論じて、益、靜に重をおきたるなり。一層、一層にふかく說き入りて、まことに、面白き文章なり。僅に二百六十二字、三百字に足らぬ文字にて、かく味ある文章をつゞり出でたること、これ大家の手ならでは、なし難きところなり。漢文を學ばん人は、もとより、國文をつゞらん人も、このかきぶりを、心にとゞめおくべきなり。

我が朝中古平安の京の御代には、文學の、いとも盛なる頃にて、國文も、歌も、さかりを極め、宮中に仕へて女官嬪妾のうちにも、學才あり、みめかたちうるはしきが多かりき。即、伊勢、清少納言、赤染衞門、小町などその他の才女ども、聯翩と、うちつゞきて輩出したり。聯は連ることにて、翩はひるがへり亂るゝ有樣をいふ。文選の中の文などにも聯翩の語を用ゐたり。この所も、陸續としての意なり。かく、才女が多く出で來て、互に美を競ひ、互に映じて、まことに盛なりしはいふまでもなけれど、その品行風儀いかにとかへりみれど、誠にみだりがはしき事のみ多く、女子の操もなく、男子に好色もの多くして、風俗の亂れにみだれたることは、藤原氏が政を行へる時代に於いて、最、甚しかりき。冶容とは、冶は女態といふ義にて、女のなまめかしき嬌やかる形をいふ。容はかたちなり。易の繫辭の篇に、

冶容誨レ淫といへる語あり。こゝの冶容の誨とは、これより來れるなり。即、女子が艶色を競ふといふことは、人に淫慾を起さしむるものなれど、是淫を誨ふるなりとの意なり。一轉して、平安時代の女流文學者の素行をさまらず、色を衒ひて、好色の公卿に淫を誨ふるに用ゐたり。微詞の誘とは、微詞、即幽微にして、なぞをかける如き言葉もて、男子を誘ふことをいふなり。かゝる醜行をきはめて、自、その醜なることを知らず、靦然として恥づる所なく、平氣にて、醜き行なりとはなさゞりき。當時公卿も、みな、太平無事の餘に、勇氣なく、たゞ文弱の弊に沈みて、詩歌管絃の遊にあかしくらし、朝廷の政をもかへりみず、女房などを玩びて戯たりしなり。されど、淫風も、自、熾になりゆきしは、自然の數なり。花鳥の使を馳せてとは、歌などを贈るをいふ、詩歌などを、花鳥風月の情を歌ふものなどいふより出でたるなり。歌、ふみなどを贈りて、戀路のかけはしとし、慇懃、即、慇懃に相思ふ情を通じて、之と相親み穴隙を鑽りてとは、孟子に、穴隙を鑽りて相窺ひ、牆を踰ゑてはしるなどいへる句ありて、好色者の戸の間隙などをきり破りて、その女子に遇はんとするをいふなり。かく由なきことをのみつとめて、たゞ、その思の程の透らざることをのみうれへ恐れし有樣なれど、政務も、道徳も、衰へはてゝ、朝廷の風紀は、をさむるに由なきに至れり。

こゝに於いて、槐棘の地、即、三公、以下公卿の居る處は、花柳の巷、即、倡女色をうる處と變化し去れり。槐棘とは、槐は、周禮に、面三槐三公位焉とありて、これより、宰相のこと、又、太政大臣、以下三公のことを、槐位 三槐などいふこともあり。棘も木なり、これも、禮記に獄を棘木の下に聽くなどありて、九棘とつゞけて、外朝の事になるなり。されど、槐棘は、公卿百官の集る處、即、朝廷といふことなり。花柳は、今も普通に用ゐて人々もよく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

意義を知れど、說かず。さて、槐棘と、花柳とを對して、自、面白く文なしたり。

そも、かく風儀の亂れたる時にありて、只、一人の貞靜にして操堅く行靜かなる女子をその中にて求めんとすとも、得べからず。誰か知らんや、閭里の卑賤なる家に生長したるもの、中より選り出でたるものに、名實のよく相合ひたること靜が如きものあらんとは。閭は里中の門、又二十五家ある村を一閭といふ。こゝにては、閭里にて、轉じて庶人の居る所といふ意となるなり。選は、一時の選、又は、一鄉の選などいふこともありて、衆人中より拔き出でたるものといふ意なり。靜にやさしき行と、靜が名とよく合ひたる故に、名實稱といふなり。

この一段にて、中古の女子を抑へ、暗に靜を揚げ賞する案となしたるなり。

方二源大將軍之得一レ志。下乃王公卿相。孰不下仰二其鼻息一。以爲中悲歎上者。獨靜女以二一纖弱之身一。批二龍鱗一。將二虎鬚一。不レ爲二少屈一。歌詞戀戀。言二故夫一不レ置。源大將軍轉乾旋坤之威。竟不レ能レ加焉。於戲。靜女不二獨貞靜之德一。可レ稱。其義且烈。雖二鬚眉男子一。比レ之有二愧色一。況當時諸姬乎。」二段

この一段には、靜が節操を賞揚したり。

初、源の賴朝、流人より起りて、遂に、平氏を亡し、府を鎌倉に開き、後鳥羽天皇の文治二年を以て、奏請して、六十六國の總追捕使となり、諸國の守護地頭を統御して、威權、世に並ぶものなく、天下の大權、全く、その手に歸したり。是に於いて、朝廷は、皆、鎌倉幕府の處置のまゝになりて、關白大臣以下の公卿も誰一人として、賴朝の鼻息を仰いで、その氣にさかへで悲み、その心にかなへで歡びぬものなきに至れり。

かゝる權勢の盛なりし賴朝が、義經を疑ひて、之を

殺さんとしたることとなれど、その怒にふれんことを恐れぬものは誰一人もなかるべきに、靜は、その命によりて、鎌倉にまで召し寄せられ、義經が所在を尋ねられしを、一の繊弱き女の身にてありながら、明に知らぬ由を申して、頼朝が意を迎へず、又、歌舞を奏する時にあたりても、頼朝が怒に觸れなど、その身の危からんことをも厭はず、例へど、龍の顋の逆鱗を手にて擊ち、又は、虎の鬚を手にてとるが如き危きことをなして、これが爲に少しも屈し恐るゝ氣色もなく、二首の歌に、巳が心の程をあらはして、その詞は、もとの夫の義經が事を戀々として慕ひ哀みて止まず、頼朝が乾坤を轉旋し、天地を回轉する程の威力も、つひに、靜が身の上に加ふること能はざりき。戀々は、史記にも綈袍戀々、などの語ありて、人を思ふ心の絕ゆ間なく、常に、戀はるゝをいふ。乾坤は天地のことなり。頼朝は、建久三年將軍となりしなれど。こゝには、追稱していへるなり。於戲、は嘆詞にして、嗚呼に同じ。アヽ、靜女は、たゞその貞靜なる德の稱すべきのみにはあらで、其の義を守り、且、氣力の、烈しきことは、鬚眉の生ひたる男子といへども、之に比べては、愧づる色ある程なり。まして、中古の當時にありし官女などをや。必、愧づる色あるは當然ならん。と餘意をのこせるなり。

當時の語は、今日は、多く誤りて、當今といふ意に用ゐれども、こは、正しからず、古訓に「ソノカミ」とあれど、當年などと同じく、その指したる昔の時代、年代をいふこと明かなり。現今、方今、當今などは、今の時をあらはす語なり。混ずべからず。

前段に、他を抑へて、靜女を揚ぐる案をなし、この段に於いて、極めて之を揚げ、末にいたりて輕く、况、當時の諸姫をやと抑へて、後を起したり。

然諸姫之歌。家有レ集。朝有レ撰。彤管之貽。芍藥之謔。爲レ世艶稱。而靜女之歌。不レ得レ預ニ於其

閒。豈非其爲妓流之故歟。雖然。諸姫嬪而妓。靜女妓而嬪。假使靜女歯列於諸姫之閒。靜女其恥之。三段結

この段には、再、宮嬪を抑へて、靜女の共に歯するをも恥づる所なりと斷じ、益、其の光彩を放たしめたり。

然れども　とは、前段を承けたる詞なり。諸姫嬪の歌は、皆、その家々の集もあり、又朝廷にて、勅撰せられたる和歌集もありて、かの花鳥の使となりしものは、皆その中にをさめられたり。彤管の貽とは、詩經の國風の靜女といへる詩より出でたるなり。靜女其孌。貽我彤管。とあり靜女は、閒雅なる女なり、孌は好きなり。彤管とは、赤き軸の筆なりといへど、未、詳かならず。たゞ、美なる赤色にぬりたる管の類と見てよろし。芍藥の謔とは、これも、亦詩經の國風の溱洧の篇に、維士與女。伊其相謔。贈之以芍藥。とありて、鄭國の男女相與に戯れて、贈るに芍藥の花を以てし情を厚くするをいふなり。此の彤管、芍藥の戯を戀歌などに譬へて、さてこの戯になりし戀歌は、歌集に入りて、世の人にもてはやされ、はめられ、而して、靜女がこのしづやしづの歌は、其の歌集の間に入るに預ることを得ず、これ、靜か身分は妓女の類なりしゆゑに、いやしめられて然るにはあらざるか。然れども、その德行といひ氣節といひ、靜は、實に、比稀なるものにて、諸姫嬪等は、身は嬪なれども、行は妓なり。靜は身は妓なれども、行は嬪なり。かゝれど、たとひ、靜女をして諸姫嬪の間に交り、歯列せしむとも、靜女は、それ、必、之を心に耻づるなるべし。歯列とは、人の座に付くに年齢によるゆゑにいふなり、歯はトシなり。末段の一句、大に力を入れて之を結びたり。以て筆勢の強さを見るべし。（つゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



漫録

神宮御炎上小史（五）

安藤正次

第三、御炎上に對しての朝廷

抑御歴代の間、國家の崇祀として厚く神宮を尊敬し給へることは、今更こゝに喋々せずともの事なるべし。かゝれど、其の神宮に御災變あらせらるゝにあたりては、朝廷は常に深く御つゝしみを加へさせ給ひ、直に仗議を開かれ、或は廢朝或は廢務を仰せいださる。而して尋て宸筆の宣命公卿勅使の發遣あり。節會奏樂等の停止あり。實に一方ならぬ重事なりき。今諸書に隨ひて一表を製しこれらの事例を一目の下に見安からしめむとす。

○因に云はむ。諸嬢も既に了知せらるゝなるべけれど、廢朝はまた輟朝ともいひ、三日、或は五日の間清涼殿の御簾を垂れ音奏警蹕をとゞめ天子朝政にのぞみたまはざるをいひ。廢務とは一日、或は三日の間百官政務をとらざるをいふ。

然るに、左表のごとく、他の御炎上の際は皆廢朝の例なるに、仁安の際のみは廢務にして、殊に五日とあるは、少しく異様にればゆれど、百練抄、玉海、愚昧記によれど、皆斯のごとし。又實錄、文明、延德、永正等の條に何も記さざるは諸書に記載なければなり。その文明十八年十二月の御炎上の際の如きは、親長卿記文明十九年正月十三日の條に、

今日大外記師富朝臣賀來次閑談就二神宮之儀一可レ進二勘例一之由自二頭左大辨一（光忠朝臣神宮奉行）觸レ之就レ無二記錄一于レ今不二勘進一云々何樣廢朝勿論歟之由語レ之於二廢朝一勿論此外軒廊御卜并改元等可レ然之由予

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

命レ之誠さ御坐ありたき由命之とみゆれど、仰出せれたる事は見わたらず、實にもこの頃は、亂離の世の事とて、かゝるやうの事は古き記錄等も散亂して擲例も明ならず。よりて何分の處置もなくして終りたりしもあるべし。猶取調の踈なるも多かるべし。忽忙の中なれど、さる方にゆるし給ひてよ。

御炎上年月日	廢朝	廢務	公卿勅使奉幣等	停節會舞樂等
寶龜十年八月九日	○	○	○	○
延暦十年八月五日	○	○	十四日奉幣火ヲ謝ス	○
承暦三年二月十八日	二月廿五日ヨリ五日間	○	三月八日宸筆宣命ヲ奉ル奉幣勅使參議左大辨藤原伊房	○
仁安三年十二月廿一日	○	嘉應元年正月廿六日ヨリ九日間	嘉應元年正月廿六日宸筆ノ宣命ヲ奉ル奉幣勅使權中納言平時忠	嘉應元年正月元會樂ヲ徹シ國栖ノ歌笛ヲ奏スルヿヲ停ム
仁治元年十二月十一日	十二月廿四日ヨリ五日間	○	廿四日宸筆ノ宣命ヲ奉ル奉幣勅使參議藤原忠高	十二月晦日天皇ノ元服ニ樂ヲ奏スルコトヲ停ム
文明十八年正月廿七日	○	○	○	○
同年十二月廿二日	○	○	○	○
延德元年八月十八日	○	○	○	○
延德二年九月十四日	九月廿一日ヨリ五日間	○	軒廊ニ占フ	○

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

永正二年十二月廿四日	○	○	○	○
永正九年十一月十九日	翌十年正月十六日ヨリ三日間	○	○	翌十年正月節會ヲ廢ス
天文六年十一月廿九日	○	○	○	○
萬治元年十二月三十日	閏十二月二日ヨリ五日間	○	○	閏十二月八日内侍所臨時神樂ヲ延引ス
天和元年十二月十三日	十二月十五日ヨリ五日間	○	二年正月廿九日宸筆ノ宣命ヲ奉ル奉幣勅使參議左大辨宗顯朝臣	翌二年正月千秋萬歲及國栖ノ笛立樂ヲ停ム
文政十三年閏三月十九日	閏三月廿六日ヨリ五日間	○	公卿勅使ヲ發遣シテ火ヲ謝ス	○

主従心得草（前編續）

諏訪忠元 寄贈

律苑行事問辨にいわく●若人財寶をよく用ゐるときは、法の爲、人の爲に益ある事大ひなり。惡敷用る時は、人と法とに害ある事亦大ひなり。たとへば火の如し、火をよく用ゆれば身をあたゝめ、食を煮て大ひに益あり。あしく用ゆれば家を燒、身を亡ぼして大ひに人に害あり。宜敷準例して知るべし。次下の卷にてよく合點すべし。

主従心得草（前編下之卷）

主従心得之事

ありべかゝりといふ書にいわく●或人心經を信仰して、朝暮の務めおこたらず。或は一人旅夜道などは、聲高に讀誦して身の守護とせられけり。或日手負の野猪里へ出で、人々恐れ騷ぎし事あり。彼何某も通かゝり、草むらに身をかくしながら、高らかに心經を讀居たり、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

手負猪の癖として、聲を目當に來るものにて、眞一文字に馳來り、牙にかけて後へはふり、跡をも見ずしてはせ行ける、爰ぞとや思ひけん、一調子張あげて、摩訶般若波羅密多と聲をかぎりによみければ、行過たり手負猪、矢を射る如く引返し、散々にかけゝれば、疵數ヶ所蒙りて、こゝへも出さず倒れ伏、半死半生になりけるを、人々見付戶板にのせて歸りしとなり。災難を除くといふありがたき心經も、用ひやふにてかくの如しとあり、誠に災難をよけて幸ひをあたへ給ふ事疑ひなき經なり。然れ共、用ひ樣がわるい故に、かくの如し。これ機嫌戒をしらぬゆへなり。悅びある所にて經をよみ、念佛を高聲にもふすなど、場所をしらぬ故也。道理を以ていふ時はさしかまいはなきやふなれども、是は遠慮するものなり。儒書にも、悅びの所にて憂の咄し、うれいの場處にて悅びのはなしする、是を目くらといふと論語にあり。見るべし。善も時所を見て行ふべし。日用心法抄愼の卷の、千里を走る名馬も、鼠を捕には猫にしかずの所とあはせ見るべし。

ある御方樣、紀州御在城の砌、御側衆申されけるは、猪にかへせ〳〵と聲をかくれば、取てかへす事、畜類なれ共猛獸格別なるものにて、能其詞を聞しる事殊勝なりと語りければ、狩人彌七これを聞て、素人衆は皆左樣に覺へ給ふ也。何とて詞をきゝわけ可申哉、詞を聞しるにあらず、人のこゑをかけたるを怒て、是をかけんとたけりかへるなり、かへすな〳〵といふても、聲さへかくればかへし申候と申けるを、ある御方聞し召れ、文盲なるものなれども、其業に長じたる者は其理に叶へる事なりと感じ給ひしとなり。これに依て見れば、聲を目當に來る事必定なり。時處のこゝろへあるべき事なり。

又下手な御醫者の、人參を用ひ過し、却て害を招くに同じ。又金儲の爲にとて、金銀數多腰に付て、心しらぬ川を渡り、其腰の金ゆへに沈んで死たる人もあり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かやふな事を忘れて、水に溺れまじき用心に、水の稽古をし、其水故にればれて死たる人もあり。是等は皆自身に繩を作り、其わなにかゝりし人が、又金銀も寶なれども、用ひやふがわるいと、兄弟中もわしくなり、信友と中違ふもあり、常には尤らしき人も、金銀の段になりては無理もしたり、無理もいふたり、日頃の化がわらはるゝ。金が敵といふは爰の事じや。金に己が身をかへるは阿房なことじや。持たる金を放すまいとて命を失ふ人もあり。金銀の出入が病ひとなりて、寂めつうとふた人もあり。金銀を寶として尊むは何の爲じや。餓ず凍へず命を全ふせんが爲也。然るに、足る事を去らざる人は、厚味美服を貪り、得がたき金銀に心を費し、利欲損亡に氣をいため、金はのびるかしらねども、命は五割も縮るなり。たとへば水難火難の時、金銀衣類に心をひかれ、火に燒水に溺るゝに同じ、愚かなる事にあらずやとあり。此所はいちがいにはいひがたし。時により處によりてはからふべし。あまり用心過て、早く逃るにも及ぬず。又金銀等に心をひかれ、欲をかき身をあやまつは論なし、思慮なしといふべし。又江戸などにては、火事の時、何より片付ん、かより取置んと、常に工夫して急事の用心すべし。是も一つのたしなみ也。

（以下續く）

最明寺殿教訓百首（九）

福原菫子寄贈

大事をも獨りはからふこと勿れ
　心に得たる人にとへかし

小事はたとひ爲損じたりとも、身危ふく家を亡ぼすに至らず。其上補ひ易し。大事に於ては、我が一分の分別にて定むべからず。能々考へ盡したる上、必ず賢智老巧の人々に相はかりて、異見を伺ひ定むべしとなり。

まのあたり言葉をかざるつゐしようは
　かならずうしろぐらきものなり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

追從とはへつらひの事なり、善惡利害の差別もなく、當座人の氣にいるやうにとばかりふるまふによりて、其折は誠らしく聞ゆれども、首尾合ずして、必ずうしろ暗きものなり。忠信の人は、善惡利害を辨へて適面にいひあらそふ。言葉正しきによりて當座に人の氣にさからふと雖も、以後の爲によき事必定なり。能くわきまへしるべし。

人のことをわれにむかひていふ人は
　　さぞわがことも人に云ふらん

わが前にて人の噂をなしていひ誹る者は、何事も遠慮なくうちまける人なるが、左なくば佞人讒者なるべし。これを聞用ふる時は、ひが事出で來るべし、然ならば此方の事も他所に於て、有る事なき事を取つけ引つけ、そしらん事疑ひなし。かゝる者は人の中をさき、人の仇を作るものなれば、おそれつゝしむべし。

さのみまだ人の心をうたがへば
　　わがいつはりのほどぞしらるゝ

いかに人の云ふ事には僞りあり、用心せよといへばとて、人每物每に疑ふべからず、あまりに疑ひの心深ければ、眞の事をいふも胡亂に思ひて心に用ひざるやうにすれば、人は重ねて善惡ともに告げしらす事なし。其上人はおもへらく、己の僞り多き心より、人もみな僞を云ふものなりと心得、人の眞を聞入れぬ愚さよと、却て人に我が心をさげしまるゝものなり。僞をむかへず不信をはからず。まづさとる者は賢者なりと、古人は云へり。よく心得べしと也。

むつむ中にふしぎのことを聞ならば
　　みづから行てうちとけて聞け

年頃日頃むつましき中にて、さしたる事もなきに恨みへだつ事あらば、人して聞ては、互の心の底もしれ侍らじ。自身行き向ひて打とけて聞きなば、むかふの人の聞あやまりか人の讒言なるか、其仔細に知れぬべし。さあらばひとたびは恨み隔つ心ありしとても、互の疑はれて、睦まじき事むかしに變らざるべしとな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り。

そらごとはことに妄語の罪ふかし
　わかみまよひて人をそこなふ

僞は人を惑はしそこなふのみならず、我が身も私欲に迷ふより、かゝる心の生ずるものにて、其罪淺からず、妄語をば佛も五戒の中に入れて深きいましめとす、つゝしむべきことなり。

人のうへをいふ人あらん團居には
　事あり顔にたち去りねかし

人の不善をいふ、後のわざはひをいかんせんと孟子に見えたり。人の事を誹る席には同座すべからず。譬ひ已は云はずと雖も同心するに近し、其罪のがるべからず、いかなる事を設けてなりとも、品よく其座を立さるべし。

惡しともよしともいかでいひはてん
　をり〳〵かはる人のこゝろを

人の心はどうつりやすきものはなし、今日は善を脩めて明日は惡を行ひ、昨日は惡を犯して今日は善に移る、これを善人といはんとすれば惡行あり、惡人といはんとすれば又善を脩むる時ありて、善惡更に決定し難し。然れども善行多くして惡行少なきは、善人たるべし、惡行多くして善行少なきは、惡人たるべし。世の人のくせとして、もし人たま〳〵善事をすれば其儘善人とゆるし、過ちて惡事にふるれば惡人といひなす、其惡人を善人とゆるすは、善に失するを以てなほ可なれども、善人を惡人といひなすに至りては、はなはだしき過ちにて、淺猿しき心ならずや。

何ごともなし終らざる其さきは
　さうなく人のうへをなじるな

人のしわざによろしからぬ事ありと思ふとも、其落着を見とゞけずしては、むざと難じ誹るべからず、何たる思ひ入れあるやもはかりがたし。世俗の、細工は流々仕あげを見よといふことわざの如し。

よしなきにあまり過たる介抱は

愛るにあらでそこなふにこそそれ〳〵に介抱さする人もあるに、わが孫など〻て、寵愛のあまりはしたなく介抱すれど、恩になれ愛を頼みて氣隨になり、其上無學無能にそだちては、其寵愛は却て仇となるべし。又其愛するさまも見苦しかるべしとなん。子を愛するも又心得べき事なり。いたづらに愛に過れど、これを常のことの如く思ひ、恩をたのみて下知を用ひぬものなりといふ心もこもれるにや、女子と小人は養ひがたし、これを近づく時は不遜なり、これを遠ざくる時は恨むと論語に見えたり、能き程々を愼みて、過不及なきやう愛すべしとぞ。

筐底楮餘（三）

紫光

○徒然なるまゝ、かたはらの稗史草子類をぬき〳〵よみゆく中に、左の一節を見いでたり。こは世間娘氣質といへる卑俗の草子の中にあり。文辭いやしく言語極端にはしれる嫌あれども、その德川氏の中頃以後、風俗の漸次頽敗に及び來れる當時の有樣を罵倒したる筆つき、また一顧を値せずはあらず。

往古は律義千萬なるを人の娘氣質と申侍りき。近年は人の娘内儀もれとなしからずして、傾城、遊女、芝居の女形の形容をうつし（中畧）されど、當世の娘の風俗、洒落過て遊女の如く、派手になれるは、母親の鼻の先智惠にて、大概なる器量なれど、娘自慢して目立つ衣裳をきせて、人立多き寺社へ連れゆき、浮氣男の見かへし立とまるを悦び、恐らく此方のやうな娘もつたものは世間にあんまいと、鼻高うしてゆかるゝはにくからず。十三を頭にして五人まで年子にまうけて、母者人といはるゝ家主の身をもち、物見物参りに遊女の如く品つくり、派手なる衣裳着飾りつゝ、かゝ樣ゆかうかと聲々に泣わめいて跡れふ子供を内にすてれき、子のない顏して世間の男に見られにゆくなど、假令心は貞女にしても、子にか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へて伊達を好み、人立多き所を心がけてゆく氣から
は、内の事も、子の事も、親の事もわすれはて丶、
大盡めきたる當世の美男に自然と心はうつりにけり
な、いたづらの浮名たつ基ぞかし。

○奇名とて續視聽草六集の一にみえたり。實に奇名な
り。眠氣さましにとてかきつく、

松平豐後守家來　七寸五分刑部左衛門
二札　正善六

松平政千代家來　谷谷谷谷
八幡　男也
三分一所　典膳

小笠原左近將監家來　松魴　目出度左衛門

松平越前守家來　狩野　鹿左衛門

鍋島攝津守家來　嬉野白石諸家彌十郎

松平相摸守家來　古屋沛　跡新九郎

藤堂和泉守家來　七里　鎌倉兵衛

松原志摩守家來　大恩　雖有左衛門

宗猪三郎家來　竹串　傳角左衛門

有馬中務大輔家來　太田又三郎與衛之助

酒井新十郎家來　竹下　太八左衛門
一石　八斗兵衛

水野日向守家來　大岡田お新助之進五郎左衛門

松平壹岐守家來　松加目　由兵衛

松平甲斐守家來　穴山　宮內兵衛

奥平大膳大夫家來　築紫脇姓高山綾太郎彥

京極能登守家來　菅沼　刑部左衛門
今　一

松平周防守家來　草刈　鎌右衛門

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

牧野佐渡守家來
四月朔日夏左衛門
水戸殿家來
野呂山野孤六
本多中務大輔家來
白貫滿足兵衛
一二三四五六
牧野河内守家來
入交彌六右衛門
御旗本衆
米津梅干之助
長坂血九郎
竹内五六左衛門
伊與田一二左衛門
簑笠之助
三好好三

此の名の中には讀み下しがたきもの多けれども、原本みさゝ草はたゞ内閣と林崎文庫との二所にあるのみにて、何れも訓讀を附せざれば今考ふるによしなし。

(正誤) 前號筐底楮餘(二) 四行目に「末社會に溺浸せざるに」とありしは「末社會を退去せざるに」の誤なり。

編者いふ。この一篇は、武陵といへる人のもとより寄せられたるなり。見れど、如何はしきふしなきにしもあらず。さるは、賤しき遊女にはあれども、我が血をけがして、外國人にとつぎ、はたまた、國禁を犯して、故國を去りしなど、一筋に、この人をかりを責むべきにはあらねど、あるまじき身の行なり。しかはあれども、その他郷にあて、よく父母の國を忘れず。母の像をつくりて、せめてもの心やりとし、はた、わが不孝をわびて、妹をして、代りて孝養をつくさしめんとしつる心のほど、思へど、あはれなり。今は、たゞ、過しむかしの代に、かゝる事もありけり、と、しらしめんとてのせつるなり。さて、うひ〳〵しき人の見んに、その取るまじきと、とるべきとの赴をとりたがふることあらんを恐れて、かくは、一言そふる

になん。

十六年後の音信

武陵生

今は、交通の道も開けたれど、我邦人にして、遠く歐米に遊ぶもいと容易けれど、僅かに四五十年の昔には、海の外とし云へど、支那朝鮮の近きにだに、出で行かんこと、なか〳〵に難き業にてありき。こゝに、徳川の代、人は皆宴安逸樂、只これ事として、華奢風流の頂に達せし文政の頃、長崎より、紅毛の人に伴はれて、遠く彼の國に渡り、身は、紅毛人の妻となりて異郷のホームを樂みつゝも、猶、我が家庭を偲びて、故郷の母妹を慕ひし女あり。この女、元卑き者なれども、國を出でしより十六年の後、雁の信りに托せし、水莖の跡をたどりもてゆけば、あはれなる節なきにしもあらず。左に先づ其の人となりを記し、次て其の文の跡を追ひて、聊か我が思ふ由を記してんとす。

大阪谷町上の橋の邊りに、堀屋清兵衛と云へる者ありけり。おふみ、おてふと云ふ二人の女の子を持ちしが、其の家、貧しかりけん、清兵衛死して後、即ち文政七年と云ふに、長女のふみを、同地新堀の松重と云へる迎屋に年季奉公せさせしが、其の翌年、ふみは、長崎丸山の遊女屋、某方に住替へたり。當時、長崎は、我邦唯一の貿易港とて、支那、朝鮮の人は更なり、碧眼紅毛の輩も、此處に集り來りて、商利を爭ふ間には、青樓に果敢なき遊びに耽るもありけり。おふみも、遊女の身とて、外つ國人にも見え、果は、某和蘭人と割なき間となり、終に、錠嚴しき國禁を犯して、外船に匿れ、伴なはれて、彼の地に渡りて、其の者の妻となりぬ。偖て、長崎の抱へ主は、おふみの姿見えねど、當座の中は、彼所此所と行方を探りしかども、果は、他國に奔りやしつらん、はた、欺かれて、殺されもやしつらんと思ひすてき。大阪なる堀屋にては、交通不便の當時とて、山河二百里を隔てたる長崎と云へど、遠

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くも思はれ、既に、れふみが該地に赴きし時より、現世にては、またと會ふまじきものと覺悟して、只、折節の音信を、切てもの心遣とせしが、其の後、音信も、ハタと絶ゑければ、今は現世に亡きものと思ひて、折にふれ、時につけつゝ、れふみが、後世を弔ひけり。

さるを、れふみが、大阪を出でしよりこゝに、十六年にして、思ひもかけぬに、長崎の通詞の手を經て、死せしと思ひし、我が娘が、肉筆の書狀は、母の許に達しぬ。その文左の如し。（原文の儘）

あまり〳〵御なつかしく文して申上まゐらせ、まづとや御元様いよ〳〵御機嫌よくいらせられまづ〳〵めでたく存上參らせ候誠にわたくし事ふとした縁にてれらんだの人テルユウと申御方に二世のけいやくいたし文政八年酉九月二十二日長崎より船に乗せられ船の底に私を忍ばせ●よふ〳〵ぬけ出日本の地をはなれ北海へ廻り尖（此の字不明）の沖に參候しきりに母様の御事のみ思ひ晝夜なきわかし申候七日ぶりにてゑぞの西南に見ゆる松の間にふじの山といふて●れがむばかりたいものをも云はれずふじの山は日本の地なり我國の見納めと思ひまはせば猶も〳〵母様やれてうの事のみ忘れられずいとゞしくなきくらし候中はやくれ其夜大風吹二十日計りも晝夜なしに船はしりすこし風やみ候處船の●ろふと申へ上り四方を見れば東南に當り一つの家ありそれを尋ね候へばヤリスハと云ふ日本の地を四百里はなれたる島と申此處に船とまり明がたにまた〳〵風吹たより唐の地北海とやらいふよしにて船はしる事凡三十日ばかりにしてやう〳〵風も止みれだやかに相成其所にてれらんだと申所へは是ゟ何程の道あるやと尋候へば二千里之有中々見ゑ申さずとの事ゆへ●彌古鄕の事ばかりれもひ出し母様妹戀しくなつかしきは何共〳〵申盡しがたく候偖々我身因縁とは申ながら不孝のものだといとゞなつかしく悲しくたゞうつら〳〵と晝夜なきわかしわじきなき身をうらみにぞん

じ候うちにはやく正月十三日と申すにてんちくのイハエと申所へ船を付其處にれらんだの船問屋ありてシヤキアと申家あり其内に久々逗留致候へど其地の人に五里六里又は七里又は十里二十里三十里五十里も先より見に參り申候夫より又々風に帆をかけ五月朔日にやふ〳〵れらんだの國エケルと申家の名なりケルトは町の名なりの夫名はテルユエ（前にはテルユウとなり）と申候其家に母樣と妹弟一人あり日本にて申候へは庄屋の頭とも申程の家がらにて人をも多く遣ひ何不足もなきくらし方にて候へ共此方母樣はじめ皆々樣のたべものは牛や豚なるものを常々たべられ候五穀と申ては少しもなく冬まで麥のよふなるものあり去りながら我身は日本の人なれどとて天竺より米を買置たべさせるゆへなんぎは少しも御座なく候日本の事思ひ出し候處にこゝ元妹の氣の毒がり我夫と相談致し候てかこひの内三十坪どかりの田地をつぶし日本の町家のまねをこしらひ其の上母樣の木像と妹の姿とをこしらひさせてくれられわれの髮をいふまねして母樣妹とわかれし時の形はあり〳〵とまねして色々と酒もり遊び誠に〳〵何不足なく殊の外睦まじくくらし候内男子生れ名をイイキンと付てもやはその年も七つになり日本の生れのはなし聞かせ候へど日本の母樣妹に逢いたい〳〵とこがれ暮し候長崎の友達へも文遣し候事もよふいにはなりかね母樣へも申上たき事思まし候へどもよく〳〵ねんごろなる此地の人にてなければ只の一筆の賴もむつかしく又長崎にても通詞へまゐないして程よふ賴まねど何かたもなんぎになり此方の夫も立ゆかぬやうになり御地へ行事も六つかしくれそろしき事の由それゆへ久々文も上る事ならず此度ふとしたびんぎ神佛のれかげにて届け下されといのり〳〵又々めづらしき物たんと上度存居候へ共文より品ものは殊の外むつかしく萬一あらはれ候へば大に六かしく文はあらために

相成候てもかくべつの事さへ書かねばあらはれ候てもかよう〳〵のしさひと申譯わかりさへすれば格別の事までにもなり申さず候のよしの譯ゆへ私髪を切り少し送り候まゝ私と思召し下され候やうにと御願ひ申上まゐらせ又御文御越し被下候思召にもあらば其地の唐ものをらんだもの薬種など長崎より頼み長崎にて通詞に上書を書いてもらいなされて御送り下され候へば相とゞき申候事のよしに御座候誠に〳〵不孝のだん〳〵何分にも過世の因縁と御聞わけ御あきらめ幾重にも御免し下され候やうに御頼申上まゐらせ妹をてふを私と思召又をてふは母様を私の替りに思ひ跡々の孝行頼入申候まことに〳〵申上たき事は山々に御座候へ共筆にも書盡しがたく泪にて跡やさきにて申上がたくまゝまづ〳〵あら〳〵かしく　をらんだにてふみ事

一月十三日　ふるちるより

これを得し、母と妹との喜びや、如何なりけん。驚きや、如何なりけん。將た、悲みや如何なりけん。名さへ知らせぬ外つ國に在りと知りては、驚きて泣きもやしつらん。無事とは云へど、程遠き國とて、翼なき身の如何でか、今生に又會ふ事のあるべきと思へば、慨き悲みもやしつらん。當時の狀、推量られて、あはれなり。偖て、この文の表に就て、一つ二つ、我が思ふ處を記るさんに、ふみが、到着地をらんだと書し、又、其の夫をも、をらんだ人とすれば、和蘭に至りしやも知るべからざれど、其の頃は、碧眼紅毛の輩とし云へば、皆をしなべて、をらんだと稱せし事なれば、果して、和蘭に至りしや、又、葡萄牙に至りしや、將、又、其の他の國なりしやも、未だ量り知るべからず。當時の瀛船と云ふもの、未今日の如く發達せざりしを以て、航路の長かりしも、理りながら、之に依て、觀れば、長崎を出でゝより、本國に達する迄、七ヶ月と十日程を費せしと見ゆ。其の航路は云ふ迄もなく、西にとりしなるべきに、書中蝦夷と書し、富士山を見る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

などあるは、無識の女、地理を辨へねど、日本の果は、只蝦夷とし思ひ、倒扇形の山を見ては、これ我國の富士とし思ひひがめしものなるべく、其の他、天竺と云ひ、何々と云ふは、共にこれ、彼女が耳朶に響きし、片言に己が推想を加へしものなるべく、之等は元より、評する價値もなし、只一言云はまほしきは彼女が、十年異鄕のホームにありて、之に、我邦の家庭を適合せし事、即ち、是れ也。夷國の制、夫婦を元として、舊姑姉妹の如きは、之を次位に置くに係らず、彼女は、外人に誘はれて、其の地に到り、其の妻となるや、我邦の如く、夫の母を我が母とし、夫の妹を、我が妹とし、夫の弟を、我が弟とし、所謂姑小姑、及び小舅に事ふる狀あるにあらずや。見よ、其の文中、『其の家に母樣と妹一人あり』云々と書し、次で、其の人々の肉食を厭へる風は、ほの見ゆれども、其の人を厭ふ情は見ゑず、否、寧ろ相愛じて、一家能く和合の趣を示せり。見よ、彼女が、故園を忍ぶ情切なるや、『こゝ元妹の氣の毒がり我夫と相談致し候てかこひの内三十坪ばかりの田地をつぶし日本の町家のまねをこしらへ其の上母樣の木像と妹の姿をこしらへさせてくれられわれの髪をゆふまねして母樣や妹にわかれし時の形はあり〳〵とまねして色々と酒もり遊び誠に何不足なく殊の外睦じく暮し』と云ふにあらずや。嗚呼、彼女が低き家庭といへる思想は、萬國、何れも我が邦の如しと信じ、其の海外萬里の他鄕に在りても、猶、夫を夫とし、姑を姑とし、兄弟姉妹を兄弟姉妹として、優しく溫順く、總て、我が日本風に相過せし情趣は、蔽べからず、而して、此の情や、彼れ紅毛の輩をして、猶、且つ睦じき好家庭を作らしめしが如し、彼の近時、猥りに洋風を眞似て、家庭治らず、甚しきは夫妻權利を爭ふ醜聞に比して、勝る所幾何ぞや、嗚呼、我が東海忠孝の國の敎は、以て、この、無敎育無理想の賣婦を以てするも、猶、海外異邦の徒をして、遷善導化せしむるに足るにあらずや。猥りに、歐米の風潮に心醉する者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反省して可なり。而して、其の末段、男兒を擧げ、長じて之に母の郷國を説くや、『日本の母樣 妹 に會いたい〳〵とこがれ暮し』と云ふに至ては、何等眞情の語ぞ。肉親の情は、實に外つ國も、大和人も別ちは無きぞかし。

元より、れふみが如きは身卑しくして、敎とても、なき身なれど、世に嫌はるゝ外人に嫁せしものにて、同じ遊び女とは云へ、降るアメリカに袖も濡らさゞりし女郎花とは、雲泥の差はあれど、六十年の昔、遠く異郷にありて、已が家情を報じ越しつる狀の珍らしけれど、斯くは蛇足をも、加へたるなり。偖てれふみも、其の紅毛の一家も、將、大阪の母も妹も、其の後は、如何ありけん。我れは、知らず。指折數ふれど、此の書狀の大阪に着きしは、天保十一年にて、今を去ること、五十九年の昔なれど、それ等の人々、今は此の世にありやなしや。

才くらべ

蓬生屋女史

むかしある家の一人娘、ふと病にかゝり、此處ぞわろしと云ふ所も見えねど、食事もはか〴〵しうせず、次第〳〵に疲つれ、さては糸よりも細くなりゆきて、玉の緖もやがては絶えむとす。兩親いたく憂ひ、さま〴〵介抱なし、醫師もさま〴〵術を盡したれど、去るしも絶えてなかりき。如何にも之れは、おもひの積りし病、何ぞ其の根とおぼしきことはあらずやと、醫師は兎角父母に問へど、かねてより思ひのつもりと仰せらるれど、心をつくして、もとの雫尋ねつれど、何もこれぞと思ぼしき事も候はず、たゞ、先つ頃、爪をとりしにその取りたる爪を火鉢にくべをりしかど、さやうなることとしては狂人となるぞよと叱せしが、そを、其の當時いたくこゝろに懸け居りしやうなり。されどまさかに、さ樣なることにて病氣となる事もなかるべしと、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



うち聞くや、醫師は、忽ち病床におとづれ、其のいたづきを問ひ、火桶に手をかざしつゝ、我とわが手指を守りて、いたく爪生ひたり。つまゝくぞ思ふ。鋏や貸し給へと請ひつゝ、やがて取り出すはさみ、左右の爪しきりにつみては悉く火桶の中の火にくべぬ。この娘、全くそをこゝろにかけて病となれるにて、之を見るより、醫師すら、火に爪をくすべぬ。何とて、爪くすぶべしとて狂氣せんと思ひつゝ、それよりは胸もとみに開らけ、藥餌もすゝみ、幾ほどなくもとの身になりけるとぞ、實に醫は術のものにぞありけるよ。

○

またむかしある醫師あり、やむものあれど、上下をえらまで、いと心をくだきて療治をほどこしけり。ある時いとまづしき人の病にかゝり療治を乞ひたるあり、醫師速かにこれを診察し、藥箱とり出でゝ、やがて、藥調せんとて上なる箱の蓋とるに、其の母なる老婆のつくづくと見てありしが、何思ひけん、いざり出でゝ、憚りなることながら、ねぎ奉らまほしき事こそ侍れと

て、そのまゝ云ひかぬるやう引き入るに、醫師はやさしう、何にても思ふことは、はゞからず云ひねといふに、老婆はいとゆゝしげに聲ふるはせつゝ、誠にあつかましき願ひなれど、下にくまれたる箱の藥をたび給へとつゝましう云ふを、醫師聞きて、思はず微笑み、さらば與へんとて、下にありしがうちの、さはりなき藥、二三種かひまぜ、與へ、かの藥は必ずしるしあるなるべしとかたりしとか。醫は術にて、病は神經のわづらふものなり、心だにやすまらば水も藥となるべく、心にさからはゞ、滋養もまた養ひとならざるべし。此の醫師さやうにせで何には何々の方劑調ず、これには何々の藥用ゆ。上の方におのづからその藥入れおきたれば調ずるなり。下の箱のものとて尊きものにもあらじなど細々說くとも、おろかなる人、如何で聞きわくべき、たゞ請ふまゝに、害なき藥とり、調じあたへしくすしき、くすしの法を知りたるものとや云はまし。此の才、ひとり醫師のみならず。つね人にも要すべき事にこそ。

兩縣令競レ義婚ニ孤女一（一）

湘玉女史譯

唐の天下亂れてより之に續て興り國號を建てたる者を、梁、唐、晋、漢、周とす。是を五代と稱ふ。五代の季は周にして、周の太祖郭威位に即き、年號を廣順と改め、正統天子の尊きに居れども混一の業を成したるにあらず。四方に割據し雄を稱するもの猶幾處あり。周と共に五國三鎭とす。那の五國と云ふは、周、南漢、北漢、南唐、蜀にして、周は郭威之が主たり。南漢は劉晟之が主たり。北漢は劉旻之が主たり。南唐は李昇之が主たり。蜀は孟知祥之が主たり。那の三鎭は、吳越、湖南、荊南にして、吳越は錢鏐之に據り、湖南は周行逢之に據り、荊南は高季昌之に據れり。

單說、かの五國の一にして南唐李氏の統轄する江州地

方の内に徳化縣といふあり、この縣の知縣を、姓は石、名は璧と云ふ。原來石璧の生國は、撫州臨川縣なるが、建康と云へる土地に流寓ひ居たるに、年四旬餘にて夫人を喪ひ、又兒子なく止一人の女兒ありて名を月香と呼び、今歲漸く八歲の春を迎へけり。さて石璧は徳化縣の知縣に任ぜられたるによりて、女兒月香と、一人の養娘とを携へて任地に來れり。この石璧官人となりて行狀至て正く、淸廉を旨とし、絲毫も人の物を取ることなく、單徳化縣一口の水を喫するばかりなり、又且訟を聽くこと明決にして、寃を雪ぎ滯獄を理め、果然政は簡に、刑は淸く、民は安く、盜賊は息み、管下の人民は仁政を仰ぎて其徳を稱せり。而して石知縣は、廳堂を退きてのちは別に樂きこともあらざれば、只女兒月香をかき抱き、膝の上におき、彼に文字を敎へ、あるは養娘を他の相手とし棋を打たせ鞠を蹴らせ、其他百般の頑耍を爲さしめ、自已は傍に在り之を敎へ、只娘なき女兒なるがゆゑに、只管成長を待ち、掌中の珠、頭挿の花を十分に愛て育ひけり。一日月香は庭にあり立て、養娘と鞠を蹴りて遊び居たるを、石知縣も出で來りて見居たるに、養娘が踢上たる鞠は力の入り過たるにや、墜ち來りて地を撃ち、跳り上りては又地を撃ち、幾回も跳りて終に溜々と滾りて、庭中にある穴の裏に滾り入たり。この穴は缸を埋め水を貯へんとて堀りたるものにて、深さ約二三尺許りなり、養娘之を攪らんとするに、手短く穴深くして攪り得ざるゆゑ、穴に跳下りて拾ひ上んとせしとき、石璧は且く待てと呼住め、月香に對ひて、你あの鞠が自然に出來る樣にする計較ありやと問ひければ、月香しむし打案じてありけるが計ありとて、養娘を呼ひ、一手桶に水を提げ來らしめ、穴の内に傾け入ければ、那の鞠は、浮びて水面に在り、再び一桶の水を提げ來らしめて注入たるに、水穴の内に滿たると共に、鞠は自然と水に隨れて浮び出けり。本是石璧は女孩兒の聰明を試さんとの心にて問を設けたるに、今女兒の水を取り來りて鞠を浮び出

させたるを見ていと喜ばしげなるけしきなりき。閑話休叙石壁任に在ること未だ二年に足らざるに、官星不現。不思議の禍起れり。ソは何事なるか、一夜れのが管領たる官倉に失火あり。急ぎ驅つけ火を救はんとするとき、既に早や官糧千餘石を焼き損せり。那時米價極めて貴く、一石は一貫五百錢に値れり。特にかの五國三鎮雄を爭ふ折柄とて、軍糧は最も重んせられたり。南唐の法度に、凡官府にして軍糈を破耗こと三百石に至る者は斬に處するとのことなり。只石壁は是個の清廉の官人にして、且火災は天數に出、石壁か私弊の爲に官糧を耗せしにあらざれども、上官は都て石壁の爲に分解して無事をはからひ呉れたれども、唐主の怒猶いまだ息ますして、石壁の官職を削り、米の價を賠償はしむ。其估價共に一千五百餘兩に該れり。石壁は家私を變賣して賠ひたれども、未だ半をも賠ふに足らず。石壁は本府に呼出され、軟監となり、且容赦なく嚴しく迫り追られけれど、石壁鬱憂の爲に病を引起し、數日の後返らぬ旅路に赴きたり。あとに殘りたるはかの女兒と養娘との二人にて、是も牙婆の手にかゝりて身を賣り、其身の價をもて官の償の中に加ふるも免かれず、是等の苦楚は思ひ遣るだに哀れなり。正是屋漏更遭連夜雨。船遲又遇打頭風。

（以下次號）

一休和尚のはなし（一）

草屋主人

一休和尚と聞ゑまつるは、後小松の帝二の宮にて、はやう世の人の口碑に傳ふる、歌にも後の小松の二葉と詠ぜられ、げに二葉より雲井の松の光榮、他にいと殊なりて、めでたう、やむごとなく、げに白雲の高き御位をふみちらし、大内を跳り出でさせ給ひ、十宗をたゝ一目に睨みちらし、達摩宗に入り給ひ、塵の世に下りさせ給ひて、塵になづまれず、天の原高き聖りの御

身を以て天の下をさばかり見下し給はず、磊落奇偉、非常の才智才學と直き御心一つを以て、世の人をさいどし給ひしいと有り難き聖りにはおはしけり。

げに、峯の小松の二葉より、世のなみ松の色とは異なり玉ひて、利根發明たぐひもおはさざりけり。和尚の師の坊をば養叟和尚と申されけるが、一休が志行非凡にして、しかも才智すぐれて奇偉おもしろきに、いとかしこがり、めでたがりて、教導し給へば、檀家の人〻もまた之をめでおもしろがるもの多かる中に、某とて師の僧といと中よく、つねに來りて物語り、一休和尚に參學などしては、其の發明なるを心地よく思ひ、折りふし戲言を云ひては問答などしけり。和尚もまた此の人をおもしろく迎へて、ざれごと返しつゝ云ひつせしが、或時その、檀那、皮袴を着て來りけるを、一休ちらと見るや、急ぎ走り入り、忽ち一片の木をとり出で、此の寺の內へ皮のたぐひ固く禁制なり、もし皮の物入るときは其の身に必ずばちあたるべし。

とかきて門へ建てられけるに、かの旦那見るよりいとをかしく思ひ、小僧はやくも、わが皮袴着たるを見付てかうはたてけるよ、さかしくても未だ小僧、一番へこましくれんものとおもひつゝ、皮のたぐひに罰あたらんには、此の寺の太鼓は何とし給ふぞ、內にすゑあらずやと云ふを、一休きゝもあへずさればとよ、夜晝三度づゝ、ばちあたりぬ。御身も皮の袴着たればばちあて申さんとなりとおどけられしに、檀那は中〳〵に已へこまされて、言語も出でず、くやしきおもひして歸りけるが、さて、此の報いせましものと思ひつゝ、後ほどありて、師の房を齋に呼び、一休をも御供にと申しぬやがて、其の日となれり、師の房は云ふがまゝに一休を伴れ、時をはかりてかの檀家に至りたるに、入口の前に川ありて橋かゝれる家なりけるが、其の橋の詰めにかなにて、此のはしをわたるべからずと高札に書付ありたり。師の房これを見るより、一休にむかひ

さてもをかしき札を建てれくよ、此の橋亘らずして、何處よりか行かれん、外に道あるにやとためらはるゝを、一休申さるゝは、否、此のはし亘るべからずと、かなにてものしあり候へど、橋にはなく端にや候はん、眞中をこそ御亘りあれと云ふに、師の房感じ入りけり一休もつゞきて眞中を渡り入りたるに、まちまうけたる主人、如何に利發の坊も之には心づかず、あながちに渡りや來にけんと思ひ、やがて不思儀げに出であひ、禁制の札を見させられつらんに、如何ではし亘らせ給ひしぞとゝがめけれど、いや、吾等はしは亘らず、眞中を亘りけるのみと仰せらるゝに、またやられたり數日のたくのみの高札、木ぎれにはなりけるよとあきれて口をつぐむぞかりなり。重ね〱の不覺をとる口惜しさ、何をか不審をたゞし、如何にもして一つたりともへこませくれんものと、さまざまに眼をくばり、凡そ沙門の形と云へどにんにく二体の衣を着、ざいしやうざんげのけさをかけてこそ僧とは申すべけれど如何に小僧なりとて、俗衣の出でたち心得がたくと申せど一休いとけなけれど、いとけなげにも歌一首よみて答へられける

きてきたぞ本來空のくろごろも
袖ながからで人こそはしらね

とつかまつり玉へど、まけの衣又さする事叶はず、亭主も師の房もたゞ手をうち、アトあきたる口、中々にふさぎ能はざりしとなり。實にみねの小松二葉ながらにかゝりけり、後や如何に秀づらんと手もとみにきかずなりたれど、まづ此處に一休みつかふまつるべし。

笠子笑談集

金津常十郎

生れかはる傳授

ある人一休和尚に問て曰、世の中に鬼門および色々の方障にて死ぬものがまゝ是あり。何卒こんな事の罰の

わたらぬまじなひでもないものかといへど、そこで一休いはるゝは、それこそ心安き傳授があると申せる故、其傳授ねがはくは教へ給へといへど、いや外の事でもない、貴殿生れかはりさへすれど、そんな祟のある事はないが、生れかはるには、ちよッと一度死なねどならぬといはるゝゆゑ、それはあまりのたはむれごとゝいへど、いやいやたはむれ事ではない、其死やう教へてやるほどに、死して見たがよい、貴殿晩に寢る時、只今目を落して死したりと思ふて、ぐつと寢てしまふと明朝目がさめる、其さめた所を生れかはつてしらぬ世界へ生れ出たと思へど、さつぱり前の世の事は何もかもしらぬはずなり。それじやから、鬼門といふ名もなし、色々の方角の名もなけれど、罰のあたるはずもなし、扨も樂みな世界ではないか。

註に曰、人に因て、方障などを手柄顔に推すものあり。然れども、是又胸中に一ッの拵物があるゆゑ、其推すと云ことがあるなり。それゆゑ、どこぞの處で、自身勝手に其罰をあてゝうろたゆるなり。論じて見ると、推すも從ふも、同く胸中に鬼門などの建立ものが有ゆゑ、どちらも罰を又建立するなり。是皆吾心よりして拵るとは知らずして、あながち向ふに在物とのみ思ふて恐るゝは、いと笑し。我を立て推すより、從ふて恐しがりて居る方が結句よかるべし。思ても見たがよい、其色々の方角を拵へぬ先はいつこか東、何處をか西とせん。たとへ方角の名を付た後でも、其東を尋て行くと、終に元の處へ歸るなり。どの方角でも、同じことなり。それゆゑ、東を尋ても東なし、西を尋ても西なし、凡て方角等は、今日人事の爲に入用の道具にて、天地に定りてあるものとは思ふべからず。鬼門の方も尋て行ど、れちつきは、周り周りて又以前の處へ戻るほどに、よくよく觀味して、凡ての名を作らぬ以前へ心を生れかはらして見たまへ。それから此世が十萬億土、十萬億土が又々此世。

梅の下風（八）

白魚女史

前門虎去りて、後門狼來る。傳吉はたゞおそろしさに身も震へんばかりなるを押し包み、如何にもして道をかへむやと思へど、其が旅人は中々にはなさず、旅は道伴れとよく云ひし事わり、伴れだても何となう、心丈夫なりなど云ひつゝ、前に立ちつ、後にもどりつするも樣子をさぐるにやと思へど、傳吉は一入恐れを催しゝが、たとへ道を替へ、伴れをはなれしとて僻者また巧みやせん、たゞ用心堅固に早う泊りをとるにしかずと、それより一筋に歩みをはやめ、やがて野尻につきけれど、何はとも夕ぐれの來らぬほどに宿とらむものとて、一の旅籠屋を見るよりうれしく、伴れならぬつれに向ひ、已は日ねもすありきて、いたく勞れたり、此の處に宿をとらんとぞ思ふ。和君は今少しありきもし給へとて重ねて先頃の禮を伸ぶれど、狼とかくにしうねく、なほつきまとひて、共に宿を取らんと云ふ。傳吉迷惑とは思へど、さあらぬ体さやうならばもろともにとて、宿屋へぞ着きにける。ともすれば餌物をねらふ虎狼、時の間もゆるがせに、すべからずと、席をも立たでありけるが、此の屋の下女にて年のころ十七八、田舍にまれなる女の出で來てはたらくに、ふと心をとゞめて見れど、何となう見覺えあるやうに思へど、思へど、おもふまゝ目のさきに面影うかびて誰なるか分かぬに、女も何となう此方を見ていぶかしげなり。折しも伴なる男の何處へか立ち出でしに、傳吉女に向ひ、其所は何處にてか逢ひたる人のやうなれど、さてその誰なるかはうかばず、されど見れば見るほど覺えあるやうなりと云ふに、女もしばらくうち守りて、そゞろ心に考ふるさまなりしが、暫時ありて、妾もさきより何處にてか、御目にかゝりし御人のごとく思ひ居りたり、もしや御身は傳吉さまとは仰せられずやと尋ぬる言葉に、傳吉手をうちならし、さなり／＼、御身は柏

原宿の森田屋の娘子なりしよ、さて、御身が宿尋ねんとかねておもひしに、あやしき者につけられ、其の隙もなく此處まで來りたりなど語ふほどに、はやその男の足音の聞えけれど、たよりわろしと傳吉口をつぐみ、其まゝそしらぬさまによそほへど、下女もとく心得て、知らぬ客人に物云ふ如く、湯形などすゝめて湯をすゝむれど、傳吉は風の心地すとて伴の者にひとりあびさせ給へとすゝむるに、それは、さて／＼、御氣の毒のこと哉さらばおさきへ、兵平と云ひつゝ湯殿に至りしあと、傳吉はまた話を起し、さても父御は如何にかし給ひしと尋ぬるに、お專は忽ちこらへぬ涙、袖にふりそゝぎつゝ、父は貴方のお泊りありたる其年の暮、遂に朽木の仆れはてはべりぬと言葉もつゞかぬなげき、やう／＼胸をさまりて、後は妾一人のせんすべなさに、家を賣り代なし、此の旅籠屋は、少しのゆかりもありけるまゝたつきのために下女に雇はれ、かく仕へ侍るなり。さりても先頃の御恵みとり分けて下し給ひたる

御品は、富めるもの、千金にもまして忘れぬ御めぐみ、いと有りがたく、彼の櫛をとるたびに、母の俤、御身の恵みの朝な夕なに忍ばれ侍りて、いつも涙にかきくらし侍りぬと云ふに、傳吉も其孝情をくみて共に涙にくれけるが、さてもお專どの御身に願ひたきことと今宵に迫る難儀、力になりて給はれとて、なほ物語らんとするに、お專きゝもあへず、其の御難儀の御やうす、大方察し侍りぬ、されど、あまりに長う語りては中々にさはりともなり申すべし、後によき便りやつくり侍らん、其の折りこそ風呂へゆくさまして亘り給へとあるに傳吉よろこびて禮のぶるほどに、女はたち上りて、彼方へとゆきぬ。傳吉は胴巻にしめたる百五十兩とられまじと固くくゝり、あふのけにまろび、旅のくたびれ休むさまよそほひ臥し居るに、やがて伴の男、湯より上り來れど夕げとて女の膳をもち來るに、傳吉ふとさめたるさまして、少しく休みたる故か風の氣も去りにたるげなり、一湯あみせんかとて起き上りて、縁に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



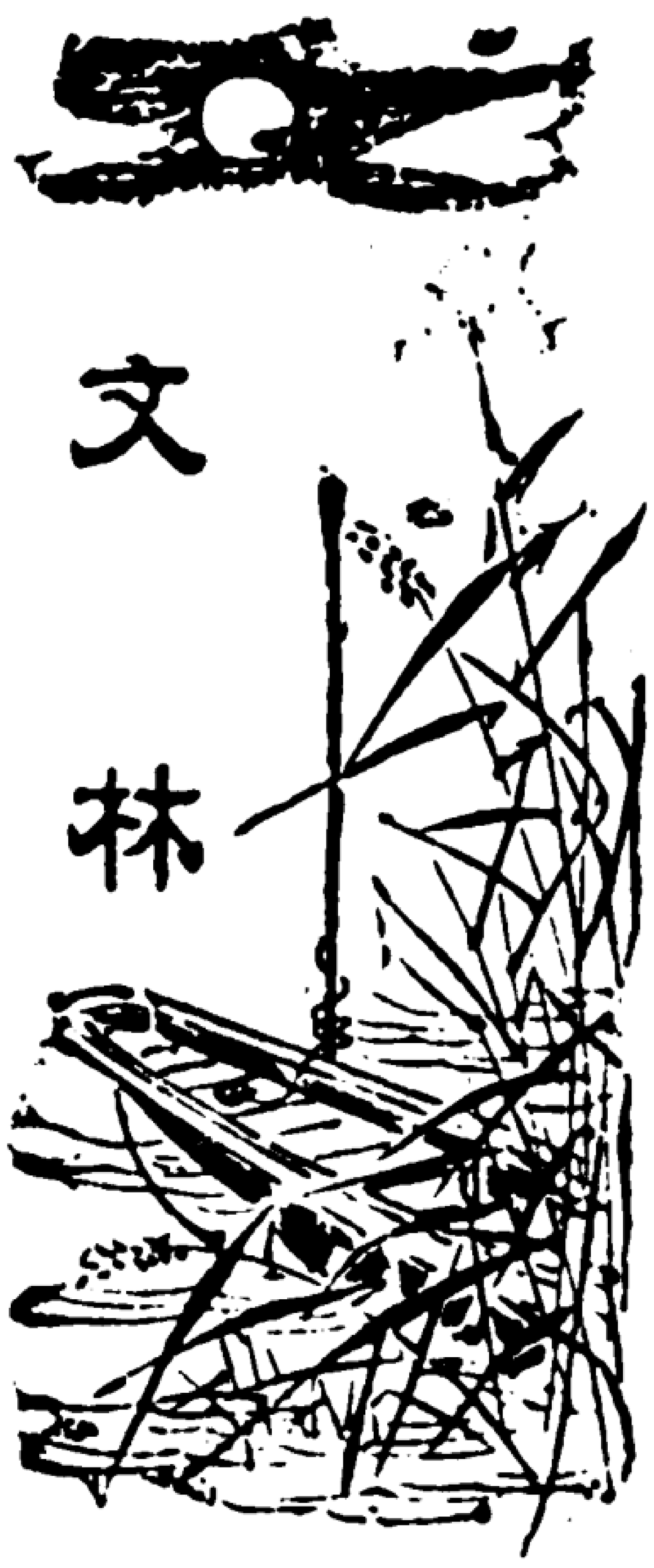
出でけるが、おせんもほどなく出で來り、そつと傍への座しきへ連れゆき、只今貴方の御湯めさんと云はせ給ふまゝ、御荷物番に御膳を出し、かつ、お咄しの中に立せまじき用意に朋輩をたのみ置き侍りぬ。いざ御心しづかに語らせ給へ、前日の御めぐみの報い、身に叶ふばかりの力を盡して御助けになるべしといふに、傳吉はいたく其頓智を感じ、かつよろこびて、實は已れ先きにも云ひし如く、東京出で丶五年ばかり奉公し首尾よくつとめて、百五十兩の大金を得て歸へる路すから輕井澤のほとりより曲者につかれ、今宵に迫まる困難、今宵ばかりを救はれなば明日は此處より五里ばかりの里道容易う歸へりも得べけれど、今宵の難儀救はれなば、終生御恩を忘れ侍らじと語るに、お兼きくよりその難儀をくみとり、さても／＼、さやうにねらはれては、例へ今宵は逃れ給ふとも、明日の道中覺束なく。たゞ妾御預り申し、明日の朝早う其人の知らぬ間に立せ給ふ方然るべしとて母の形見の櫛とり出で妾おあづかり申せし證據として、この櫛をおあづけ申せば、これもたらしておこし給はゞいかな樣でも御わたし申すべし、之は、これ、御存じの如く母の形見千金にもかへられぬ妾が寶、必ず心安う妾に預けさせ給へと信實面にあらはれて見ゑけるに、傳吉もかねて孝女が心を知りたれば固く腹に卷きおきし胴卷とりてこれをうち渡し、櫛に替へつゝ、心殘りげに、よく／＼たのみきこえつゝ已が部屋にかへり、心よく夕げ食べ、さてうち臥し、翌日まだ夜のあけぬほどにそつと起き出で、厠にゆくさましてすかし出で、間道傳ひ、五里ばかりの道をやう／＼忍び歩みて、その日の八つ時ごろ、家へと歸りぬ。叔母も妻も門の外に出で迎へて、恙なく歸りたるをよろこび、早速傳吉が叔父なる當時名主役なる上臺馮司方へ告げやりしに、馮司も來り彼方にもよろこび云へど、傳吉も留守の間の心づけなど謝しつゝ、くるゝまで、彼方此方と人おとしげかりけり、さて人音も靜まりし夕ぐれ、叔母は不思議

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さうに傳吉に向ひ、先刻より尋ねんと存じけるが人の繁さに其まゝ過ぎけるが。五六年も奉公して風呂敷包一つも持ち歸へられぬとは何の云ひ分けが立ぞとおもふと小人はや利に走り、少しくむつとして尋ぬれば、傳吉道中にありし始末をおちもなく物語り、さて、おせんがしるしにおこしたる櫛取り出でゝ叔母女房に見せけるに、叔母ははじめにけしき引きかへ滿面に笑みを催し、さて〱その櫛は百五十兩の形なれば、早く佛前へ供へて、御先祖をはじめ、父上母御が魂魄を悦ばせ給はれかしなど、叔母女房口を揃へ云ふに、誠によきおん心づけさらば未だ金子にはあらねどまづとく供へまつるべしとて、口をそゝぎ手を洗ひ、佛前へ供へてぬかつけば、ありし世の父母が影そゞろに目にうつり來り、もし今の世におはして、かくと見そなはさば如何によろこばせ給ふらんものをとおもへば、つく〲と立つる香の煙りも何となうしめりてぞ見えける。叔母はひとりよろこび、花や早う夕げすゝめよ、傳吉どのは腹すき給ひけんに、心なや早う床をも延べておきね、さぞや旅路のつかれしならんなどいそ〱と己れも其處ら取りつくろふに、母あらばと傳吉はいよ〱むせばれ、へりし腹とみにふくれて、また食事も入らぬばかりなり。さてすゝむるまゝ枕につけど、いよ〱むかしの忍ばれ、悲しうゝち沈みけるが、流石につかれや出でけん、沈みねに寢入りて、又前後の心おきもなくたゞうち臥したり。翌日やう〱十時頃に起き出で、口をそゝぎ、手を洗ひて、まづ佛前に禮拜し、さて昨日供へたる櫛下げんとするに、おきし所にあらず棚のうちかひさぐれど何處にも見えず、妻をかへり見て問へど、共に驚きしさまにてたゞ知らぬといふ。叔母もきゝつけて、顔をしかめ如何はせしことゝ共に索むるのみ、互ひに顔を見合せて、如何せしぞとく思案にくるゝばかりなりけるが、傳吉思案定めて云ふやう、彼の女は幼きより孝心いと深う人にすぐれたり。今形見の櫛なくせし罪はわぶるによしなければ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

計らぬ災難もち行かずとて、金子は必ず渡しくるゝならん、何はともあれ行きて見たやとて、朝げをもそこ／＼にすませ、野尻宿へと急ぎけり。



文林

秋田風　東久世通禧

千町田の稲葉をわたるあきかせの
はげしき音もきかぬとしかな

林中月　鍋島直大

松すぎのしげるはやしはもる月の
ひかり一しほさやけかりけり

窓前虫　津輕承昭

まどのとの荻ふく風もしづまりて
庭さびしくもこほろぎのなく

旅宿鹿　前田利嗣

足ひきの山のふもとにたび寝して
ちかくもしかの聲をきくかな

深夜雁　長谷信成

いはちかき里のきぬたも打やみて
更たるつきにかりぞなくなる

古宅薄　宮地巖夫

住すてゝあれしむかしの宿とへは
すゝきみだれて秋かせぞふく

籬外虫　小出粲

れりたては垣のとにこそ成にけれ
庭にきこゆしすゞむしのこゑ

大磯にてよめる歌のうちに　千葉胤明

潮あむる人はみゆれどふきいるゝ
わさかせさむしこゆるぎの磯

草庵秋　鎌田正夫

更る夜の露にしめりてれぎのはの

れとも えづけきくさのいは哉

晴夜月 大口鯛二

廣にはのまさごにうつる松かげの
くらきは月のあかきなりけり

螢入簾 遠山英一

をすのうちに入りしほたるは燈火を
ふきけつ風やさそひきつらむ

行路霧 内藤存守

人かげは霧にかくれてみえねども
みちのゆくてに聲ぞきこゆる

夕 師岡正胤

れもふ如ひと日の事をなしをへし
ゆふべはいつも嬉しかりけり

樹陰納凉 大畑弘國

すゞしさは月の御舟にあまるかな
まつふく風もなみときこえて

混本歌 名所の螢といふことを 藤井行麿

あまたとぶ宇治のほたるはまきえ地のいかけ見るこそ
川水にかげうつりて羽音きこゆる

辨内侍 佐々豊水

皇國のかしこきひとをかべえには
うつさんといひし心だかしも

夏旅 草野隆道

山をこえ谷をわけつゝゆくたびは
なつをよそなる道もありけり

ある老人のもとへ罐詰の枇杷を贈るとて 足立正枝

四つの緒の名にれふ木の實徒然の
君がなぐさにならむうれしも

川骨 伊藤純三

たへがたき暑のうちにかはほねは
みがくれてのみさきにける哉

國旗 宇井正夫

久かたの天つめぐみの日のみはた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なびく影こそゆたけかりけり

瀧納涼　木庭芳香

瀧つ瀬は秋のかけたるいとならむ
むすぶ袖さへなつなかりけり

端書郵便　伊東祐賢

鞭とりしこまのたよりにまさる哉
このはがきしてよするおとづれ

海邊夏月　安齋篤敬

あま小舟よりくる外にくまもなし
かゝみをみがく夏のよのつき

大畑君をまちて　龜谷行

昨日まち今日まち君を待ちわびぬ
明日もまたれてまち暮すらむ

月下薄　蜂須賀隨子

武藏野のむかしの月のおもかげを
をばなの露にうつしてぞみる

庭秋草　前田朗子

あるが上に今年も植てもゝくさの
花野とにはをなしてけるかな

秋雨　柳原愛子

たゝならぬ雲の氣色と見るか中に
軒ばにしふくあきのむらさめ

秋晴　小池道子

淺みどりはれたる秋のおほぞらに
ふじの根白く見えわたるかな

苔上月　北島以登子

松が枝をはなれて更につゆふかき
こけの上てらすにはの月かげ

庭上月　松平健子

庭の面の萩のした葉におくつゆも
もらさずやどる月のかげかな

浦月　大谷章子

秋の夜のうら風あらくなりぬらし
くまなきつきに波のはなさく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鹿聲何方　佐藤艶子

夢さめし夜半のまくらに聞ゆるは
いづこの野邊のさをしかの聲

くれゆく空に月出たり　鶴久子

夕闇をおぼつかなくもたどるまに
ゆく道みえてつきぞいでたる

深夜虫　小川直子

更ぬるかさとのきぬたは打やみて
いよいよたかし夜半の虫の音

月の歌よみける中に　海上壽子

ものおもふ人まつ身ならねど門さして
ねられむものか月の夜ころは

秋の夜は月にかきなすことの音の
いやさや〳〵にすみわたる哉

月前薄　安東菊子

ゆふ月のほのめくのべの糸すゝき
かへるたもとを引とゞめけり

河夕立　土岐幾子

たへがたきひるのあつさも夕立に
ながれて涼し瀬田のかはづら

相知れる人の避暑のため旅しける途中馬にて某野をすぐるをり大雷雨にあひて骨にとほるばかりぬれたるよしいひおこせけるかへし　内田遊歌子

駒とめてやすらふかげも夏の野を
ぬれつゝゆきし君をしぞ思ふ

六十一賀　高橋みよ子

むさし野の松のみどりに若がへり
うれしき千代にあへる君かな

浦船　清水靜子

朝まだき八重の汐路を漕ぎ出でゝ
くるればかへる蜑のつりふね

夏のはて　清水菊子

鳴く蟬の聲もいつしかうすらぎて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秋こそつぐれにはのあさかせ



雜報

●東宮殿下御誕辰　去し卅一日は、第廿回にわたらせ給ふ御誕辰にて、御避暑地なる沼津の御かりみやにて、御内宴せさせ給へり。かくて、宮内省の高等官等は、賀表を奉れり。

●和歌詠進　八月の御兼題は「賜暇旅行」にて、去し五日、例によりて、詠進し奉られたり。

大磯にはやまの崎にみめぐみの波うちかつきあそふみや人　正風

我君のあつきめくみのつゆにこそたひの衣は涼しかりけれ　豐頴

旅衣おもひたつらしつかさ人いさまある夏になりにける哉　利嗣

はこれ山七湯めくりてあそふこそみよの恵のあまり也けれ　詮

年ことにいさまたまはりたひ衣けふたちいつる袖そ涼しき　通善

ことしなほつかへの暇たまはりて旅路に夏のふしをみる哉　長說

水無月のいさまのたひの衣手に恵のつゆもかゝろすゝしさ　光昭

出湯あるたひのやかたに夏しらてくらすも君か恵なりけり　利悳

おほやけのいさまたまはり司人心やすくもゆくたひちかな　忠敬

賜はりしいさまの旅の涼しさにみよの惠のあつさをそしろ　清

たまはりし暇かしこみたまあへろ友さ出たつ旅そうれしき　美稻

大君のみゆるしをねて宮人も旅にすゝしきひをおくるらん　通治

賜はりしいさまはあつき恵にて旅れのゆめそ涼しかりける　雅之

大君のあつきめくみの暇ねて旅ゆくみこそたのしかりけれ　長言

ことしけき都はなれてたひ衣あそふも君かめくみなりけり　任子

宮人も君かめくみのいさまねて思ひ〳〵にたひれしてけり　文子

司人いさまたまひてうみ山もにきはふころさなりにける哉　祥子

なつひきのいさまを旅の宿にして暑もしらすくらすころ哉　敦子

打つれて夏のいさまにいてたつは同し里よりいてし人かも　道子

此夏もいさまたまはる嬉しさに思はぬたひにたちいてに兇　鉃子

いてあひし友もおなしくみ恵のいさまに遊ふたひさいふ也　いさ子

家にしてくらさんよりも此日數涼しきかたに旅ねしてまし　好子

司人しはしのいさまたまはりて旅する夏はうれしかるらん　いさ越

宮人も夏のいさまをたまはりて先ふるさとに思ひたつらん　三枝

賜はりしいさまのひかす樂しけに友うちつれていつる旅人　愛

御恵によりて旅ればしつれさもゆめに都をみぬよはそなき　嚴夫

なつ休みうたまくらみにゆく旅もつかへの道の一つ也けり　正臣

驛路はにきはひそめぬ昨日今日おほみや人やいさまねつ覧　秋香

みめくみはおなしいさまの旅なれや心〳〵の道にたてさも　粲

行先に友もきあひて嬉しさはいさまたまひし旅れなりけり　嚴雄

いさまねし旅路の空にみめくみをあふくも高しふしの柴山　有義

たまはりしいさまをあたに過さしさ海山かけていてし旅哉　行久

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此夏もいとまたまへり故郷の親のみはかのくさやはらはん　調二

むらきもの心のゆくに任するは夏のいとまのたひち也けり　正夫

みめくみのつゆにぬれつゝ行旅は暑たにこそ覚ねさりけれ　胤明

賜はりしいとまのひかす此夏はおほかた旅にくらしける哉　英一

夏毎に身のいとまをはたまはれと旅は今年そはしめ也ける　久子

●貞婦　山形縣、米澤市、上花澤信濃町に住める中島忠保が母、ふみ女といへるは、夫宮藏病にかゝりてより、婦ながら家計を治めながら舅姑をなぐさめ、病夫を看護し、幼兒をはぐゝみ、一家五口をさゝへけり。さるを、去し廿八年中、夫遂にみうせ、舅もまたつゞきて、なき數に入りしより、家いよ〳〵まづしくなり、ほど〳〵支ふべくもあらぬを、益々はげみて、怠らず、老姑を奉養し、幼兒を就學せしめなどしつゝ、辛くも今日を送り、操をかへぬこと、十餘年の久しきにも、たゞ一日の如し。事、縣知事に聞えてこのほど、金貳圓五拾錢をたまはりて、褒賞せられたり。

山形縣羽前國米澤市上花澤信濃町

中島忠保母　ふみ

資性篤實にして孝貞明治二十八年夫病没し舅亦尋て病死し貧困一家將に離散せんとするに際し勤勉克く一家を支持し老姑を奉養し幼兒を就學せしめ操行を渝へざること爰に十余年洵に奇特とす仍て其賞として金貳圓五拾錢下賜候事

明治三十一年八月十九日

山形縣知事正五位勳四等　曾根靜夫

●又　福井縣、福井市に住める西川のぶ女といへるは、今年廿六歳になれるが、もと父祖は、福井の藩士にして、百五十石の祿を得たりしを、今は、ほろびて、富めりとにもあらず。さるを夫病に臥してより、見る目もいたきばかり、ほねみを碎きて、みとりに怠らざりしかば、人皆感ぜざるはなしといふ。

●孝子　夫の病めるに、妻たるものゝ、身を碎きても、看護を怠らず、又、親の病めるに、子たるものゝ、己れを忘れて、平癒を祈るは、これもと常の道にして、妻たり子たる者、自、高名と思ふべきにあらず。しかれども、世には、この常の道をだに、ふみ迷ふがあれ

を、ことにとり出て、道のしをりとするなり、羽前の國、米澤市の人、士族太田經倫といへるは、養母、身體不隨症にかゝりて、たちゐもまゝならぬを、貧しきなかにも、看護れつるくまなく、妻もまた、からだよわくて、生業を助くることかなはねど、家計いよ〳〵からかれども、心をはげまして、細くも、烟を絶たず十年の久しきが間、かはらぬこと一日の如きに、金員をたまひて、縣知事この孝養の行を賞せり。

山形縣士族
太田經倫

資性篤實孝養の志厚く養母病みて身體不隨の症に陷るや看護周到日夜懈らず妻虚弱動もすれば病む其他幼子女のみにして生計益困難なるに際し鋭意辛勤克く一家を支持し十年の久き志行一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金貳圓五拾錢下賜候事

明治三十一年八月十九日

山形縣知事正五位勳四等　曾根靜夫

●又　尾州、海東郡、草場村の人、服部仙吉が次男に、新助とて、今年十八歳になれるがあり。孝心深くして、親を思ふ心深く、家いと貧しかれど、自、染物を業とする家に、奉公して、その得たる賃金をぞ、半を親の許に贈り、半は、貯蓄して、一錢だにも、わが身につけず、徒には費すことなし。このごろ郷の人々、之を感じて、金員若干を醵集して、これに贈れりとぞ。おほかた、年ころにもなれれど、わが身ひとりにて、生ひたちたるかほに親をもかへりみず、甚しきは親のものをも費して、なげきを見するものも、あるが中に、いと感ずべし。

●又　美作の國に某といへるがあり。今年十三歳になれるが、家貧しく、母の病めるを、看護して、ねもごろなるを、大人も及ばぬかりなるに、事、縣知事に聞えて、褒賞狀をたまはれり。山陽新報また、之をあはれみて、義損金若干を募りて、之におくれりといふ。

●島田博士逝く　文科大學教授學士會院會員正四位勳三等文學博士島田重禮氏は、去し八月廿七日病み

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、身うせられたり。博士、もと漢籍にいたり深くして、當代の名儒たりしが、いますでになし。惜哉。

●私立女子大學校 を大阪に設立せんとて、もと梅花女學校(キリスト教主義)長たりし成瀬仁藏氏は、今なは、心を碎きて、計畫すなり。このごろ「上畧、抑、また、一種の風潮か、願くは、着實なる婦女を育成して、前者の覆轍をふまざれ」と、福井縣教育雜誌すら、なは、之をいへり。

●東京遊學々費 の標準ともすべきものなりとて、東京學資保管會社にて、調査せりといふをきくに、實に左の如し。旨と家政に當るべき婦人女子としては心をとめて、見るべきものなり。子弟の請にまかせて、餘に支出するは、かへりてよろしからず。

●大學々生 (等差は資力の階級なり)

	月謝	食料	小遣	書物代	總計
一等	二圓五十錢	七圓	四圓	一圓	十四圓五十錢
二等	二圓五十錢	六圓	三圓	一圓	十二圓五十錢
三等	二圓五十錢	五圓	二圓	一圓	十圓五十錢

(高等學校は大學と大差なし)

●尋常中學校

	月謝	食料	小遣	書物代	總計
一等	一圓五十錢	七圓	三圓六十錢	一圓	十三圓十錢
二等	一圓五十錢	六圓	二圓十錢	一圓	十圓六十錢
三等	一圓五十錢	五圓	一圓六十錢	一圓	九圓十錢

●一ヶ年計算

	一等	二等	三等
尋常中學	七八六、円	六三六、円	五四六、円
高等學校	四八九、六	三九九、六	三四五、六
大學	五二二、	四五〇、	三七八、
計	一〇七九六、六	一四八五、六	一二七九、六

●美擧 東京、下谷區、坂本町、四丁目なる私立渡邊小學校は、今年四月廿日の大火に類燒してより、一時假校舍にて、教授したりしが、資本乏しくして、再築しがたきを以て、校主渡邊六郎氏は、斷然、意を廢校に決し、生徒の父兄、三百有餘名を會して、このやむなきよしを語りて、廢校を告げしに、父兄等、年ごろ、渡邊氏がこの事業に、熱心なりしを知れるを以て、淺からず之を遺憾に思ひ、遂に、互に醵金して、之が再築の費に充てんことに一決し、ほどなく工事に着手したりしが、このほど、漸、落成せりといふ。生徒の父兄等の美擧は、いふも更なり、校主もまたいと名譽

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふべし。

●名擧　京都市、豐園幼稚園の保姆、堀ひろ子といへるは、去し明治廿三年一月、こゝに就職せしより、たゆみなく、撫育の任を盡せるを以て、兒童の敬慕と、父兄の信任と二ながら全かりしを、先頃、聚樂尋常小學校教員に轉任すべき命を受けしかば、そこの人々、惜別の情にたへず、紀念として、豐園教育會長なる柰野爲吉氏より帶地を添へて、感謝狀を贈れりといふ。

●をかしき算法　これは、獨逸國、伯林に、留學せる小西信八氏が寄せたるなりとて、教育時論に載せたり。をかしければ、そのまゝをとりつ。

ヒトノ　トシヲ　アテル　サンジユツ

セイヨウニテ　ヒトノ　トシヲ　タヅヌルハ　シツレイト　モウシマスガ　ソコニ
マタオモシロキ　タヅネカタモ　アルモノデス、
ワタクシハ　アナタノ　オトシヲ　アテテ　ミマシヨウカ、　ヨロシウ　ゴザリマス、アタリマスモノカ、
アテテ　ヨロシウゴザリマスカ、
ヨロシウゴザリマストモ、
キツトデスカ、アタリタラバ　ナニヲ　クダサレマスカ、
ナニデモ　オノゾミノ　モノヲ　アゲマス、
ソレナラバ　アナタノ　カラダヲ　クダサレマスカ、
アゲマストモ　モシ　アタラナイ　トキハ　ドウナサイマスカ、
ソノ　トキハ　アナタノ　オフセノ　トホリニ　イタシマス、
ヨシヨシ　ソレハ　オモシロイ　カケト　イフモノダ、ワタクシハ　シバイヲ　オゴリテ　モラヒタイトゾンジマス　ヨロシウゴザリマスカ、
ヨロシウゴザリーストモ　シバ井ジラ井ハ　アナタノ　カラダニ　ソラブレバ　ナンデモ　アリマセヌ、
サー　アテテ　ゴランナサイ、ソレヨリモ　シバ井ヲサキニ　オゴリナサレタ　ホウガ　キガ　キイテヲリマセヌカ
ドウ　イタシマシテ　アナタコソ　カラダヲ　サキニ　クダサレタ　ホウガ　キノキイタ　カタト　ヅンジマス
イヤイヤ　ソンナ　コトガ　アリマスモノカ、ソンナラバ　アテテ　ゴランナサイ、
ヨロシウゴザリマス　アテマストモ、アテマストモ
マー　アナタノ　ウマレタ　ツキニ　二ヲ　カケテンダサイ
カケマシタ　（四グワツ　ウマレト　カリサ

ダム）（トヒヲニシラサステ　オホエテナルベシ）　4× 2 = 8
ソレニ　五ヲ　クハヘテ　クダサイ
クハヘマシタ　8+ 5 = 13
ソレニ　五〇ヲ　カケテ　クダサイ
カケマシタ　13× 50 = 650
ソレニ　アナタノ　トシヲ　クハヘテ　クダサイ
クハヘマシタ　（十六サイト　カリサダム）　650+16 =666
ソレカラ　三六五ヲ　ヒイテクダサイ
ヒキマシタ　666 —365 =301
ソレニ　一一五ヲ　クハヘテ　クダサイ
クハヘマシタ　301 + 115 = 416
ナニト　ナリマシタカ
四一六ト　ナリマシタ
ソレデハ　アナタハ　四グワツ　ウマレナサレテ
一六サイデ　アリマシヨウ
ハー　ハー　コレハ　ミヨウデスナ
アタリマシタデシヨウ
イエ　イエ
ソレナラバ　ナニガ　ミヨウデシタカ
アタラヌ　トコロガサ
ウソ　オツシヤリマスナ
ナニヲ　カクシマシヨウ

アタリマシタカラハ　アナタハ　ワタクシノ　モノダ
シカシ　イノチヲ　アゲルトハモウシマセヌデシタ
シカシ　ナニデモ　アゲルト　オツシヤリマシタ
シカシ　アナタハ　カラダヲ　クレト　オツシヤリマシタ
サヨウデシタ　アナタハ　ソノ　トキ　イノチト　カラダト　ベツニ　オカンガヘナサレマシタカ
サヨウデシタ
ソレナラバ　ドウシテ　ワケテ　クダサル　オボシメシデシタカ
オホカタ　ワタクシガ　シンダ　ノチニ　カイボウデモ　ナサルノカト　ゾンジマシタ
ソレハ　アンマリ　ワタクシヲ　バカニ　ナサレタトイフモノデス
ソンナ　コトガ　アリマスモノカ
ソレデモ　アナタハ　ウソヲ
ウソヲ　モウシマセヌ　カラダハ　アゲマシヨウガ
イノチハ　オヤクソクニ　ナイ
ソレダカラ　ワタクシヲ　バカニ　ナサルト　イフノダ
ケツシテ　アナタヲ　バカニ　イタスノデハ　アリマセヌ
オヤクソクヲ　マモリテ　ヲリマス　シカシ　アマ

リヨク　アタリマシタガ　ダレノデモ　アタリマスカ
アタリマストモ
ソレナラバ　ワタクシノ　ギバノヲ　アテテ　ゴラ
ンナサレマスカ　モシ　ソレガ　アタリマシタラバ
イノチヲモ　ツケテ　アケマシヨウ
ヨロシウゴザリマストモ　サー　オギバサンノ　ウ
マレツキニ　二ヲカケテ
カケマシタ（八グワツト　カリサダム）　$8\times2=16$
ソレニ　五ヲ　クハヘテ
クハヘマシタ　$16+5=21$
ソレニ　五〇ヲ　カケテ
カケマシタ　$21\times50=1050$
ソレニ　オギギサンノ　トシヲ　クハヘテ（百トカ
リサダム）
クハヘマシタ　$1050+100=1150$
ソレカラ　三六五ヲ　ヒイテ
ヒキマシタ　$1150-365=785$
ソレニ　一一五ヲ　クハヘテ
クハヘマシタ　$785+115=900$
ナニト　ナリマシタカ
九〇〇ト　ナリマシタ
ハー　ハー
アテテ　ゴランナサイ　ワカリマスカ
ハー　ハー

ワタクシノ　ギギハ　九グワツニウマレタ　マダ
トシヲ　トラナカツタノデスカ
マタ　ワタクシヲ　バカニ　ナサレマス　ハー　ハー
ムー　ムー　ソレ　ゴランナサイ　アタラナイコト
シカシ　イマ　マデ　タレモ　ヨクアタリマシタガ　ア
ナタノ　オギギサンノハ　ドウ　イフ　ワケカ　シ
ラン
モウシマシヨウカ
ウケタマワリマシヨウ
八グワツ　ウマレデ　一〇〇サイデスガナ
ハー　ハー　ワカリマシタ　ジンセイ　五〇トモ
ウシマス　アナタノ　オギギサンノトシデハ　ヒトノ
トシデハ　アリマセヌ　シカシ　ワタクシハ　ヒトリ
デ　イマ　ヒトツ　ヤリテ　ミマシヨウ　一〇〇デハ
アタラヌ　九九ハ　イカガ　カ　九九　サイノ　ヒト
アリテ　九グワツ　ウマレ　ト　シテ　ミマシヨウ
$(9\times2+5)\times50+99-365+115=999)$
ハー　ハー　一〇〇ノ　ウチ　九九マデ　アタルト
ハ　コノコトダ
シカシ　一〇〇ヨリ　ウヘノ　トキハ　ドウ　ナル
カ　イマ　ヒトツ　ヤリテ　ミマシヨウ　コンドハ
十二グワツ　ウマレデ　一一一ノ　ヒト　アリト　シテ

(12×2+5)×50+111−365+115=1311

ハー　ハー　一〇〇ヨリ　ウヘノ　トキハ　三ケタ
メノ　カズノ　ウチ　一ヲヒキテウマレツキト　ナシ
ソノ　トシハ　一ノ　ケタト　十ノ　ケタトノ　カ
ヅニ　一〇〇ヲクハヘテ　イヒテ　ヨロシイカ　シレ
ソ　イマ　ヒトツ　ヤリテ　ミテコンドハ　十グワツ
ウマレノ　二四〇サイノ　ヒトトシテ

(10×2+5)×50+240−365+115=1240

ハー　ハー　ソーダ　ソーダ　一〇〇ヨリ　ウヘノ
トキハ　三ケタメノ　カズヨリ　一ヲ　ヒキ　ウマレ
ツキト　ナシ　一ノ　ケタト　十ノ　ケタトノ　カズ
ヲバ　ソノママニ　サラニ　一〇〇ノ　ケタニ　一ヲ
オキテ　ソノ　トシト　ナスト　オナジツ　二〇〇ヨ
リ　ウヘノ　トキハ　一〇〇ノ　ケタノ　カズヨリ
二ヲ　ヒキ　ウマレツキト　ナシ　十ノ　ケタト　一
ノケタノ　カズハ　ソノ　ママニ　オキテ　一〇〇ノ
ケタニ　二ヲ　オキテ　ソノ　トシト　ナシテ　ヨロ
シ　アー　アナタノ　カラダヲ　モラヒツコネタ　ケ
レドモ　オモシロキ　ハツメイヲ　イタシマシタ　ア
ナタノ　カケガ　アナタノ　オカゲト　ナリマシタ
ハー　ハー　ソンナ　ヨイ　ハツメイガ　デキマシタ
ナラバ　ワタクシノ　カラダモ　イノチモ　アナタニ
オアゲ　モウシマショウ

コノ　サンジユツハ　アメリカニテ　モトメタ
CONKLIN'S VEST POCKET ARGUMENT SETTLER
トモウシ　クワイチユウヒツケイトデモ　モウス　ヨウノ　チイサキ　ホンノ　ナカニ　アリタルヲ　タネト　シテ　アトサキノ　モンドウヲ　ツケクハヘタルガ　アマリ　ヲカシクハ　ソコヲ　ハブキ　トモカクモ　フシギノ　カズノ　アル　コトダケヲ　アゲテコドモノ　ナグサミニ　ソナヘタマヘ　ソレモ　スデニ　ワガ　クニニ　ツタハリタラバ　カミクヅカゴノソコニ　ナゲタマヘ　ウラミハ　イタシマセヌ

●耳新しき事ども　なり。ロシアにては、牛の眼病をわづらはざらんが爲に、眼鏡を用ゐしめ、イギリスの倫敦にては、狗をして、靴を穿たしむといふ。又、熱帯地方には、笑樹ありて、粉末として、人之を用ゐれむ、善く笑ふとぞ。

●異風　もあるもの哉、緬甸の國の婦人女子は、自由に、勤勉に、また活潑なるに、ひきちがへて、男子は、れはかた、怠惰にして、事を勉めずときく。これ、恐

らくは、所謂、女權の盛なるより起れるならん。はた他による所ありや、如何に、

●厭ふべし　異國、赤髯、緑眼のもの、人を人とも思はず、わけて、我が國婦人を弄びて、はぢを見せしむること、今に始めぬことながら、このごろ、屢きくは、いきどほろしきことなり。如何なれど、彼等は、かくまで、心の下ざまにかたむけるか。願くは、「我が純正をかゞやかして、彼等の眼をくるめかしめ、暗き境より、引き出でゝ、明けき道をふませまほしきことなり。さきには、野州日光に、裸踊をせしめ、上州にて、裸婦人の寫眞をうつしたりしは、人皆すでに知れり。このごろまた、新潟にて、一人の赤髯、四人の藝妓をして、强ひて、共に入浴せしめて戯れつといふ。更にきくに、箱根小涌谷の温泉場にて、一人の英人、醜きさましして、我が婦人にたはむれしとぞ。一筋に、他をのみ責むべきには、あらざめれども、耳いたきうはさなりや。

●戒むべし　こも又、さきのに劣らぬ聞えなり。金の光に眩めく眼病は、癒すにいとゞ難かりけり。陽には、戰勝國とてほこるとも、陰に、醜汚の行をほしいまゝにせば、何を以てか、國光をかゞやかさん。諺に、千丈の堤も螻蟻の一穴より潰ゆともいへり。いさゝかの事なりとて、見すぐすべきにあらず。さきに、下億兆に至るまで、幾多の辛惨と、人命とをもて、國威をかゞやかしつるを、たゞ我が目前、一身の利にのみ、眼くれて、身をけがし、家をはづかしめ、果ては、遂に國の体面をもきずつくるに至りては、これ不孝不忠、亂臣、賊子たるを免れず。深く相いましむべきなり。近きころ、神戸なる居留地の幾番館にやありけむ、こは今、思ひ出づべし。來ん明治三十三年に、佛國、パリーにて、開會すべき萬國博覧會をまちて、日本の藝妓數十名を出品して、彼の美貌の聞えある佛國婦人をして、顔色なからしめんとて、既に、神戸市のさる筋に、かはよきもの八十名を擇り出づべきよしを、願みれて

せたるに、そこにても、是非のわかちもなく、うけひきて、とく、かれこれと、顔ねりに、手を下せりときく。嗚呼、彼の兵士を見ずや、親にわかれ、妻子をれきても、身をすて、命をさゝげて、大君の御爲に盡し、はた國光をもかゞやかさんとするにあらずや。およそ、日本神州にうまれたる者、男女をいはず、誰かは、この心なからん。さるを、おのれひとり、利を得たりとも、國の体面を、けがして何かはせん。藝妓なりとて、理を解せでやはあるべき。抑、世に之をいやしとするは、藝の一向賤しきにあらず、女として、操たゞしからず、素行修らぬが多ければなり。忠孝仁義をわきまへてこそ、日本の臣子なれ。いましめて、ふみあやまつこと勿れ。はぢを萬國にさらすこと勿れ。

●つゝしむべし。　さきにも、女教員にして、男裝せしものありしを、いましめき。今又、美濃國、安八郡、名森村の小學校の裁縫科准教員某といへるは、常に、小倉織の男帶をれべりときく。女には、女の風あり。まして、教員をや。

●老人のなげき　さもあるべし。彼の九州なる鹿兒島にては、婦人の風、漸、華奢に流れ、衣服をはれやかにし、はかなきすさびをするが多きを、年老いたる人々は、こをうれたみて、質朴なりし手風の、うきたるさまになりゆくがかなしとて、なげきをすといふ。

●衛生法　の一二、さるものに見えたるが、當季の參考ともなるべけれど、とりて、こゝにのせつ。

○食物　青物の中にて胡瓜は血液を清め、身躰の組織を淸涼にし、渇きを止め、胸の蒸燒を除き、小便を利す。芹は僂痲質斯、及び神經病の藥なり。韮、蒜、葱の養はいづれも根氣の効あり、垂液胃液を增し、筋骨を丈夫ならしむ。全體肉類は血液を鬱滯せしむる傾きある者なれど、牛肉に必らず葱を副食する如き大いに衛生法に適するなり。韮、蒜は寢汗に効能あり。小兒等が鼻より出血するに、韮、蒜を揉みて挿入せば血止の用をなす。蒜は邪氣を攘ふの効あり。不眠を憂ふる時蒜の臭氣を嗅は大抵安眠を得べし。球葱は利尿劑なり。葱雜炊は消化器の衰弱に効あり。菖蒲湯、及び干菜湯は善く發汗せしめ、血液の鬱滯を治す、所謂殘暑拂なり。大根卸は消化を助く、又酒

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毒及び魚類の中毒を和らくるの効あり。大根卸を水飴に和して用ふる時は咳嗽及び安息の藥となる。胡蘿蔔は逆上を下げ、腸胃を利す。蕪青の卸汁は癨の藥なり。西洋茄子は肝臓の藥なり。甘菜及び慈姑が腎藥なりとは我國にて古より稱する處なり。萵苣は血液の循環を促かすの効あり。胡麻は根氣の藥りと云ふ。老後胡麻を食すれど中風起らすとの諺言あり。口中のやける時生胡麻一匁を煎じて之を含み度々嗽する時は口熱を去り得べしとなり。

○睡眠　人の眠れる間は、心臓の働大に緩み、謂は丶、多少休憩する道理にて、一分時間の搏動は、直立の位置にあるときと比較すれど、十搏丈け減少するが常なり。即ち、起立して、七十五脉を搏つ人なれど、熟睡の間六十五搏となる割合なり。此十搏に、六十分を乘すれど、六百搏となる。故に、通例睡眠時間を八時間とすれど、日中働作せる時よりも、心臓働力の少なきこと、殆んど、五千回なり。さて心臓一回の搏動毎に、六「オンス」の血液を血管内に輸出するものなれど、八時間、眠れる間は、醒覺時よりも、血液循環の減少すること三萬「オンス」の多きに至る。即ち、此血液、斯の如く徐々に靜脉管を通過するが故に、通常血液循環の爲めに、遍ねく給せらるべき温度の不足は、體外の被服、即ち、夜着蒲團等にて之を補はざるを得ざるなり。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題……………………

住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

……、……、……。……、……、……。……、……、……。……、……、……。……、……、……。

住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて詳明に記し、句讀點を施すべし。



教の庭

九月五日兼題　海邊月

天

うちよする浪のみがける玉ならん
　いて見のはまの月のさやけさ　阿波國徳島市徳島町　稲田かね子

地

うき霧はいそやま風にはれゆきて
　うなゐらてらす月のさやけさ　栃木縣足利郡足利町九十一番地　青木たま子

人

和田の原よせくる波にあらはれて
　いよいよきよき月のかげかな　東京市日本橋區濱町一ノ二十四　諸井久良子

秀逸（二十首）

にはもよしつきかけきよし青海原
　此夜ゐりはあけすもあらなむ　東京　大塚廣子

しほかまの浦ふく風もさやかにて
　すみこそわたれあきのよの月　東京　品川虎子

はしたての松のあき風おとふけて
　月すみわたるよさのうなはら　東京　神田きん子

ふく風もいそやままつに音たてゝ
　すみこそまされあきの夜の月　東京　伊藤榮子

打よする波のうねうねきらめきて
　野さかの浦のつきのさやけさ　肥後　佐々小琴子

磯山のまつのあらしのたとたゐて
　なみまにうかぶ月のさやけさ　羽後　最上志け子

なかなかに障れる松もおもしろし
　舞子のはまのあきの夜のつき　備前　西艶子

打つゞくをちの浦わも見ゆるまて
　さやかにてらすわきの夜の月　甲斐　名取よ志子

はるかなるおきの漁火志らむまて
　さゐこそまされあきの夜の月　甲斐　名取正代子

藻汐やく苦屋のけふりすゑはれて
　月のみふねはすみわたりけり　甲斐　坂田きみ子

白波のよするなきさに世のさまを
　うかべて見する秋のよのつき　肥前　長澤いゑ子

いさりするあまのを舟の數見ゐて
　すみこそわたれあきの夜の月　肥後　仁保しま子

さやけさを何にたとへん波よする
　磯へのまつにかゝるつきかけ　伊豫　仲田榮子

もしはくむあまの憐をとはむとや
　なみよる岸をてらすつきかけ　伊豫　美濃君子

藻汐たく海士か苫屋のいふせさも
清らにてらすつきのかげかな　豊後　鵜濃喜代子

見渡せはれきのしま山きりはれて
なみの上きよしあきの夜の月　信濃　高砂菊代子

わくらはにとふ人もなきすまの浦
月は夜ことにすみまさりけり　肥後　小森田輝子

沖とほくいつる小舟も消ゆるなり
くまなきあきの月のひかりに　安藝　香川　頴子

漁火のひかりは消てなみのうへに
ひとりさひしきあきのよの月　尾張　淺井　靜子

しほかまの浦のけふりの末きえて
あらしにすめる月のかけかな　三河　永井さい子

(以下原稿到着順)

荒いそのふみまにやとるつきかけの
あやしきまてにみゆるうなはら　石井豊子

さゝらがたにしきの浦なきて見れは
くもらぬ月の名にこそありけれ　野口信子

秋ふかきすまのうらわのつきみれは
うらやましきはあまのつりふね　濱口眞子

海はらやつきのみふれはいそつたひ
まつかけきよくすみわたりけり　仁保基子

きよみがたさわたる舟のかすみねて
なみしづかにもすめるつきかな　横山柳子

海すみのかりのたまづさよむはかり
うみぢさやけきなみの上のつき　大村若子

あはぢしまふけゆく月にあきのよは
いさゝこゝろもすまのうらなみ　横山秀子

まつしまやをしまが崎にさし出つる
つきのみふれもさやけかりけり　横山峯子

うら波にしほくむあまのなれころも
なれてもあかぬあきのよのつき　中島榮子

しまやまの松のかげよりもれいつる
つきはなみまにくだけてそちる　楠まさ子

明石かたなみまにうかふあきの夜の
つきのかけこそさやけかりけれ　松原賢子

さやかなる月のひかりにまつうらの
あまがしほやのかげも見ねけり　木村錦子

しまやまのまつをはなるゝ月かけに
すみこそまされあきの夜のそら　長島たか子

おほいそのうらふく風につきかけの
さやけき夜半はすみよかりけり　小川金子

たけしはの浦和さやけきあきの夜に
なみの上さほくすめるつきかけ　小川富子

波の上にこがれちりしくつきかけな
みるもうれしきうみはたのやさ　吉川喜與子

あくるまで舟にながめんはこざきの
まつの木の間にかゝるつきかけ　山中清子

秋の夜はあまもつきにやうかれけむ
あかつきかけてさけくみかはす　大島愛子

田子の浦にこきゆく舟のかすまして
さやかにうつるあきの夜のつき　高橋玉子

いそやまの松をうつしてあきの夜は
つきにはねあるなみのうへかな　大森純子

田子の浦三保のまつかせさよふけて　淵島[illegible]子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なみまにてらすあきの夜のつき

なかく\に空に見るよりさやけきは
つきすみわたるしほがまのうら　神田鐘子

たけしばのうらもさやけき秋の夜半
くまなくてらすつきのかけかな　木村金子

まつかせのあらしのすゑに霧はれて
つきすみわたるなみのさやけさ　水島清子

あくるまで見るもあかめや明石がた
まつのはこしのあきの夜のつき　西村芳子

こよろぎのいそのまつはら秋ふけて
つきのかけこそさやけかりけれ　岡田紗子

すまの浦なみまわけつゝ出つる月は
すみこそまされこゝちよきまで　西村京子

見るまゝにこゝろもいさゝ爽けくて
つきすみわたるしほがまのうら　遠藤千勢子

波の上にさやけきつきのかけみせて
すみそわたれるあきの夜半かな　近藤達子

すみよしの浦にたゝよふさゝなみに
ゆられて見ゆるあきの夜のつき　根岸杉子

よもすがらこぎゆく舟のかずみねて
さやかにうつるあきのよのつき　小川すみ子

たゝよへる波にうつりてもちつきの
ひかりみちたるたけしはくうら　遠藤ちか子

はてもなき青うなはらにふなてして
さやけきあきのつきをみしかな　水島朋子

うちわたす秋のうなはらいさきよく
つきすみにけりたけしはの浦　長澤綾子

やゝまかたなみかせたゝぬ秋の夜半
むかしゝのへさつきやさしくる　高橋琢子

田子の浦にうち出て見れはこぐ舟の
かけもおほろにてらすつきかな　中島鳳子

うちよせてくたくる玉さみゆるかな
みしまのうみのあきの夜のつき　浦島松子

和田のはら浪さはかなくきぬゆくは
つきみるよはのこゝろなりけり　松岡初子

すみよしの浦のまつかせさよふけて
つきすみわたるあはちしまやま　千葉里子

しかすがにつきかけきよき秋の夜は
しほくむあまもすみよしのうら　木村和歌子

夕まくれねくらにかへるしまちどり
かけ見ゆるまてすめるつきかな　横山初子

たけしはの浪間になきるうろくづの
かけさへ見ねてすめるつきかな　木村高子

きの國の和歌のうらかぜおさたねて
さやかにてらすあきのよのつき　近藤秀子

しほかぜに霧もいつしかはれそめて
つきみるあきそうれしかりける　西村虎子

もしほやくけふりも絶ねて明石がた
つきすみのほるあきのよはかな　松原銀子

和歌の浦の松のかすまてよまれけり
ひかりさやけきあきのよのつき　町田定子

てりわたる月のひかりのさやけさに
こぎゆくふねのかずもよまるゝ　遠藤錦子

きりはれてつきかけ清きすまのうら
なみはこゝれなたゞよはゞけり　神田鈴子

類ふへきものこそなけれ和田の海の
まつにかゝれるあきの夜のつき　大島綠子

たちつゞくなみきの松の木の間より　晋山恵子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つきかけもりててらすうなはら

なちこちのあまかさまやに秋のよは
うれしきまてにてらすつきかけ
澤田龜子

おきへよりかへるをふれの數見ねて
うなはらさほくすめるつきかけ
濱口惠美子

すみよしのまつのこすゑを今見れは
ひかりさやけくつきいてにけり
川田增子

みほのうら松のはこしのつきかけは
はなももみちもいかておよはん
大森あさ子

さやかなる月にや明かすあかしかた
つりするあまもよるをわすれて
島田てる子

はりまかたみわたす空はくもはれて
なみまさやかにてらすつきかけ
小川春子

たまくしけふたみか浦にあきの夜は
つきおもしろくなかめあかしつ
小川しづ子

うら波のよるもしつけきにほの海に
こゝろもすめりあきの夜のつき
町田花子

あかしかたほの〳〵見ゆる夕きりの
はれてなみまにいつるつきかけ
花岡香子

澄みわたるすまの浦邊のつきかけは
なみにくたけてたまさちるかな
神谷增子

よもすからいそのさまやに聲するは
月にうかるゝあまにやあるらん
長島鈴子

しはうらのなみまに跳るうろくつは
さやけきつきのかけにうかれて
小川綾子

和歌の浦に日はやさりてみつしほに
こさのはくるのたまもよせくる
小川まさ子

うききりはいつしかはれて明石かた
なみまさやかにすめるつきかけ
三田都子

たちこめし夕きりはれてあかしかた
なみまにみゆるあきのよのつき
赤坂久子

こきめくるをふれもみなて玉くしけ
ふたみかうらのつきそさやけき
後藤光子

あまのすむさまやに月のすめる夜は
よするなみさへおさせさりけり
濱口清子

ゆふなみのあらひてきよき眞砂路を
くまなくてらすつきのさやけさ
濱田鶴子

見渡せはかきりもあらぬわたつみの
なみちをてらすあきのよのつき
水野君子

たかさこの松のひまより見ゆるかな
すまのうらわのあきのよのつき
曾山芳子

あきかせに浦のゆふきりはらはせて
なみまにきよくすめるつきかけ
住山護子

月かけはあをうなはらにすむはかり
なみのまに〳〵うつろひにけり
安井卒子

波かせのおともしつけくをさまりて
うつらふつきのかけのさやけさ
山内かず子

むらさめのはれてさやかに見ゆる哉
なみまにうかふあきのよのつき
中村こう子

浦つたひこよひはあきのつきすみて
みきははふゆのこほりをそしく
鹿瀬島嘉子

あら濱になれしはままつさやかにも
ひさきはすめるあきのよのつき
江口華子

しまつ鳥うさのはまへのつきみれは
うらかなしくもなきにけるかな
佐々有鄰子

伊勢うみ千ひろのはまのさきのかせ
すゝしくのほるあきのよのつき
佐藤玄子

みわたせはさほき島根もみゆるなり
寺尾まさ子

いそのまつはらつききよくして

見渡せはおきのしらなみおとすみて
つきかけきよしたけしはのうら　谷口なほ子

いてゝこしいそ山まつのほかにまた
くまもなみまのつきをみるかな　森やす子

をちこちにこきゆくあまの舟さへも
さやかにみゆるあきの夜のつき　稲原藍子

海はらのなみおしわけて出てし月の
まつの木すゑにかゝるさやけさ　所さい子

貝ひらふあまさへもなきいその邊に
ひとりすみぬるあきのよのつき　田代艶子

あまかたく沖のいさり火かけきえて
うなはらてらすつきのさやけさ　田代綾子

もろこしのそらまて晴れて筑紫かた
くまなきつきのひかりをそ見る　吉田きさ子

海人の子のしほくむをけに一つつゝ
やとるを見れはもちつきのかけ　久米貞子

袖のうらつゝむにあまるなかめかな
なみまくまなきもちつきのかけ　竹村竹里子

見るか中にたゝよふもはあと絶えて
なみのほしろくつき出てにけり　安孫子かづ子

こゝろある人に見せはやみつうみの
なみにゆらるゝつきのかけをは　中村好子

水やそらそらやみつともしらなみの
すまのうらへにつきそ出てける　林箏子

天のはらくもりなきよのつきかけは
はまのまさこのゆきと見ゆなり　林瑟子

出つるより入るまて見れとあかぬ哉
八十しまてらすあきの夜のつき　齋藤せん子

さやかなる月のひかりもうつるかな
かゝみかうらのなみのまに〳〵　白石藤子

須磨の浦つきのひかりのさやけさに
海士のをとめもかひゝろふなり　曾我芳子

あきかせのわたる浦和のなみまより
小しまのまつにのほるつきかな　谷口ふさ子

あひきする海人の小舟のかす見えて
つきすみわたるよさのうなはら　谷口とも子

よさの海きしのはやまは見えなから
なほいさよへるつきのさやけさ　高橋ちん子

和田のはら舟よりほかにくまもなく
いますみのほるつきのさやけさ　羽田三緒子

すみわたる月にこよひはつりふねの
かすそひてみゆたけしはのうら　種田歌子

風もなくよるさゝなみにゆふしほの
みつのはまへのつきのさやけさ　河田いし子

ひさかたのひとむらしろき雲間より
つきを見せたるうらのあきかせ　中村きさ子

風ふきてなみたちさわくあらいそに
ひとりしつめるあきの夜のつき　渡邉のぶ子

和田のはらさやかにわたるつきを見て
こゝろきよくもすめるよはかな　遠藤千代子

海のへにこゝろたかくもすめるつき
ちひろのそこもさえわたるらん　石井幸子

松かせの音もすみよしのゆふまくれ
なみちはるかにつきそのほれる　安村歌子

くもりなきかゝみか浦のつきかけに
こゝろしてこけあまのつりふね　伊東鶴子

よもすから波のまに〳〵ふねうけて　山本さし子

かゝみがうらのつきをみるかな

よるなみのたさもしつかに月さえて
こがれのうみにちさりなくなり　黒木信子

鹽がまのけふりは絶えてさしのほる
つきのみきよしあきのうなはら　大坪修子

はるかにも大うなはらを見わたせは
なみよりつきそさしいてにける　大坪久子

見わたせは濱のまさこちさやかふも
ひかりくまなくつきそてらせる　木村ぎく子

しら濱のよするなきさにつきかけの
千々にくだくるすまのうらかな　栗生菊子

松かせはふけゆくまゝにおさたえて
つきしつかなりすみよしのうら　畠山美子

うなはらの千さとの波のすゑまても
のこるくまなく照らすつきかな　畠山ゆき子

はるかなる沖よりいつるつきかけを
きよきなきさによするなみかな　畠山千惠子

きぬたうつおとこそたゆれ小夜更て
つきや見るらんなにはなさめも　畠山清子

もしほやく小島のあまもあきの夜の
つきのあはれはくみてさるらん　畠山千代子

まつらかたひろくもつきのすめる哉
もろこしかけて見ゆるはかりに　畠山百合子

繪のしまや波のよるさもみゆるなり
きよきなきさをてらすつきかけ　丸井八重子

見るか中に夕きり晴れて波のおもに
いつるもきよきあきの夜のつき　遠藤まん子

ゆふされはあひきの聲も打ち絶えて
海士ののきはにすめるつきかけ　徳永さく子

漕ぎかへる舟もさやかに見ゆるなり
つきはくまなしうみのうへまて　竹内頼子

大御代のめくみも志るしさやかにも
照らすうみへのもちの夜のつき　柿田綾子

あかしかたゆきかふ舟のかす見えて
なみまにうつるつきそさやけき　辻本ひさ子

うなはらにしほやくけふり跡たえて
ひかりさやかにゆふつきのてる　黒瀬よし子

雲はれてひかりもきよきうらなみに
ちるかげきよしあきの夜のつき　遠藤眞久子

あらなみのうつおとたえていそ松の
こすゑにたかしあきのよのつき　遠藤雪子

さゝなみのよする濱邊にすゝみして
ひかりさやけきつきをみるかな　橋本辰世子

さえ〳〵てくまこそなけれいその原
しほにつきくむあまもありけり　寺尾さかえ子

なみ風もいまはをさまるすみの江に
きみか代照らすつきをこそ見れ　大寺孤迹子

更けぬれは岩うつなみのおとすみて
たかくなりゆくあきの夜のつき　高松銀子

をちこちにすなとるあまの舟見えて
うらわにふくるつきのさやけさ　杉野ならめ子

ふく風にひかりはさえて波のうへに
まさかにやさるあきのよのつき　林琢子

くまさなるものしなけれは明石かた
なみまにうかふつきそさやけき　降田瑞起子

波の上にうかふさきりもかつはれて
しまやまさほくつきは出てけり　中村まくゑ子

たちならふまつの木の間に見ゆる哉　北澤たけ子

須磨のうらわのあきの夜のつき

こゝろなき海士か子等さへうたふ也
しはのうらわに照るつきを見て　山路みな子

浪の音もふけしつまりてつきかけの
いよいよ澄めるすみよしのうら　赤羽もと子

もしほやくけふりもたえて曙かまの
うらわさやかにつきのてらせる　萩原ひて子

いさり舟かずもあらはに見ゆるまで
つきすみわたるたけしはのうら　上沼ひさ子

須磨の浦やいそうつなみの音もなく
さやかにすめるあきの夜のつき　熊谷たい子

うな原のよるのなかめをそへぬるは
そらゆくつきのひかりなりけり　小川ます子

和田の原こきゆくをふねかちをたえ
さやけきつきにうかかれつる哉　井上雪子

さやかなるこよひのつきに湊いつる
ふねのゆくへもさだかにそ見る　目黒佐喜子

打ちよするこかねのなみに影みえて
ひかりさやけきあきのよのつき　川上博子

いさりするおきの小舟のかけさへも
さやかにみゆるうなはらのつき　川上喜代子

わたの原やそしまかけててるつきは
わけてさやけくみえにけるかな　佐久間きみ子

あひきする船もさやかにみえにけり
かゝみかうらのあきのよのつき　佐久間八重子

さゝ浪のよするまさご路きらきらと
こかねのごとく見ゆるつきかけ　加藤さく子

いさり火のほかけは消えてみつ潮の
さしてのいそにつきそのこれる　藤村たか子

海はらもくまなくてらすつきかけに
あまのをふねのかずもみえけり　玉井隆子

海はらもさやかにてらすつきかけの
ひかりすゝしきなみのうへかな　新浦美津子

すみよしやきよきなぎさの海はらに
こころえかほにすめるつきかな　逢井多江子

あはれにも見え渡るかな八しまかた
さやけきなみにゆみはりのつき　工藤仁子

こゝろなき海士も憐れとながむらむ
須磨のうらわのあきの夜のつき　根岸豊子

舟よする須磨のうらはのほかげまで
さやかにみゆるあきの夜のつき　萩原草子

松浦かたたゝよふつきのかげきよみ
よるともみえぬなみのうへかな　中桐杏子

打ちよする波にみかきてつきかけも
いとゝさやしきうみのおもかな　縮脇ます子

つれはみぬ島もさやかになりぬるか
すまのうらわのあきの夜のつき　小曾根しう子

沖とほみなみにゆられてゆくふねの
かすさへみゆるつきのさやけさ　池谷富子

明石かたおきゆくふねもみゆるまで
さやかにてらすつきのかけかな　吾妻近子

まどかなるこよひの月をたよりにて
あかきやすらむ須まのうらびと　戸塚鐵子

うききりのうきて物思ふちりのよを
きよめてすめるうみの邊のつき　長澤秀子

うな原やなみのおとさへしつかにて
すみわたりたるあきの夜のつき　尾田ふく子

ゆきかひし千々の小舟もあとたえて　千石素子

いよ／＼すめるもちの夜のつき　田中八千代子

竹しはの千ひろのうみのうろくつも
夜よしさつきにうかびいつらん　竹腰隆子

難波かたゆふしほみちてびさかたの
つきのみふねもうかび出にけり　仲田繁子

住の江のきしへの松の木の間より
なにはのうらのつきを見るかな　中川浪江子

和田の原ゆふきりはれてくまもなき
なみちをわたるあきの夜のつき　下元もさ子

おもふこと海さちわたるあまの子は
こゝろくまなくつきやめつらむ　白石梅子

しら波をよするいそへのまさごちに
のこしてかへるつきのかけかな　森こさ子

沖さほくあまもをふねをこき出てゝ
なみぢにすめるつきやめつらん　濱さみ子

島やまのしげれるまつのこのまより
なみにたゞよふつきをみるかな　長谷川まつゑ子

かぜさわぎよせくる浪をよそに見て
おきゆくつきのかけそしつけき　由井澄子

海はらのつききよけれは八十しまを
のこるくまなくめぐりてを見む　由井浪子

わたのはら風しづかにてつきかけの
ふねのたゞよふなみのうへかな　野中あさ子

こゝろなきあまも月にやうかるらん
すまやあかしのうらつたひして　並木春子

あまの子がかへれるあさのつり舟に
さすもながしやあきの夜のつき　赤林ふしゑ子

波かぜのおさもしづけきうみへりを
つきにまかせてあゆむたのしさ

吹く風もきよきいそへのしらなみに
ひかりをそふるあきのよのつき　大河内峰子

よのちりはみなしら波にうちあらひ
こゝろあかしのつきを見るかな　林あさ子

すまあかし海邊のいへにやさりして
いくよくまなきつきを見るかな　井上芳子

ゆきはなのながめにあゆしみやびをも
こゝろうごかすすまのつきかげ　福田直榮子

わかの浦いそへをてらすつきかげは
あかしもすまもおよばざりけり　井上花子

あら浪にくだかれつゝもてりそひて
おくるやつきのこゝろなるらむ　木下千代子

うな原やからろのおさもしづかにて
さやかにすめるつきのかけかな　吉田信子

見わたせは浦のさほやまもれいでし
つきしづかなるうみのおもかな　安田ふじ子

海士人もそらにこゝろが引くあみは
まつめにかゝるなみのつきかけ　武田捨子

白なみのよするなぎさをさめくれは
ふくるもさなくつきそきらめく　尾立富子

さやかなる月にうかれてなにはがた
こゝろもみつのはまつたふなり　村上貞子

さゝなみのよする海邊にたちよれは
すゞしくのぼるあきの上のつき　丸木久榮子

更けぬらしあまのさもしび影消ゑて
いやすみわたるあきのよのつき　岸なみ子

風そよぐわかのうらわのゆふなみに
さやけくすめるあきの夜のつき　菅川清子

ながめやる千里のうみのはてまでも　檳木香芽子

こゝろくまなく澄めるつきかけ

海はらをくまなくてらすつきかけに
はまのまさこのかすそよまるゝ　平野晴江子

和田つ海のはま松かねはしけれと
さやかにみよとつきはてるらむ　絹川ますゑ子

み渡せはあなうなはらのつきかけを
かされかけたるいそのさゝなみ　高屋はきの子

てりわたる月のひかりのきよけれは
はまのまさこのかすみゆるあり　永尾かなる子

海人のたくしほのけふりに曇れとも
すゝしくうつるなみのうへの月　大矢正子

網引するなみのしほちにくも消えて
つきすみわたる三保のまつはら　小林文子

和田の原ほのめきそめてひさかたの
くも井にのほるあきの夜のつき　高砂き代子

見わたせは沖のうきゝりすゑはれて
なみまにきよしあきのよのつき　金森俊子

沖のかせおともすゝしく小夜ふけて
つきそかゝれるみほのまつはら　木村萩子

秋の夜のつきのひかりにあかしかた
おきの小ふねのかすもみねけり　德永蕊子

浦ひともうきをわすれてみつるかな
おきのすはまのあきのよのつき　德永廣子

さひしさもわすれにけりな夕つきの
かけをまちとるすまのうらひと　澤田春子

くさ〳〵の思ひありそのつきのかけ
いさりする身はいかに見るらん　橋本重子

よもすからよせてはかへす荒いその
なみにたゝよふつきのさやけさ　香川知惠子

なにはつのあしま〳〵にやとりつゝ
いさゝきねゆくあきのよのつき　磯野こと子

目馴たるあまもこゝろをとむるまて
さやかなりけりあきのよのつき　眞島千鶴子

打ちよする波のおとたにすゝしきを
つきもすみゆくすまのうらかな　秋葉清子

きよみかたいそうつ浪のはけしさに
ひかりたまちる夜半のつきかけ　江間きよ子

しほの浦みわたすなみにきりはれて
つきのうへこくあまのつりふね　江間あつ子

波かせのおとしつまれるうなはらに
ひかりさやけきあきのよのつき　清水ゆき子

かけきよき月に子かにのあそふなり
なみのうれ〳〵しつかなるよは　清水のぶ子

松浦かたつきかけきよきあきの夜は
こかれのたまもなかれけるかな　高橋照子

さやかなる月のひかりを船にうけて
つりゆく海人やたのしかるらん　綿野りき子

いにしへのたけきこゝろも和らきて
すまのうなへにつきやすむらむ　青山秀子

わたの原とほきしまやまかつみえて
なみちはるかにてらすつきかけ　山内蔦子

海邊なるくさきとゝもにつきかけの
みつにうつれるひかりゆかしき　内藤よき子

いそ山のまつのあらしにきりはれて
なみちをてらすあきのよのつき　岡田陽子

ふたみかたたきへ遠くもさしいつる
つきになくさむあきのゆふくれ　山口千枝子

うちよするしほさきしろく風おちて　小川受子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つきこそ出つれいそ山のうへに

しほやくけふりもきゐて須磨の浦
くまなきつきのかけを見るかな　田中静子

打いてゝ見れはたへなるなかめかな
なにはのうらの夜半のつきかけ　田中さき子

海士人かすなさるこゑもしつまりて
つきすみのほる須磨のうらかな　進藤敏子

いひしらぬけしきをこめて磯さきの
まつの木すゑにつきそやされる　進藤遊喜子

しほかせにふかれ／＼てよもすから
さやかにてらすつきを見にけり　田中つれ子

今日もまたあかて一夜をあかしかた
うらのさやまのつきさかたりて　増田丹眞子

磯つたひくるゝ島やま見つゝなれは
なみ間にあかくつきは出にけり　増田まさ子

すみよしの浦和にたちてつきみれは
こゝろさへこそすみわたりけれ　増田斎子

海士の子か潮汲むおさもたゐはてゝ
つきかけきよしおほわたのはら　北原李子

うきくもはひかりにきゐてすむ月の
くまさ見ゆるやおきつしまやま　山田璩子

いさまなきうらのさまやの蜑かみも
うみへにきよきつきあふくらん　秋野つゆ子

夜をふかみ藻汐のけふり消ゐはてゝ
のこれるつきのかけさやかなり　齋藤よし子

かせたゐて波間しつけきうみのへに
くまなくてらすつきのさやけさ　垂水谷子

夜もすから浦なみきよくすむつきに
ふくるもしらぬいさり火のかけ　成田あさ子

きりはれて風しつかなるなみの上に
さやかにやさるあきのよのつき　高橋かれ子

島かけはまたをくらきにこりなき
つきはなみ間にはやうかひけり　高橋ゆき子

なかめやるおほうなはらの波の上に
こゝろさゝもにすめるつきかな　藤村眞子

こさ浦のひきしほまちていでにけり
すみわたりたるあきのよのつき　廣田さめ子

（以下延着）

山ならはしつか田こさに見るへきを
なみこさに見るうらのつきかな　坂齋香子

藻汐やくさまやのけふりはれそめて
さやかにすめるあきのよのつき　三幣操子

うらゝかにそらもはれそめ月はいま
いそやままつのすゑにかゝれり　前橋友子

うちよする波にくだけてつきかけの
ちりしくこかれをかしくもあるか　川上博子

いさりする沖の小ふれのかけさへも
さやかにみゆるうなはらのつき　川上喜代子

九月五日兼題　琴を聞く

天

京都市古川町三條通南に入る　川部孝子

をみな子の心をなくさむる手すさひには、琴のしらべこそいとにつかはしけれ。雨のしめやかにふる日、月のくまなき夜は、さらにもいはず、いづれの時にても、爪音さやかに、かきならしいでたるは、いうにやさしき限りになむ。されどにや、むかしの人も、いもせのなかむつましく、家の内に波風なきを、琴のしらべのと

丶のひたるにたとへ給へり。げにはかなきもの丶しらべあひたるすら、ゆかしくおぼゆるものなるを、まして女のしうと姑によくつかへ、をうとにまめにかしつきて、家のうちやはらきたのしまむは、まことにめでたくたふときはみにこそ。あはれ女は琴にむかふ毎に、このことわりを思はゞ、あそびわざにすさふ事もなく、女の道のよきしをりとならましをなど、おもふ折しも、ゆかしき音の、いづこよりかもりくるに、今宵はわきて身にしみて、怪しきまでなつかしく、例にもにず、夜をふかしつるも、物くるはしや。

地

備前岡山八番町　降田瀬起子

月のいとあかき夜、松虫鈴虫のねもがなと、おもふどちすずろありきする折しも、さと吹きくる風に送られて、何處よりか琴のつま音の、はるかに聞ゑければ、あなゆかしやと、音をしるべにたどり行けば、やゝ人遠き處に、静かに住みなしたる家居、木立物ふりて、わざとならぬたゞずまひ、ませめぐらしたる様など、何となうけ高くみやびやかなるに、小琴の音は、正しうこの内よりもるゝにぞありける。あはれ如何なる人の住ゐなるらんと、ゆかしさもいやまさりて、立ちよりうかゞへば、まだうらわかき少女の、月に向ひて打彈く様、いともめでたく、しかも其の調の妙なる、げに天津少女の天樂もかくやと思はれ、くまなき月はいよ〳〵澄みまさりて、折々通ふ松風の、調べあはせたる、いづれのをよりと云ひけん言のはのしのばれて、いとゞあはれにおもしろう、身は仙境に遊ぶらん心地して、時の移るをも忘れて、其の曲のはつるまで聞きてけり。

人

東京市四ツ谷區傳馬町一ノ卅七　目黒佐喜子

月おもしろきある夕、虫の音どもに誘はれて、庭の築山の邊りにさまよひ出でぬ。折しも、隣りの高樓に聞ゆる琴の音は、此の程かぞいろの君が逗子のなり所に行かせ給ひし跡に、徒然を慰むる露子の君のすさびならむ。曲は何ぞと耳を澄ませば、聞き馴れし小督の曲なるも嬉し。日頃此の道に秀で給へる事隠れなく、師の君も舌を巻き給ふと聞きつる程ありて、其の調べの妙なるは、はた其の聲の美はしさは、天津少女の奏づるにやと疑はれて、いつとなう隔ての生垣のもとに立ち寄りて聞けば、爪音いよ〳〵近まさりして、月に澄み渡りつゝ、床しともゆかし、蚊にさゝるゝも知らで耳を傾け、さながら仙宮に遊ぶ心地して興に入りし程に、はや調べも終りと覺えて音色ゆたかに收まると共に、丸窓にうつる君が姿見えしが、小簾をくゞり出で、あなよき月にこそとひとりごちつゝ、欄にぞよりたる。わらはは垣の蔭より仰ぎ見て、實に面白の今の調べよといへば、釣りたる燈籠の下に延び上りて、此方をすかし見つ、其處におはすは誰ぞ、佐喜子の君ならずや、さては今の調べ聞き給ひしか、いかにせんと、あまへたる聲するもをかしや。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

久方の月の光も、なぎふく風の音も、すみわたる秋のもなかの空のけしきは、柴のかり戸も都のかたもひとつにていとあはれふかく、露のみ袂におきあまり、ものみなしめりがちなるに、天とぶ广のひとつら聲をほにあげてくる鴫が山田の畔つたひ、爪おとさやかに松ふきしなる風のなすけて、かきなす琴の音は、たが世をしのぶ庵なるか心ゆかしくなつかしく、立よる垣れもいと、はづかしくなん。

田代艶子

晝間のあつき、忘れ草に、野邊の夕露ふみくだくも亦一興ならめと、同じ心の友どち、ほど近き野づらを、そこはかとなくあくがれありくに、ゆくりなく、ふきくる風は、なり〳〵あやしの音をなん送りぬる。さあれど、峯の嵐にもあらず、はた松風とも覺ねぬに、耳うちすませば、まさしく琴の音になんありける。所がらそゞろに、嵯峨野のむかしも忍ばれて、たどるともなく近づけば、さながら玉盤に玉をまろばすが如く、時々は流るゝ水の如く、其しらべの妙なる、あはれ、空とぶ鳥も、心あらば、しばし、つばさやとゞむらんかし。あかぬ思ひに、とみにはまりもねやらぬ折から、東の方ほのめけば月がけなめりと、思ふにしるく、くらかりし木々の下かげ、朧なりし四方のけしきも、あざやかに、見渡されぬ。あはれ琴の音は、いよ〳〵すみていよ〳〵妙に、空にはちりだかりのくもだになくて、鏡の如き月のかげのみ、心のやみをもてらしがほなとなり〳〵云ん方なし。

高橋つた子

月のあかき夜に、柴の戸出てゝ、そこともなくあこがるゝに、道のべの小草に結べる露の白玉ゆりかゝりて、光いひしらぬに、虫の音もそひていとおもむかしければ、おぼゐずわけ行くにいと妙なる琴の音きこゆ。ゆかしきまゝにたどりぬれば、ものふりたる木立のかげに、あれたるひとつの家あり。如何なる人の住家ならんと、立ちよりみれば、いとらうたきなる少女の、月に向ひてあはれにも琴弾くなりけり。其のしらべのめでたきに峰の松風もかよひくらし、昔嵯峨野の月に弾して、再び都に迎へられし人もかくなんと思ひ出でられてなん。

谷口婦佐子

月かげのあかうさしかゝるに、まがきの花の色々に香ひ出でたるぞなかしき。今宵は、心に志けかる事もあらねば、この花ことに歌詠み見んと思ふものから、はかばかしき事もね出でぬを、何くれど打ちかたふくるほどに、草村の虫の聲など。すごうなりぬるは、夜のたけたるなるべし。やがて閨に入らんと思ふ折しも、はるかにきこゆる琴のしらべの、かいなでのてならぬに、よくきかんとて庭に出づれば。つき山の松風、中川の音に通ひて、いよゝあはれにすみ渡るを、月も中天にありて打きく樣なりや、

つま琴に月も心や引かるらん
音すむ空にたゞよひにけり

稲原菫子

秋の夕の、物さびしきに堪へかね、そゞろありきせばやと、家を出でぬ。折柄、たもと涼しく吹きくる風のまに〳〵、いづくよりともなく、床しき琴の音の聞ゆるに、日頃好める道なれば、何かはためらふべき。隨者のとゞむるをも聞かず、ひたぶるに音をしるべに近づき行きぬ。いかなる人のしらべなるらん。あなたのしき事よ。御國のほまれてふ曲らし、妙なる爪音の。あるは高く。あるは低く、溪水の涓々と流るゝ如く、松風の颯々と吹き渡るが如く。嫋々たりしおのが心も、洗ひ去られてすが〳〵しく、月影の如くすみわたりぬ。あゝ音樂ばかり、人の心を調和せしむるものはあらじ。されば、一家の和合を主とる、天眞柔和なる女子には、いかばかり適當ならん。年老いたる父母舅姑、將た外事に疲れし良人の御心を慰さめ安する材料ともなりて、闔家さいかにたのしからん。琴瑟相和するは一家和り。一國平なる兆なりと、學びたりとも、これを應用せず、はた何にかせんやなどゝ、獨りごたるゝもをかし。やがて、彈き癸でをはりたるらし、音も聞ね

ずなりければ、今は詮方なく、もと來し道をたどりてかへりぬ。

濱　たつ子

ますほのすゝき生ひ茂りたる九月はじめとこども志らずあこがれ出でぬ、人まつてふ秋の虫の音も、ねならぬふしにて月のくまなきに一入あはれにぞ聞ねける。折しもさやけき月にけぢめ志るけれど、いづくともわかずつま琴の志らべ、吹きくる風の、まにまに、尾花が上傳へてもれきこねぬ。あはれいかにめやびなる人の志らべにや。かゝるさやけき月を主とし、秋の虫を友とすさぶ人こそ心にくけれ。更け行く夜半ともろともに、一際高らかなる志らべの音、高殿にて月のまへにかきならすとは、趣き異にしていとめでたし、心根かたきますら夫が、波うち際にて、かたはらなる柴の伏屋の琴の志らべに心ひかれ、かたき心もさすかに打くだかれつる、かのふる事も、打つけに思ひ出でられていとをかし。かゝる夜。かくもすきたるすさびなす主やたれ、尾花かきわけて問はまほしけれど、露多きを如何せんとて、ためらふ折しも、吹きくる風の身に志みて、初めて巳れに歸り、家にて父母のまちわび給ふらん、あなをしき別れかなと、ひとりごちつゝ家路たどりつ。

渡邊まさ子

此宵は月もすみ渡りぬ、いさ秋のあはれをなくさめんものと、庭におり立つに、ふむ足音に虫の音のなきやむも。秋の憐れの一つなりけり、常には訪ふものもなき垣根に、こよひは妙なるおとのきこゆるは、たが月にしらふる琴のねならん。あまりに床しきなつかしさに、置きわたす露の路をたどりくるに、あやしきかきのうち深うねしを見いたしぬ。しはし戸ほそに佇めは、いよゝしらへのまさり來て、濱松風のかよふかとうたがはれ、心自とすが〳〵し、實とや、昔新田佐中將が、駒をとめしもことわりや、なとゝ、そゞろ浮ぬ折しも、空なき渡る雁かねに、夜の更けしを心づき、名殘をとめてかへりぬ。

赤木八重子

「居は氣を遷し養は体を遷す」といふひじりの言は、いともよくいはれたるもの哉。去年の末つ秋のころ、妾は嚴かなる父にともなはれて、あしびきの山中のとある鄙郁に遊びて、ひたすら物見る四方の景色に、おもはずも時をやりて、夕暮近うなりにけりさなきだに、唯さへいと物淋しく思ふ秋の景色に、知らぬ旅路の山なかのつれ人、最と心細き少女が心かつ夕暮れなれは甚くもの悲しう、おもふ折しも、夕をしらする遠山寺の鐘幽かに聞ねつるぞ、いとゞあはれをそへし。遙かかなたに聞こゆるは、秋をかなしみて叢にすだく、蟲の音あるは紅葉踐みて久方のさやけき月に音ふ鹿の聲あるは秋風の颯々と過くる音、瀧の音は轟々とひゞきて、一としほのあはれをそふるなと、大かた聞く音みるもの、一つとして、あはれをそへざるものなきに、時ならぬ時雨ふりきて袖を濡す折しも、一むれの秋風の媒となりて、いとはでやかなるれ、瀏亮とさねて、六つ合ひにあふるゝばかりなり、いとも清きれよさよく〳〵聞けば、思ひきや、これ十に三すぢをそへし琴の音ならんとは、かゝるこよなき愁境のきはに、誰れ人かは腸を斷たざるものあらん、と思ひ出づるまに〳〵、拙き水莖の跡をかくなん。

寺尾さかね子

あなおもしろしあなゆかしくたへなる琴の音や。かゝる深山の谷かげに、如何なる都人のうつり來て、此の調を爲すらん。琴の音にあはせて、歌も聲もいとたへに聞こゆなり。見るからに、のきはかたふきはんくちて、あらき風たもふきなば、さそふる事は、おぼつかなく、草のみ高くおひしげる、此賤か家を世をしのぶは、身にうき事の有りてにや。いにしへの小督の局の古事をも、思ひ出てつゝ聞き居けるに、みねの松風ふきそへて、そゞろにあはれをもよほせり。音樂にもいろ〳〵あれど三味の音はいやしく、異國のびやのははこりが聞こえて、ゆかしからずとこそ思はるれ。琴はひとり如何なる所にても、よろしき物にて、うつくしき高さのなさよりもるゝ音は、ここに品高き樣をもはるされとかゝる、深山の伏家にてきく時は、又一しほのおもむき有りて、うき世の外の心地せられ、其の主をも、おくゆかしくは思ふなり。折りから我名を、よぶ者有り、ふとかへり見れば、母君の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まれきたまふなり。あゝ、妾は、前の日より、母君に伴はれて、此深山の出湯には、來居けるに、今日は家にまからんとて、仕度を爲し、車をばむばしまつ間の、すゞろ歩きに、琴の音にひかれつゝ、かゝる所迄來つるかな。我にもあらぬ、事して、母君をわつらはしまゐらせしよと、琴に心はひかるれど、いそぎ、母君と共に、出湯の許にいたり、家にこそはかへりけれ。されど、かの琴の音、さてはたへなる歌の聲など、耳にのこりて、したはしく、我家の、かの伏家に近からば、師ともたのみて教をこひたく、又琴の主の、ゆかしき身の上をも、きたたく思ふになん。

四　[illegible]子

折しも秋の初めつ方、月いとすみ渡りたる夕、庭もせに咲き亂れたる萩薄の、露重げなるさま、野邊の景色も忍ばれて、あはれ、鈴虫の一聲もかなと、打ながめたるに、何處よりか、もれ來たる琴の音に、覺えず庭に下り立ちて、露に、裳裾のぬるゝもいとはず、柴の籬に身を寄せて、聞きすませば、自づからなる、竹むらを其の儘庭に作り爲したる、隣の家にてかき鳴らするなりけり。松吹く風のゆるきが如く、走る岩水の逆きが如く、或は高く、或は底く、ひそむが如く、舞ふが如くいとも〳〵妙なる調べ、さても、ゆかしき人のすさみ哉、露深き、嵯峨野を分けて、仲國とやらんが、聞出したる、小督の局の爪音も、かくやありけんと、聞きとれたるまゝ、暫しはものも覺えず。あさけば、月は、愈々高く、音は愈々すみ渡りぬ。あはれ、その月あはれ、其の琴の音、露深く、月明かき夜に、逢ふごとに、妙なる調への、今もなほ忘れがたくてなん。

名取正代子

樂は人を和するの用といへども、禮を以て之を節せざれば、和するのみにして、終に亂るゝに及ぶとなり。近きころほひ、世に翫ぶ樂器といふもの、くさ〳〵あめれど、其の調のみだりがはしからず、よく人の心を和らげ、目に見ぬ鬼神をも、あはれと感ぜしむるは、和琴になん有りける、ひと夜、月のいみじうすみわたるをかしきに、はしちかういでゝ、打ながむる折しも、妙なる物の音きこえたり。たがすさびにやあらんと、聞きませば、こは近きあたりに、世のたづさはりもなくて、ゆるやかにすみなし給へる、あて人になん有りける。さては君も、今宵このくまなき月のあはれさに、かねてたしなみ給へる、琴などかで給ふなるべし。いかに樂しう、將すが〳〵しうや、おはしますらんと、そゞろにかなたのけしきの　おもひやられて、いとゞゆかしきになほも庭におりたちて、おばしまあたりに、たゝずみつゝ、月のかたぶくも知らで、きゝゐたるも又をかしや。

種田うた子

こよひは、いと空すみ渡り、山のはの木の間を、いづる月のかげも、いと面白くおぼゆれば、ふ机にむかひ、源氏物語を、ひもとき、しばしよみくたしつゝ、ふとあふぎ見れば、月はいつしか、檐をはなれくまもなく、てりまさりたるに紫式部の石山寺にて、見給ひしも、むかしといまと、かはるのみ、同じみ空の月と、なりにふれて、思ひ出づるなりから、たかつま琴のしらべが、かきならす音もいとたへなれば、姉君にきかせまほしうて、よび參らするに、たへなるしらへおもしろやと、いと喜び給ふ。げに神代よりつたへきし樂器とて、たにことなりて、松風留の音にもたくふと、歌にもよみ、神の御心にも、かなひ、いと賞すべきものは、琴にこそ。

河田いし子

檐にきゝしせみのこゑも、荻の上風おとづれてより。くさばにすたく虫のこゑ〳〵とかはりゆき、みそらの月のかげきよくさしいでたるに、いとゞたかりのつられてなくこゑや、松風にしらべあはせて吹送る、いとゞたへなる。つまごとのねもおもしろく、月もろともにすみわたりきこゆるに、秋のあはれも身にしみてあなゆかしと思ふにつけ、たがゝきならす。てわざならんと、何となう。その人のしたはしう、時のうつるもわすれ、みゝそばだつるに、時計の十二時をつぐるに、こゝろつけば、ことのねもやみぬ、げにおくゆかしく、あはれに、したはしうおもふものは、ことのしらべになん。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まこと子

夜べ庭にたゞ立つ折もこそあれ、そよ〳〵とおとなふ風と共に、妙なる調べ聞ゆる床しさに、なほも耳そばだて、風の向に、心よすれば、これぞおのが日頃好める琴の音にありければ、いよ〳〵端に、身を近よせて、聞きすませば、向ひなる木立しげれる、奥の高殿にて、聲清らかにはりあげて、かきならす、つま琴になんありける、かくて、しばし聞き居けるを客人訪ひ來ぬと、下女のつげければ、惜しき琴の音を半ばに、聞きのこしぬれど、實に〳〵床しき調べは、琴にまさるものなく古人の此の音に心動かされしも理りや。

富子

世に、糸竹の調べは、種々あれど、何れも、人の國より、渡り來りつる者にて、床しきふしなく、此の琴の調べばかりは、優に、妙なる者にぞありける。殊に、月かげ清き、秋の夜に、垣へだてゝしらぶる琴を、聞くをや、折しも、遥かにきそふ、松風につれて、琴の調べの床しうなつかしく聞ゆるに、文よむ心も、打忘れ、虫の音のたゆるもしらで、情こまやかなる調べに、あくがれて、夜をばふかしぬ。實に〳〵、やさしく床しうて、忘れがたきものになむ。

失名

一夜、月の面白きに催されて、そゞろありきせし折に、ほの聞きし琴のねの、耳にとまりて忘れがたく、明日もと思ひしを、あやにくに、空うちくもり、それより、夜毎に思ひ出でらるゝものから、降りつゞく長雨の空、いつ晴れむともしらず、心もとなくてのみすぐしゝに、さし入る月影、さきの夜にもまさりてさやかなれば、ありしつらべを、今夜こそと、立ち出でゝ、心ざせるかたにゆきつ。やうやう近づけば、嵯峨のわたりならねど、松あるかたに、さやかに聞ゆるつま音、いとなつかし。すいがいのもとに走りよれば、さだかならねど、けしうはあらじと見ゆる女の、松吹く風にしらべあはせ、聲をかしううたへるは、世の人のさもたぐえず。妙なる調は、月とともにいよ〳〵すみわたりて、雲井にまでもひゞくらむと、いみじう心にしみて、月の山の端にかたぶくも知らで、聞きほれてなむ立てりし。

佐久間八重子

山里に、螢雪の友どちありて。木の葉もやう〳〵うつろひ、蟲の音もやう〳〵可笑しと、いひおこせたれば、即ち往きぬ、そが住居は、山あひのかれたにありて、前は遠く海を眺わたし、又、所々の山の上、山ふところなどに、なにしげなる家の棟ひられて、皆て山水の畫にて、見しごとく、いとめづらかなりけり。時しも秋の最中とて、をちこちの山々は、皆、もみぢして、二月の花よりも紅く、松杉など、ほどよう綴合せて、いとをかしう、友なる人の、導くまに〳〵、彼方、此方と、あくがれありきて、いつしか日も傾ぎ、さびしさも覺えぬれば、なごりは未だ盡きねども、家路にかへりて、やがて夕げもすみ、人々と、庭に下りたちぬれば、折しも十日余りの月は、既や、さやかにさしのぼり、風は颯颯として、木々のうれ葉をならし、蟲の音はいと凄切として、草村に咽ふなど、えもいはれぬばかりなれば、ゆくりなう、更かしぬる程に、岑の嵐か、松風かたゞしはすだく虫の音か、耳かたむけて聞くからに、かすかに響く爪音は、誰がなぐさみの調なるか、曲はさやかにわかれども、秋の哀れを音に込めて、身にしむばかりなつかしく、往きてとはまくほしかりしが、女子の身の夜なれば、えもならで、尚、ゆくりなう、更かしぬる程に、頓て月も落ちしかば、ふと爪音聞えずなりぬ、より止むもなく、閨に入るとて、

蟲のねか松のうれ葉を吹くかせか
たか爪音かあはれなりけり

と、口ずさみつゝ、寐ぬれば、夢は嵯峨野の秋なりき。

工藤仁子

四方は靜かに、夜はいたく更け渡りぬ。机上の燈火は、幾度か窓ふく風に消えなむとす。庭前の艸葉にすだく虫の音も、いとあはれに、み空に高く澄む月影のみは、いよゝさやかなり。折しも幽かにきこゆる妙なる琴のね、あゝこの清けき月に對して、かくも床しく調ぶる人や誰ならむ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小夜ふけて誰かしらふらむゆかしくも
　澄み行く月に琴のねぞする

あはれ、清き月を眺め、妙なる琴のねを聞きてはしばし、浮世のうさをも打ち忘れぬ。おゝさりながら過ぎ來し方を思ひ出づれば、ありにし事の忍ばるゝかな。我が亡友と去年の秋共に調べし琴のねを。

亜木春子

となりのぬしは、今宵もしらべ給ふらし、中がきといふも名のみにて、夕顔のさびしうはひかゝりたるかなたは、早隣なれば、琴のね手にとるばかりなり、あはれたへにも物し給ふことよ、庭の松風も聲を添へ、軒の螢もねにつれてまふがごとし。調たかきときは雲井の月にも通ふばかりさえ〳〵て、おろかなる人もこゝろ勵まさるべく、ひくき時は遠寺の鐘のひゞきにさもなふがごとくにて、たけきますらをもうちしをるべし、あるは時ならぬ霙の初ねかと思ぼゆ、あるは松虫すゞむしの草葉の露にかこつかこつかともきこゆ、あなおもしろさ、たぐひすさけびしに、きこゆてにやがてたへなる琴をやめ給ひぬ。いとをしと思ふものからなほ耳底にのこりたらんやうにて、われながらいとおぼつかなし。

楓木龜子

八重葎繁れる庭に、嵐吹きそよぐ夕、時を得顏にすだく虫の聲とり〴〵なるに、今日しも、友の許より贈り越したる鈴虫のねの未だ聞かぬは、如何にかしつると心許なし。いではなちつるあたり尋ね見ばやと、おりたちて、木の間もる月をしるべに、萩むらさしてたどりきたれば、思ひきや聲ふりたてゝ、今しも鳴き出でたるに、嬉しくて、行きも得ず暫したゆたふ折節、吹き來る風につれて、糸の調べのゆかしく聞え初めければ、耳かたぶけて打聽くに、小鹿鳴く此山里と詠しけむ嵯峨のあたりの秋の頃と、いとゞ靜かに唱ひ、出でたるぞ、姉上が彼方の座敷にて、手練の小督の曲を彈し給ふなりけり。げに秋もやう〳〵色に出でゝ、千草の花の香に匂ふ萩の上風、萩の露、虫の聲、哀れも深き今宵、殊に妙にかきならすつま琴のねに、よる鹿にあらねども、心もそらに澄みのぼる月影に、また一入の興を添へて、かへさもしらず、いつしかと更け行く庭に、なほたゞずめば、嵯峨の昔をまのあたり見る心地して、小督の局を尋ねよと仲國が賜はりし寮の御馬のそれならで、直居姿の麻袴、匂ふあたりに琴の調は止みて、くつわ虫のねのみしきりなるぞ、折からにものがなしうしのばれける。

香川知惠子

燈下親しむべしといひけん長き秋の夜を、あだにいれんも心なきに似たり、いでや見ぬ古の人を友とし語らはばやと、ふるき史ども取出でよみ初むるに、いみじう心ゆきて更に餘念なかりしが、いつしか家人の話の聲も絶え果てゝ、時を得がほになく虫のねばかりいとしげく、あたり物靜かなりければ、夜もいたく更けにけん、いで吾も休まずばと、獨言ちつゝ、猶此の卷よみ終へぬこそいと惜しけれなど、思ふ折しも今までは氣付かざりけん、はた今しもかなで初めしにやあらん、いとゆかしくなつかしき琴のねのきこゆるに、そゞろに心も動かされて、やをら妻戸を推しあけて見出だせば、ゐまちの月は光さやかに限なき空にすみ昇れり。あなおもしろの夜やと、なほも耳を傾くれば、ねはいよゝすみまさりて、あるは高く、あるは低く、忽ちにゆるく、忽ちにせまれる如く、いとも妙なる調べに、何事も忘れ果てゝ、只にきほれ居たりしに、ふと今見し史の高倉の帝の御事につけて、かの嵯峨野の奥に浮世を忍び、月に對ひて君を戀ふあはれの曲をかなでし、其の人のおもひ出されて、あやしう秋の哀も身にしみまさり、ゆかしさに、佛國ならねど、音をしるべに、今宵調ぶる人の家はいづくぞと、尋ね出でまほしうてなん。

内田蕙子

朝まだきよりそぼふりたる小雨漸くやみて、夕日まばゆく山のはに落ちて殘光も今は全く消えつゝしたるに、此の時すでにさやかなる月は、東山にのぼりたり。此妙なる景色は妾の拙筆にはうつしがたけれども、四方を見渡せば千草に宿る白露の、さながら寶石を以て作りたるにて、たり、此の山間の明月に加ふるにいづこにてしらべ初めけん、妻琴の音の奥ゆかしく聞こえて其の高く低くしらべ悲しき節々は、如何なる人の感情をも引おひして鬼神をもなかしむる感あり、妾は知らずいつしか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の琴のねの妙なるしらべに誘はれて、如何なる道を如何にして此の所まで來りしかと、今さら怪し此の時四方を顧れば、夜もすでにいたくふけたるさ思しく、月もしかたむき初めしに心付きて、妾は家路に歸らんとせしが今しばし／＼とさゝまりて、秋の夜のなほながからぬをかこち居しが、追々琴のもれ今は早深窓の底に失せんとせしを悲しみての余り、拙なき筆にうつしてかくなん。

小川愛子

湯あみはてゝ、軒のいと簾高う捲き揚け、やをら端近うすべり出でたるに、夕月の影をかしう、庭のやり水に移りて、咲き初めたるは千草の色も、ほのかなるに、颯と吹き來る風の涼しさには、堪へかねし晝の暑さも余處のやうに思はる。あはれ、春子の君世にましし頃、かゝる夕暮のけしきには、必らず箏琴とう出で共に調べあはせ、はては歌よみ、又は心あひの友たちも訪ひ來などして、おもしろく暮しゝに、今は何も思のくさはひとなりたることの悲しさよ。と打かこつ折しも、いづこよりか、なつかしうかきなす玉琴のねの、風のたよりに聞ゆるを、耳うちかたふくれば、折々とだえして、何の曲なるかさだかならねど、其のねしいとゆかし。ことし春の頃、梅か香なかしくかなりて、今宵の如く、夕月さへ匂ひ出でたる夜、遠く琴の調べの聞えしを、聲をたよりに、君と、妾と、又君が乳母なりし人と、問ひ行きしに、道にて、友の君の、吾方をとひ來ますに、ゆくりなく逢ひたれば、共にたどりつきたるに、琴のぬしも、同じ友たちなりければ、ついちの外より、春子の君横笛もて吹きあはせ給ひしに、琴のぬし出でむかへ給ひて、夜更くるまで興し遊びし事もありしに、今はさるそゞろありきも、かたしかしされば余處にては、面白く調べ合する琴のねも、吾身にとりては、涙をそふるたねとのみきゝなされて、「琴のねには露もそはられど聞けばあやしくぬるゝ袖かな」と、君が乳母なりし人、庭づたひにあゆみよりて、あれきゝ給ひしか、玉のを琴のなつかしう聞ゆるは、嬢の君の友なりし何某の君かりならん、君もしよにおはさば、こゝにても調べ給はんに、身まかり給ひしより、夢のやうにて過ぐ程に、およひもてかぞふれば、はや五十日余り七日になり給ひぬ、彼の松が根のおくつきに、いかにして獨眠りおはすらんと、いひ出でゝなくに、月さへしはし雲かくれたれば、又も思ひまさり、吾身一のこゝちせられて、よそにきく琴のねさへも、恨めしう露けき秋なり。

北原孝子

今日は夕げも早くをはりたれば、さも廣からぬ我が庭をゆきつもどりつ、そゞろあるきする折しも、まがきがもとに、咲き殘りし萩の香とともに秋風に送られくるは、琴のねにぞありける。おのれも先つ年より習ひそめたれば、少しばかりは心えたり、いかなる曲ならんと、しばしたゞずみきけば、これなんおのがひときは好める曲にて、うたふ節さへいとめでたければ、思はず垣間見ながら爪うごかすもをかし。

（以下延着）

三幣みさを子

秋の夜のふけゆくまゝに、窓の燈たえ／＼に、月は峰の松が枝にかゝりて、庭の淺茅生の蟲のねさへ。いとあはれなり。折しも、小琴のひゞきを、さそひくる軒の松風、さと吹き入りて、燈をかいけちれば、月の光はいよ／＼さえ渡りて、かなづる爪音の、いときはやかにきこゆるに、嵯峨野の昔おもひいでられて、なつかしさにたへず、あくがれいでぬ。たもふかたにしもあらざめれど、誰が家ならむ、さいとゆかしくて、おきそはりたる草葉の露に、そぼちつゝたどりゆくに、柴折戸の内なる、あやしの家の賤の子のはし近う、くまなき月の光に、心をすますになむありける。いかなる人の手すさびかと、透垣のもとちかく、立よる袖やうちふれけむ、枝もたわゝにおきわたせる、萩の上の露のはら／＼と散りゆきたるに、おのがけはひや見えつらむ、驚きたるさまにて、いとはづかしげに、つと立ちて内に入りぬる、その後かげのいとつやゝかに、愛たげなるや、あはな、立よる袖に、露のちらざらましかば、想夫戀とかいふ、いと妙なる調も、きか ましものをとうちかこたれてなむ。

去し日師の君の許より冷泉家御夫婦御成名にていともさかんに婦人會開かれて當座通題撫子露にて歌よめりなさいひおこせたまひければうらやましさのあまりに

山田瑋子

きくも猶うらやましきはなでしこの
つゆにひもとくさかりなりけり

蟬

塙いさむ子

みつどりの青葉にしげるすきむらに
こゑをきほひてせみぞ鳴くなる

大機動演習を見て

山手てい子

いさましきならしのいくさ見るからに
すぎし唐野のしのばるゝかな

洲鶴

大河戸長戸子

ゆたけさをなにゝたくへむ夕なぎの
たきのしらすにむれふるあしたつ





●女鑑歌文月並兼題

九月五日	歌……海邊月	文……琴を聞く	八月廿五日〆切
九月廿日	歌……茸狩	文……快樂	九月十日〆切
十月五日	歌……雲間雁	文……晩秋田家を訪ふ	九月廿五日〆切
十月廿日	歌……落葉浮水	文……亡友を思ふ	十月十日〆切
十一月五日	歌……深夜鹿	文……長壽を祝ふ	十月廿五日〆切
十一月廿日	歌……枯野	文……書翰文の効用	十一月十日〆切
十二月五日	歌……松の雪	文……居宅新築を祝ふ	十一月廿五日〆切
十二月廿日	歌……風船	文……拾子	十二月五日〆切

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

高等化粧料發賣廣告

●高等 **化粧水** オイデルミン 一箱三個入 金七十五錢

皮膚を艶美滑澤ならしむる高等の化粧料なれば貴婦人令嬢方の必需品なり

●改良 **びん付** コラキン 玉椿 金二十錢 一本

●改良 **すき油** メラゼリン 柳糸香 一箱三個入 金一圓五十錢

●改良 **ふけとり香水** ラウリン 花たちばな 一箱三個入 金一圓八十錢

第一剛き毛髪を柔軟ならしめ且汚れを浄め永く清潔の狀を保たしむ

●改良 **水油** オイトリキシン 花かづら 一箱三個入 金一圓二十錢

在來の香油の如く髪に粘ばりを生せず毛髪の光澤を艶美ならしめ脱落を制止し頭皮の疾患を豫防す

●あかとり **香油** アネモシン 春風油 一箱三個入 金一圓二十錢

第一頭髪の汚れを容易に梳き去るが故に髪を洗ふの煩勞なし故に病中又は病後に用ひて妙なり

●**ひげ油** フロネミン 住の江 一箱三個入 金九十錢

髭毛に使用すれば之れに適當の粘力を生じ隨意の形狀を保たしめ且在來の品と異にして之れを洗去ること容易なり

●改良 **おしろい** エリアンチン 春の雪 一箱三個入 金二圓十錢

●高等 **ねりおしろい** 一箱三個入 金七十五錢

品質純白緻密にして肌膚に附き易く且佳良の芳香を有し衛生上有益の佳品なり

●**うがひ水** エオチン しのゝめ 一箱三個入 金九十錢

口腔を清潔にし粘液を去り臭氣を防止す黴菌を撲滅し虫齒を豫防す出血し易き齒齦を固め咽喉加答兒を豫防す一名水はみがきとも云ふ

●福原衛生 **齒磨石鹸** 煉製金廿五錢 粉製金十五錢 同 金十五錢 袋入金三錢

衛生齒磨は口中の黴菌を撲滅するの効あるが故に傳染病豫防として一日も缺くべからざる良品なり

以上各種の化粧料は醫科大學教授理學博士長井長義先生の考案により今般弊堂に於て製造發賣せるものにして其品質の良好其体裁の優美なる眞に高等化粧料の名に背かざるは弊堂の深く信ずる所なり江湖の紳士貴婦人令嬢諸君普く御愛用の上高評を賜らん事を願候

東京市京橋區出雲町 (電話本局一四六二番)

内外化粧品問屋資生堂 **福原有信**

こゝろの華

七

●こゝろの華は歌文專門惟一の雜誌にして畏くも天覽の榮を辱うす　八月十一日發行

●論説●歌につきて　宮地嚴夫　徳川時代の和歌　武島文學士…消息●文の栞(其二)丸山松盧…讀書家の弊(承前)無名氏●文學史料●●伴信友傳(承前)山岸惟和…●文苑○歌●高崎正風●ヲ家餘福●本居豐穎●宮地嚴夫●林陸夫●小杉榲邨●大口旅師●坂井辨氏等數十首●日記の一ふし　坂正臣謹記…又のまをり(下)佐々木信綱氏の吉野紀行は本號を以て完結す　夏雲　下田義天類…窻前竹　萩原正夫●漫録●●薩摩守忠度歌集(其一)林陸夫　熊谷直好大人旅日記(其二)林陸夫　非歌人歌　萩野櫻顛子…歌學一斑(其二)下田義天類●詞海●短歌五十七首●新躰詩三首文三篇●雜報●和歌の革新●國學院卒業證書授與式●帝國大學卒業證書授與式●避暑●歸省●ことゞの泉●しきしま●新刊●大和にしき●俊成卿歌仙●女鑑記者の君に●學園　課題の歌…二百十二首●文章卅四篇●附録俊成卿歌仙の眞蹟は高尚優美なる石版摺にして眞筆と異なる事なし●投書を廣く歡迎す　歌の選者は佐々木信綱氏文は坂正臣氏也

●定價●一冊金十錢●六冊前金五十五錢●十二冊金一圓●郵税金一錢●郵劵代用一割增●爲替は東京青山郵便局振込の事●

●發行元　東京市赤坂區青山北町　こゝろの華發行所●

●發賣所　東京神田表神保町　東京堂●東京市麻布箪笥町　文遊堂●

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

従一位久我建通公題辭　佐々木信綱先生選

やまとにしき

定價金三拾錢●豫約特價金二拾錢●郵税金四錢●豫約申込期限十月十五日限り●豫約申込はすべて前金を要す●豫約期限後は正價に復す●出來期日は十一月三日とし申込順序により發送す●郵劵代用一割増とす●地方申込者は豫約實價の外郵税を添ふこと

上下三千載未だ明治の大御世ばかり歌學の盛なるはあらじれもへば萬葉より以下勅撰に私撰に幾多の歌集ありて優に其時代の風調をうかゞふに足るもさばかり盛なる今の世に未だ明治の思想を窺ふに足るべき歌集なきはいとなげかはしき限なり本所こゝに見るところありこの歌集を發刊し以て明治の歌集として永く後世に傳へんとす希くは大方諸君金玉の詠を吝まず本所の徴哀を大成する所あらしめよ

●豫約期限延期

暑中休暇中なるを以て地方投稿者の便を計り別項の通り特に延期す

●爲替は

東京青山局宛御振込の事

●やまとにしきへは何人と雖も投稿することを得べし

●用紙は半紙に認め三十首以上となし**四季戀雜新題**随意とし宿所姓名を清書し別に雅名を附記し封筒には（やまとにしき）原稿在中と認むべし

●原稿は九月三十日限〆切りとすその後來るものは沒書とす

●製本

洋装四六版にして頗美本●紙數凡二百頁

●附錄

短冊、色紙、懐紙、竪詠草書式を添ふ

●豫約申込發兌元

東京市赤坂區青山北町二丁目三十二番地　**こゝろの華發行所**

●豫約申込取次所

東京市神田區小川町一番地　**歌學會**
東京市神田區表神保町　**東京堂**
東京麻布區箪笥町　**文遊堂**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第八版

三輪田眞佐子著

女子の本分　全

定價　金二十五錢

郵稅　金六錢

本邦固有の道德に基きて、我が國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸孃が一日千秋を以て待ち給ひし第八版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さむ、

目次

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

（電話本局八八）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著
第四版

女子處世論 全

定價二十錢 郵稅四錢
菊判美本

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徵し女子たるもの、世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）
國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

杉谷正隆編

修身百首

全一冊

（定價金參拾五錢）
郵税四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれは雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもろの躰大にとゝのひ雅馴にして艷麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尙にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にれきて摸範となさは益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東久世伯○勝伯○松方伯○品川子○野村子○渡邊文
○富田○金子○平田○川田氏等諸大題家字及ひ序子
品川子校閲●平田東助○平塚定次郎○武内常太郎○湯川寛吉共譯

第三版 盧氏商工經濟論

全二册

定價
上編一圓四十錢
下編一圓二十錢
郵● 第四種 卅八錢
便小包 十里迄 九錢
百里迄 十六錢
税 百里外 卅二錢

郵便爲替（拂渡局）新富町

今や我が經濟は亂調の極に達し恐慌來々々々の聲愈陰雲を重からしめんとす是れ專ら我邦人經濟的知識の幼稚なるに職由せずんむあらず今の時に於て之か大に救濟整理の道を講せずんむ終に其歸する所を知らざるなり本社茲に本書の第三版を發行し江湖に紹介する所以豈偶然ならんや

本書記事精確にして理義明瞭なる世已に定評あり誠に國民一日も欠く可からざる良書なり綜錯なる難問題も一讀瞭然一家の經營を完くし國家經濟の基礎を確立して今日の急に應するに足るの長計大策を得る所以のもの獨り此書に在らむか

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）國光社

大賣捌 ●東京○文海堂○嵩山房○東京堂●大坂○吉岡

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國學專門講義錄校外生募集

大八洲學校々外生募集可致候ニ付有志者ハ至急入學アレ入學次第第一號ヨリ送附スベシ規則書入用ノ向ハ郵券二錢ヲ送レ

學科并ニ受持講師

古事記、日本書紀(飯田武郷)神皇正統記(久米幹文)近古史、土佐日記、枕草紙(池邊義象)萬葉集(木村正辭)源氏物語、古今集(本居豐穎)竹取物語、徒然草(關根正直)皇室典範(增田于信)近世史、日本制度、貞永式目(萩野由之)美術史(小杉榲邨)德川百ヶ條(内藤耻叟)法曹至要抄(井上頼圀)文典假名遣(落合直文)

●前期十五冊後期廿冊ニテ全部完結既ニ後期十六號迄刊行、本年内ニ悉ク刊行スベシ●入學金五十錢月謝ハ一冊十錢宛ノ割爲替拂込ハ飯田町郵便電信支局●郵券代用ハ一割増

東京神田三崎町一丁目三番地　大八洲學校

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢
十二冊前金(半年分)	壹圓
全國無遞送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十一年九月四日印刷
同年九月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木頁雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所(電話番號本局八八)　國光社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國の譽れ 獄ノ花

全一冊

總クロース金文字入

菊版頗美本

九月中旬發行

紙數大凡三百五十頁

永洗筆密畫數圖

定價金五拾錢

郵稅六錢

神氣清潔なる一賢士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官の下殘忍酷薄なる獄吏の慘杖に苦悶するに當り最高尙優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰籍し其身神の安全を保ち後遂に或る植物の莖上に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚したる最嶄新奇秡高尙なる小說にして其獄界の悲慘なる實況高風なる賢士の境遇少女が純良なる無形を娯む人情の精微等寫し得て燎然讀者をして恍然ならしむ世の紳士淑女一本を備ひ坐右の友とせられんことを

富士谷御杖大人著

土佐日記燈

全三冊

菊版大和綴製本頗美麗

近刊

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話本局八八）國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）

（東京 國光社印刷部印刷）